



グローブレース

Groove Reearth

目次

謝礼	1
プロローグ	1
第1章 進路	
マルクとヤンバ	4
市場	5
ZAN	6
ふたりの進路	7
第2章 死闘	
卒業と決意	12
森の奥へ	13
死闘の始まり	14
勝利と敗北	16
第3章 来訪者	
進化人	20
進路の決定	22
最初の試練	23
第4章 試練	
先生と教え子	26
ヤンバの試練	27
病院	28
母の思い	30
報告	31
厳しい噂	33
ダイマール・シンズイ	34
トガル地区 ソートクの滝	36
第5章 裏側の地	
グリントゾーン	40
フェンカの森	42
マーヴォウ	44

出会い	46
ポイズナー	48
第6章 クラス分け	
森の能力試験	52
レベル20	54
ザンダン v s パワード	57
ガルベリア・サダー	59
病室にて	60
テンクールの能力	62
第7章 スパイクス	
ムサカ	66
森の王者	67
意図	70
川見草とカタイハの木	71
スパイクス v s ブルンクス	73
森の宴	74
謎の光る昆虫	76
第8章 学校生活	
壊れた端末とマーレイの報告	80
新端末	82
ないものねだり	83
授業開始	86
兄の言葉	87
養成学校 秘密の地下施設	89
第9章 進級試験	
試験当日	94
懐かしい感覚	96
ハトバの新兵器	98
テンクールとトラップ	100
カルカラー	103
コントルーラー	105
ハズラーとハトバの最終兵器	108
ヤンバの後悔	110
第10章 正体	
謎の行動	114
滝の秘密	116
魚人現る	118

試練の達成	121
”力”の正体	124
信じる心と自惚れ	127
森の管理者	130
ザン・イバーラ	134
第11章 探索	
謎の少年 モリト	138
有力候補	140
フーリン茸	144
マイトの出番	146
キノコの在り処	148
一千万ラースの味	151
キノコ強奪	154
三悪人の命運	157
第12章 弟子	
モリトの料理	160
プリニーティー	162
ギャザル・バーム	164
弟子の決定	167
喝采	169
モリトの正体	171
第13章 新しい体	
目覚め	178
トップシークレット	180
会長の来訪 明かされた秘密	183
寝てる間の世界変化	186
マルクの報告	189
テンクー 迫真のアピール	191
四人の未来	195
第1部 ～完～	
第一部のあとがきだったり	200
第2部 プロローグ	
森の中の二人	204
第1章 A級ライセンス	
サガスとの出会い	210
探索する力	212

試験会場	215
情報こそ全て	217
覚悟	219
企み	222
樹王	224
ライセンス獲得	227
第2章 武者修行	
グルベゾン	232
海上での戦い	234
踏んだり蹴ったり	236
海って最悪!	238
戦闘領域を脅かす者	240
地凶に無い島	242
食料確保	244
謎の猛獣	246
第3章 ZAN第二部隊	
グランビーブ	252
ファンクラブ	255
リディバルに向けて	258
送迎車	260
見えない敵	263
ウルヴァル	266
HASの実力	268
ボール・タクティクス	270
シャッターチャンス	273
スパイスフィア	275
第4章 民と意志と秘めたる力	
ミスフィア	280
緊急度”Z”の依頼	282
ダクト	284
ヨーナ	287
ニガミの木	289
ダイガリア	292
森の民	294
原因と結果	296
執拗な攻撃	299
光る巨人	301
解けた謎	303

第5章 サガスの力	
グツクル	308
ハンター・クラッシャー	311
新兵器	313
サガスの依頼	315
山菜の宝庫	318
ナガルモドキ	320
進化人、確定	323
サルマルコーン	326
第6章 魔境ダイナル	
デメオン	332
魔境へようこそ	334
落下、そして空へ	336
抜刀!	338
甘い誘い	341
無力	343
永久の眠り	345
夢から覚めたら	347
第7章 つかの間の休息	
緊急会議	352
それぞれの休暇	354
秘密兵器と再会	356
整備と閉じこもり	359
物色とパーティ	362
隊の編成と別れ	365
第8章 始動	
水の行方	370
カルサーとサガスからの連絡	371
モリトとの再開	373
からかいと悪意	375
試験開始	377
謎の二人組	378
自業自得	380
マザーツリー	381
それぞれの目的地へ	383
第9章 シェルドワール	
秘境の管理者	388

グランウルフとコダト草	389
5人の弟子	391
荒っぼい歓迎	393
ガンガルヴァン	394
ジャイアントジョイント	396
懐かしい声	398
シンド	400

謝礼

この本を、「簡単に本を作成し、公開し、販売できるシステム」を作っていただいた、ブクログのbauerに捧げる。

プロローグ

人間を忌み嫌う科学者が、人類を滅ぼすために選んだ手段は、他の生物を進化させる事だった。

完成した薬は、人間以外の生物（動植物）に作用し、劇的な進化をもたらした。かくして人類は地上を追われ、地下で生活することを余儀なくされた。

そして百年後...

3人の勇士が再び地上へと足を踏み出した。

1人は世界を歩き回り、世界地図を作成し、

1人は進化した動植物の辞典や危険度レベルを作り、

1人は動植物を食べ、調理し、グルメ本やランキングを公開した。

これがきっかけで、「アウトケープブーム」が起き、

力自慢や好奇心旺盛な学者、一儲けを企む者までもが地上へと踏み込んだ。

だが生き残ったのはほんの少数。

ブームは終息したかに見えたが、水面下では新しい産業が産声を上げる。

地上に出るための技術を磨く専門学校や、地上の生物を取引する市場、

体を護るための武器や防具を製造するメーカーなど、

それらをひとくくりにして人々はこう呼んだ。

「ハンター産業」と。

この物語は、それから500年後の未来に起こる出来事である。

第 1 章 進路

マルクとヤンバ

ミザル地区 パッドの森

暗闇に一人の少年が身を潜めていた。
時間は正午を過ぎた頃だというのに、森の中は暗いままだ。
時折、鳥や何か得体のしれない獣の鳴く声が聞こえる。

やがて、遠くから規則正しい足音が聞こえてきた。

来たか・・・

暗がりから現れたのは体長5 mの巨体を引きずるようにして
歩いてくる、＜サンガン＞と呼ばれる猛獣である。

猛獣が少年のいる場所を通り過ぎようとした瞬間、
少年は木陰から飛び出し、サンガンの腹に手刀を叩き込んだ！

それは心臓を突き破り、サンガンを即死させた。

「ははっ、今日のは大物だな」
少年は満足そうにつぶやく。

「お、マルク！ またサンガンを仕留めたのかよ！？ スゲェな」
そう言ったのは丸々と太った＜ブターノ＞を抱えた少年だ。
「ヤンバ、ブターノが好物なんだな？」
「違うよ！ 俺じゃ、せいぜいコイツを狩るのがやっとさ」
ヤンバはブターノをベチベチとたたいた。

「所で、こいつを市場に出すといくらぐらい？」
「ん、サンガンの相場は10万ラース程度だけど・・・おい！
こいつは＜ラプトサンガン＞じゃねえか！ 50万はくだらないぞ！」

「ラプト？ 何が違うんだ？」

「ハラを見ろよ、黄色いだろ？ これが＜希少種＞の証さ。すげえーな・・・」

「・・・そのブターノと交換しない？ ちょうど母さんの誕生日だし」

ヤンバはブターノをじっと見た。

「いいのかよ、これ3万ぐらいだぞ？」

「おまえんところは人数が多いだろ？ うちの2人だから・・・」

言い終わらないうちにヤンバが抱きついた。

「恩に切るぜ、助かったよ・・・」

「いいって。所でコイツ、1人で運べるか？」

「・・・ムリ。って、手伝えよ」

市場

市場では様々な食材がそろっていた。

だが、ほとんどは地元の間人が消費することなく、
地下へと運ばれていく。

「おう、ヤンバとマルク、今日はどんなのを入れてくれるんだ？」

「驚くなよ？ ラプトサンガンだぜ！」

後ろから台車に乗せられて運ばれてきたラプトサンガンに驚いた。

「間違いなく・・・驚いたねえ」

「ま、偶然倒せたんだけどな」

マルクは市場の雰囲気が変わったのに気づいた。

「・・・なんだか変な反応だな？」

「何が？」

おやじさんは、くくっと笑った。

「マルクは敏感だな。ラプトサンガンの値段はいくらだと思う？」

「ヤンバは50万ラースだって言ってたけど」

「・・・200万ラースだ」

「はあー！？ どーなてんの？」

ヤンバは驚きを隠せなかった。

おやじさんはあらましを説明した・・・

「この辺りの生態系（地上）の頂点にいるのがサンガンだが、最近別の生物が頂点を奪ったらしい。そのためか前年と比べると、捕獲量が4分の1に激減しているんだよ」

「どうりで雰囲気変わるわけだよ・・・」

「セリが終わったら口座に振り込んでおくからよ！」

「頼むよ」

「今日は、マルクは何も捕獲しなかったのかい？」

「ああ、ブターノの太ったやつをね」

「ずいぶん小物を捕ったね、売りにしないのか？」

「今日は母さんの誕生日だ。うちで食べる分だよ」

「なるほど、いいご馳走ってわけか」

ZAN

2人は、おやじさんと別れ、ヤンバの買い物に行くことにした。

「マルクのお陰で大金が入るよ。念願の防具買い替えができる」

ヤンバはある店の前で足を止めた。

「やっと・・・この店の防具が買える」

看板には＜ディフェンザ＞と書かれている。

「この防具屋、そんなにすごいのか？」

「何言ってるの！？ ＜ハンターズTV＞見てないの？」

最強のハンター集団＜ZAN＞がディフェンザの最高級品を使ってるんだよ！」

あまりの興奮ぶりにマルクはあとずさった。

「防具メーカーのトップ3に入ってるほどだよ。その割に値段が安いんだ。

＜ボウジー＞とか＜スペクティ＞は玄人向けの商品ばかりだよ」

店に入ると防具がずらりと並び、重厚な雰囲気醸し出している。
中央にそびえる透明なケースの中に、最高級品が展示され、客の視線を集めていた。
「500万か・・・高いな」
「そんなの、夢のまた夢さ。買うのはこっちだよ」

そこに飾られていたのは、ファーストモデルといって、
要するに入門者向けのアーマーだ。
「まずはここから始める。それで次々と高い防具に買い換えていくのさ」
「ふーん・・・で、買うのはアーマーだけ？」
「まあ・・・サンガンの値段によるな」

ヤンバは手持ちの端末をいじって口座残高を確認した。
「うそっ、500万も増えてるんだけど!？」
あわてて市場のおやじさんに電話を入れる。
「それ、便利だな」
「あれ、マルクって端末持ってないんだ。必需品だぞ」

「ヤンバか、驚いただろ？」
「どーなってんの、この値段は!」
「<地底人>が直接買いに来たんだよ。誰もセリに手が出せなかった・・・
いきなり500万ラースは、ひどいよなあ」
「・・・まあ、高く売れたんだから文句は言うまい」
「防具も奮発しちまえよ、じゃあな!」

「・・・ブーツも買おう」
「最高級のアーマー買えたじゃん」
「家族のために残しておくの」

こうしてヤンバは、ブースト機能のついたブーツのファーストモデルを手に入れた。

ふたりの進路

「もう、陽がかたむいてきたな」
「ヤンバの武器選びに時間を取られた」
「まあ・・・その甲斐あって、いいナイフを手に入れられたよ」

結局、ヤンバはアーマーとブーツ、それにナイフまで買っていた。

ふたりは夕焼けの中を家に向かって歩いている。
「あと少しで学校卒業だな。ヤンバは進路を決めてある？」
「オレはねー、ZANに入るために、養成学校に行くことに決めた」
「そっか、ちゃんと決めてるんだな」

ヤンバはマルクの表情が曇ったのを見逃さなかった。
「マルクは決めてないんだ」
「・・・僕は何したらいいんだ？」
「そりゃ決まってるだろ。マルクの特技を生かすなら、間違いなくハンターだよ」
「体を硬くできる”あれ”か？」
「そうだよ、そんな特技持ってるのマルクだけだよ。
まあ、ハンターの中には肉体改造する人もいるみたいだけど」

マルクはため息をついた。
「でもな・・・この特技のために他の選択肢をつぶしてしまうのは・・・」
「他に何があるって言うの？」
「・・・今のところ考えてない」
「だったら、オレと一緒に養成学校に行こうぜ！」
「別にZANに入りたいわけでもないしな」
「お前、欲が無いよな・・・」
「欲が無いわけじゃないよ。世界は広いからね、旅してみたい気もする」
「じゃあ、何を迷ってるの」
「母さんを1人にしたら寂しいかな、って」

ヤンバはマルクの背中をドンとたたいた。
「マルクらしい悩みだな！　ウチは大家族だからな・・・」

その夜、マルクは母親と、ブターノのご馳走を食べていた。

「ヤンバがサンガンを仕留めたそうね」
「うん、さすがだよ」
「・・・やさしいのね、マルクは」

慌てたマルクはむせてしまった。

「え？ な、何を言ってるのか意味わかんない」
「はいはい、ヤンバがしとめた事しておくわ」
母はクスッと笑った。
マルクは冷静を装うので必死だ。

「ところでマルク、進路は決まった？」
「・・・まだ」
「母さん、もう覚悟はできてるのよ。
あなたがサンガンを始めて仕留めた日からね」
「母さん、寂しくないの？ 僕がいなくなれば1人だよ？」
「寂しいけど・・・近くにヤンバの家族もいるから・・・大丈夫」
「・・・」

そのとき、扉が開け放たれた。
「マルクー！ うちらにもブターノご馳走しろよー！」

ぞろぞろとヤンバの家族が入ってきた。
「何だなんだ、示し合わせてたのかよ！？」
「お前が、いつまでも進路を決められないからだろーが」
「マルク君、母さんは我が家族に任せたまえ」
ヤンバの父親が自信満々に言った。

「マルク君、進路を決められないのを母さんのせいにしてない？」
「・・・そんなつもりは」
ヤンバの母親に言われたことにマルクはドキリとした。

・・・自分が納得してないだけなのかも・・・

「そんな事より、ご馳走だー！」
ヤンバの弟がテーブルの上にある料理を見てさげんだ。

第2章 死闘

卒業と決意

学校の卒業式当日。

結局、進路を決めないまま、この日を迎えた。

ただ、前と違っていたのは、決意を秘めていることだ。

「マルク、結局決められずじまいかよ」

「いや、決めた」

「え、そうなの！？ で、どこに行くんだ？」

「・・・まだ」

「決めてないじゃん・・・」

ヤンバは肩透かしをくらった。

「正確に言うと、ハンターになるか、それ以外か、の決め方を決めた」

「はあ？」

「つまり、パッドの森の頂点に君臨した猛獣を仕留めればハンターになる。

できなかつたら他の職につく」

「極端だな・・・死んだらどうするんだよ？」

「死なないように頑張るんだよ」

「・・・マルクなら何とかかなりそうな気もするけど」

卒業式は滞りなく終わり、学生が散り散りに帰っていく。

「ヤンバはいつ出発？」

「今日の夜。ほんとは明日にしようと思ってたんだが、

同じ養成学校に行く奴が30人もいたから・・・集団で行くことに決まった」

「なかなか競争が激しいね」

「・・・生き残るのは一握りなんだけどな」

「おっ、生き残るつもりなのね」

「当たり前。俺はZANに入るために生まれてきたんだから」

「ホントにZANが好きだね。さて・・・森に行くか」

森に向かって歩き出すマルクをヤンバが引き止める。
「見送りには・・・これなそうだな？」
「うん、明るいうちに森の奥に入って探さないと・・・
夜じゃ、こっちが不利だ」
「じゃ、ここでお別れだ」

ふたりは固い握手を交わした。

森の奥へ

「・・・この奥は、まだ行ったことなかったな」

装備を整えたマルクは、森の中にいた。
「ここから先はイワザル地区か。いるとすればこの先だな」

遠くから足音が聞こえてくる。
・・・この足音はサンガンだな。

マルクは木陰に身を潜め、やり過ごすことにした。

「フーツ、フーツ！」
サンガンは激しく息を吐いた。
とっさに身を引いたおかげで一撃から逃れることができた。

「危なかったな・・・サンガンのシッポは強烈だ」
身を潜めていた木は砕け、パラパラと空から降ってきた。

サンガンの荒い息は攻撃のしるし。
学校で習った通りだ。

「ガァァ！！」
大口を開けながらサンガンが突っ込んでくる。
「お前に用はない！」

足を硬化させると、サンガンの下あごを、おもいきり強打した。

「グァ？」

何が起こったかわからないサンガンに対して、

今度は眉間に手刀を叩き込む！

「ギョワァァ！」

そう叫んだ瞬間に、サンガンの鼻にこぶしを打ち込む。

サンガンは訳のわからない奇声を上げて森の奥へと消えた。

「鼻は弱点の1つ。死ぬことはないけど、撃退するくらいはできる」

やっぱり基礎知識は重要だ・・・しかし。

「今から戦う相手の情報は、何一つないんだな」

これは実力の勝負。

より強いほうが勝者となる。

死闘の始まり

森のさらに奥へと進むと、

次第にあたりが暗くなってきた。

・・・ここは<タカイセ>の群生地か。

タカイセの木は高いもので、

全長100メートルはある広葉樹。

大量の葉をつける事で知られている。

「確か薬になるんだったな。何の効果があるんだっけ？」

マルクは頭をひねったが、あまり勉強してなかったため、

思い出すことはなかった。

しばらく歩いていると、バリッバリッという奇妙な音が聞こえてきた。

・・・何の音だ？

息を潜めて辺りをうかがう。

その間にも謎の音は絶え間なく聞こえてくる。

・・・何か、骨を砕いているような。

マルクは音のする方に足を進める。

そこには、腹を裂かれ、身もだえしているサンガンがいた。

辺りには大量の血が飛び散っている。

何かがおかしい・・・大量出血で、

明らかに死んでいそうなサンガンが身もだえ？

サンガンからは、相変わらず骨を砕くような音が聞こえてくる。

「身もだえしてるわけじゃない。腹の中に何かがいる・・・」

思わず声に出してつぶやいた。

その声を聞いたか、音がピタリと止んだ。

次の瞬間、サンガンの腹から、何かが凄い速度で飛び出した！

速い！

マルクはとっさに、硬化させた腕でガードした。

謎の猛獣は腕に噛み付いた！

が、すぐに飛びのき、森の奥へと消えた。

「奴が新しい頂点か・・・」

腕に痛みを感じ、視線を向けると、一筋の血が流れていた。

「硬化させた腕に傷がついたか。噛む力は相当だ・・・」

マルクは殺されたサンガンを観察した。

「皮膚がナイフで切ったみたいにきれいだ・・・」

裂かれた場所をめくると、中はほとんど空だった。

骨すらも食いちぎられている。

「サンガンの皮膚を軽々と切り裂く爪を持っているって事だね」

あの姿を見る限り、ネコ科の進化タイプ。
しかも爪が発達しているようだ。

勝利と敗北

謎の猛獣を追って、さらに奥へと向かう。

奴は待ち構えているだろう。
得意の爪で攻撃してくるのは目に見えている。

足元の枯葉がサクサクと音を立てる。

頭上から、かすかに木を打つ音が聞こえた。

上から！？

上を向くと、猛獣が爪をむき出して襲いかかって来ていた！
「させるかよっ！」
硬化させたこぶしを獲物に向かって叩きつける！
「ギャウウ！」

奴は飛ばされながら、マルクの腕に爪を立てた。
「つう！」
腕に目を向けると、一直線に血が滲み出していた。

・・・深いな。

謎の猛獣は次々と木に飛び移りながら上昇していく。

「上手だな、こいつは・・・」
マルクは上を睨みながらつぶやいた。

学校出たての僕がかなう相手ではないのかも・・・

そう考えている間にも、腕からは血が流れ続けている。

再び木を打つ音が聞こえた。
背後から猛獣が迫る！

次の一手は・・・

「これだ！」
硬化させた手で、奴の腕をへし折る！

マルクは振り向きざまに猛獣の腕を砕き割った！
「ギャウウウ！」
奴は別の腕で太ももを引き裂く！
「ああああっ！」

傷は骨まで達していた。
あまりの痛みに気が遠くなる。

その隙に猛獣は、別の足にかぶりつく！
だが、足を硬化させたおかげで、噛みちぎられずにすんだ。

猛獣が足を離し、次の攻撃に移ろうとした瞬間、
砕けた足のため少しぐらついた一瞬をマルクは見逃さなかった。

「おらァ！！」
硬化させた手刀を猛獣の首に打ち下ろした！
その気迫はすさまじく、自分の腕が折れたのにも気づかなかった。

猛獣の頭がごろりと転がる。
「やった・・・」
安堵して全身の力が抜けた。

バスッ！ という音がして、振り返ると奴が立っていた。
「何が・・・」
いい終わらないうちに全身から血の気が引く。
マルクはそのまま前のめりに倒れた。

第3章 来訪者

進化人

シールドスーツを着ていなかったら、
今頃は生きていなかっただろう。

マルクは背中を深々と引き裂かれ、
その痛みと出血のショックで気を失った。

猛獣はマルクの首を噛み砕き、とどめを刺そうとしたが、
その足がピタリと止まった。

「やれやれ、一步遅かったら彼の命はなかっただろう……」
男の持つ武器が発する音に恐れをなした猛獣は、
あわてて逃げ出した。

「ライナー君、逃げてでも無駄だよ」

男の武器から発せられた発砲音と同時に、
ライナーと呼ばれた猛獣は、跡形もなく破裂した。

「さて、と」
男はマルクのそばへ近寄り、容態を確認した。
「おやおや？ こいつは驚いた、もう血が止まりかけている……」
男は傷を指で広げ、状態を確認する。

「背骨に当たらなくてよかったな。肋骨は何本か折れてるようだが」
不意の一撃を防いだのは、このスーツのお陰か。
それと……おそらく骨の強度が常人離れているため……

「こいつは、＜進化人＞か？ または、その手前といったところか」

何かが焦げる匂いでマルクは目を覚ました。

「ん・・・っ！ いてて」

「お、目が覚めたか。運がよかったな、少年よ」

「いったい、何がどうなって・・・」

マルクは激痛に顔をゆがめた。

「おそらく、ライナーが1匹だと思ってたんだろ？」

ライナーは、必ず2体で行動する。常識だよ」

「・・・習ってなかった」

「学校の勉強で満足しちゃだめだ。本や、ネットを活用しなきゃな」

「・・・」

「君は頑張った方さ、卒業したてでライナーを1匹しとめたんだから」

「僕は普通と違うからね」

「どんな特技があるんだ？」

「体を硬くできるんだよ。ライナーの爪には勝てなかったけど」

マルクはうつむいた。

「驚いた・・・ダイじいと同じ力か・・・」

「ダイじい？」

「俺の師匠。進化人さ」

進化人？

「知らないのは無理もない。自分が進化人でも、

それを知らなかったり、隠し通すからな」

「じゃ、僕も進化人？」

「いや、まだ未熟だな。ダイじいなんて、素手でカイダルマンパスを

しとめるくらいさ」

「うそっ！ 三大獣と呼ばれている奴を！？」

・・・それにひきかえ、僕の力は半端すぎるな。

足元のたき火で、パチパチと木の弾ける音がしている。

進路の決定

「そういえば、命の恩人の名前を聞いてなかった」

「俺はカルサーだ。よろしく」

「僕はマルク。カルサーさんは何しにこんな所へ？」

「タンバの市場から調査依頼が出ててね、俺が来たわけだ」

なるほど、サンガンの数が減ってるからか。

「じゃ、マルクは何しに？」

「・・・自分の進路を決めに」

カルサーはニヤリとした。

「進路は決まったようだね」

「・・・どうするか。ライナーを1匹、運良く倒せただけだし」

「君はハンターになる。はい、決定！」

マルクは迷惑そうにカルサーをにらんだ。

「あなたが何で決めるんですか」

「中途半端は嫌だろ？ 俺が師匠を紹介してやるよ」

ダイじいさんか。

「ま、弟子になれるかどうかは、師匠次第だけどな。

何しろ、弟子希望者が大量に押しかけてきたが、今のところ弟子は3人だけ」

「厳しいんですね」

「もしかすると、進化できる奴を探しているのかもな・・・」

と、言うことは、この人も進化人？

マルクの顔を見たカルサーは、しまった、と思った。

「・・・やれやれ、口が軽すぎたな」

「あなたは・・・どんな特技を？」

「俺の特技は、見えている物体なら確実に当てる銃の腕」

「百発百中ですか」

「進化といっても、それだけの話。体は常人と変わらない」

君と違ってね。

カルサーは、この言葉を噛み潰した。

知らない方が、いいこともある。

最初の試練

「さて、俺の仕事は終わり。君はそこに転がっている頭を市場に持っていってくれ」

「あなたが持っていかないの？」

「手柄は君にやるよ」

「・・・そうだ、ダイじいさんは、どこに住んでるの？」

「んー・・・さあね」

マルクはあっけにとられた。

「あちこちに行って、どこにいるかは俺も知らない」

「じゃ、どうやって紹介するつもりだったのさ？」

「これだよ」

と、ポケットから端末を取り出す。

「何だ・・・連絡取れるんじゃないですか」

「ところが、だ。ダイじいさんは電話に出ない」

「・・・意味ないですね」

「でも大丈夫。メールで送っとくよ」

「ついでに居場所も聞いてみてください」

「むり」

はあ？

マルクは呆れた顔をした。

「見る事を教えるだけで、精一杯だったからな」

カルサーは頭を叩いた。

おそらく石頭だ、ということだろう。

「まず、君への試練は、ダイじいさんの居場所を突き止めること」

「なかなか難しそうですね・・・」

「それが無理なら、あきらめる事だな」

「・・・体を治してからチャレンジしてみます」

「応急措置はしたが、医者には見せたほうがいいぞ」

「あ、助けられたのにお礼をしてませんでした」

マルクは深々と頭を下げた。

「命があるのはカルサーさんのおかげです・・・」

「あなたが、ハンターになれば、と言うなら、なってみせます」

カルサーはニヤリと笑った。

「その言葉を待ってたんだよ」

第4章 試練

先生と教え子

その後、カルサーと別れたマルクは、
ライナーの頭部を市場へと届けた。

「うわっ、その傷はどうした!？」
おやじさんは見るなり大声を上げた。

「おみやげだよ」
そう言って、手に持っていた頭部を差し出す。

「こいつは・・・おどろいた。
ライナーが、こんな所まで来ていたとは」
「一応、2体やっつけた。まだいるかどうかは、わからないけど」

おやじさんはマルクの体を見た。
「この応急措置は誰がやった？」

ありゃ、1人じゃないって、バレてる。

「おやじさんが調査依頼してたでしょ？ その人が手当てしてくれたんだ」
「ま、やることはやってんだな、アイツは」
「カルサーを知ってるの？」
「俺が先生をしていた時の、教え子さ」
「先生だったんだ・・・驚いたな」
「そうか？ まあ、この辺りでやってた訳じゃないしな。
ところで・・・傷は痛むか？」
「少し」
「おそらく、鎮痛剤を打たれてるな」
「ええ!？ もっと痛くなるの？」
「・・・しょうがねえ、俺が町まで送ってやるよ。
まったく、無茶しやがって」

「ごめん。でもやっと進路が決まったから、行った甲斐があったよ」

おやじさんは、フフンと鼻を鳴らした。

「ハンターになるんだな？」

「うん」

マルクの顔は晴れ渡っていた。

今まで抱えていたモヤモヤが、すべて消え去っていた。

ヤンバの試練

市場から町までは地下鉄で30分程度。

もっとスピードを出せば10分もかからないのだろうが、

自然に空いた洞窟にそって作られているため、いたるところが曲がりくねっている。

「ヤンバは目的地に着いたかな」

「あいつは確か、ZANの養成学校に行ったんだろ？」

だとすると、最初の試練を受けてるな」

「試練？」

「あそこまでは10日もかかるんだ。きつともう、飽きてる頃だろうよ」

「と、10日！？ すごいな・・・」

「昔は飛行機で1日しかかからなかったらしいがね」

「歴史で習いました。何で今は飛べないんですか？」

「空の覇者、＜ザグマルーン＞がいるからだろう。

それに、森を切り開いて滑走路を作るのも大変だろうね」

電車がゆっくりとホームへ到着した。

そして、2人を乗せて町へと向かう。

「そういえば、ダイじいさんって知ってます？」

「さあな、聞いたこともないが・・・」

「カルサーの師匠らしいよ。その人を紹介されたんですけど、どこにいるかわからなくて」
「有名な人なのか？ だったら、傷を治したら図書館でも行って、素性を調べてみな」
「ああ、その手があった・・・」

確かに自分はダイじいさんの事を何も知らない。
せめてフルネームくらいは知らなくちゃ。

電車はやがて、マルクが住む町へ到着した。

「確か、病院はホームの上だったな」
「直通のエレベーターがあるはずなんだけど・・・」
「ああ、これだ。」

スイッチを押すと、ドアが音もなく開く。
「ここまでで大丈夫だな？」
「はい、ありがとうございます」

マルクはお礼を言うと、エレベーターへと乗り込んだ。
扉が閉まると、マルクは手を振った。
おやじさんがそれに応える。

エレベーターは、ぐんぐん加速しながら上へと昇っていく。

病院

次に扉が開いた時には、もう病院の受付だった。

「あら、マルク君、って、どーしたのソレ!？」
「ご無沙汰です、ルナお婆さん」
「とにかく治療室へ！」
ルナお婆さんはマルクの腕をつかむと、走り始めた。

「受付がまだなんですけど・・・」
「馬鹿おっしやい！ あなた、急患よ！？」
「ち、血は止まっています！」
「応急処置しただけでしょ！」

扉がバンと、勢いよく開け放たれた。

「治療槽の用意はできてる！？」
「いつでもOKです」
「じゃ、裸になって！」
「・・・恥ずかしいですね」
「あら、小さい頃は喜んで、すっぽんぽんになっていたのに」
「僕、もう大人です」
「自分で脱がなきゃ、私が無理にでも脱がすわよ？」
「脱ぎますよ・・・」

服を脱ぐと、男の人が包帯を解き始めた。

「いてっ」
「うわー！ ヒドイキズですね！ 何したんです？」
「ちょっと・・・いた一っ！ もっとゆっくり解きませんか？」
「痛いのが我慢してでもすぐ解いて治療槽に入ったほうがいいわよ」
「あの装置は恐怖ですよ・・・」
「じゃあ、麻酔するかい？」
「したいのは山々ですけど、どの道眠らされるんだし」
「ははは、それもそうだね」

素っ裸になったマルクは、治療槽の中に入る。

「じゃ、いくよ」

下から水が湧き始める。

いや、水じゃない。酸素を含んだ薬品。

その液体は全身を包み、ついに口まで達する。

「やっぱり怖いな・・・」
「今更、止めないよー」

まったく。

ついに液体は頭上に達した。
そろそろ口を開けて、この液体を吸い込まなくちゃ。
マルクは思い切って口を開き、息をする。
いやおうなしに肺の中に液体が流れ込む。

一瞬苦しいが、すぐに楽になる。

ほんと、死んじゃいそうだよ。
液体の中で息をする、なんてね。

「それではスキャンします」

2人がモニターを見ながら何かをしゃべっているが、何も聞こえない。

やがてマルクは深い眠りについた。

母の思い

次に目が覚めた時、母親が目の前にいた。

「目が覚めた？ あら、何で後ろを向くの」
マルクは恥ずかしそうに後ろを向いた。

「ふふっ、恥ずかしいの？ 大人になったってことかな・・・」

治療槽の液体が引いていく。
「もう退院ですって。応急措置が素晴らしかったそうよ？」

マルクは治療槽から出てタオルで体を拭く。
「あ、傷がきれいに無くなって。すごいな・・・」
「まだ骨は完全じゃないみたいよ。しばらく静養しなさいって」
「・・・ま、丁度いいか。母さん、僕ハンターになるって決めたよ」

母がにこっと笑った。

「知ってるわ。市場のトーレスさんが話してくれたのよ」

「じゃあ、病院にいるってわかってたの？」

「すぐ飛んできたわよ。”死ぬことはない”って言ってたから、心配しなかったけど」

「・・・そういえば、母さんはいつも心配しないよね。

僕が未知の猛獣を捕まえに行くって言っても、

笑って送り出してくれたし」

「本当はとても心配・・・でも、父さんがよく言ってたわ。

心配しなくてもいい、必ず帰ってくるって思ってるだけでいいんだ、ってね。」

「父さんがそんなことを・・・」

「多分、心配しても無駄だって言いたかったんじゃないかしら。

私がどう思おうと、本人の生死とは関係ない、ってね」

「そんな事はないと思うけどな・・・思いは生死を左右すると思う」

「マルクは母さんに心配してほしいの？」

「・・・いや、心配するより、無事を祈ってほしい、かな」

母は、とびっきりの笑顔を見せ、僕に抱きついた。

服を着て病室を後にすると、前からルナおばさんが歩いてきた。

「ちゃんとおとなしくしてなきゃダメよ」

「子供じゃないんだから・・・」

「それもそうね。お大事に」

報告

マルクと母は、病院を出た後、図書館へと向かった。

ダイじいさんの情報を得るべく、ハンターに関する本を片っ端から調べるために。

「うわ、こんなにあるの!？」

”ハンター関係”と書かれたプレートが、奥まで吊り下げられている。

「1日じゃあ、終わらなそうね」

「毎日通うさ」

「マルクになら、きっと探せるわ」

「では、一番端から始めよう」

・・・日が暮れていく。

もちろん、ここは洞窟内に作られた町だが、洞窟の天井に貼り付けられている、無数のパネルが外の景色を映し出しているのだ。

結局、今日一日では、書棚の10分の1すら達していないだろう。

「やれやれ、骨が折れるな・・・」

「折れてる人が言うセリフではないわね？」

「・・・それもそうだけど」

家に帰ると、ヤンバの兄弟が上がりこんでいた。

「おい、マルク兄さんが帰ってきたぜ」

「ほんとだー、エモノは何をとったのー？」

「獲物はライナーだったよ」

「らいなーって、聞いたことないなあ」

「サンガンより強いぞ」

「げげっ、マジかよ・・・」

「じゃあ、ヤンバに一さんには勝てなそうだね」

「・・・戦ってみないとわからないよ」

「わかるよー! マルクに一さんがケガするほどだもん!」

「怪我ぐらい、誰でもするよ」

「そお? 今までケガしたマルクに一さんを、見たことなかったけどな」

意外と鋭い。

「それで、ヤンバの端末番号知ってる人いない？」

「あ、しってるー! まかせて」

一番幼いマーレイがボタンを無造作に連打する。

「マーレイは電話魔だからな」

「もっしー」

「あれ、マルクの家番号だ。遊びに来てるのか？」

「マルクにーさんが帰ってきたよー。代わるね」

「マルク、無事戻ったって事はハンターになるんだな」

「まあ・・・無事ではなかったけどな」

「げ、そんなに強い奴だったのか・・・」

「ライナーって知ってる？」

「確か・・・ZANのハトリが持ってたな。剥製で・・・」

「・・・剥製、ね」

「で、これからどーすんの？」

「森で出会った、カルサーって人に、ダイじいって人を紹介してもらってさ。

今、フルネームを探してるよ」

「ダイじい・・・まさか！！ ダイマール・シンズイなの！？ すげーぞ、それは！！」

あ、フルネームわかつちやった。

「今どこにいるか知ってる？」

「あの人は、ずっと旅してるからなあ・・・」

「さすが、一筋縄じゃいかなそうだね」

「俺もこっちで調べてみるよ。まあ、まだ電車の中なんだけど」

「大変だね」

「これもZANに入るためだ。じゃあな」

厳しい噂

ヤンバは端末をいじって電話を切る。

その顔は、にやけていた。

隣で寝ている、友人のハトバをたたき起こす。

「おい、とうとうマルクの進路が決まった！ハンターになるってよ！」
「・・・寝かせてくれよ。ま、良かったじゃない」
「しかもダイマールじいさんを紹介されたいらしい。さすがだぜ・・・」
「マジかよ！？でも、今どこにいるか知ってるのか？」
「それを今から端末を使って調べるところだ。あー！俺も頑張るぞー！！」
ヤンバは端末を操作し始めた。

「まあ、頑張るのは構わないけど、知ってるか？」
到着早々、振り分けされるらしい」
「ん？、なにそれ」
「養成学校には、AからFのクラスがあつてな。
入学するときに振り分けされるらしいぜ」
「・・・よく知ってるな」
「ありとあらゆる情報を調べまくったからな」
「で、何が問題なんだ？」
「ZANに入るためには、Aクラスに入らないとな。
1年に一度、Fクラスから終業だそうだ」
「げ！？強制的に辞めさせられるのかよ！」
「それほど厳しいのさ、現実はね」
「厳しいねえ・・・ま、今はそれどころじゃないか」
ヤンバは再び、猛烈な速さで端末を操作し始めた。

「母さん、フルネームわかったよ」
「あら、さすがヤンバね」
「明日、図書館に行って調べてみるよ」
「名前がわかれば、簡単に見つかるわ」
「情報はね。居場所は常に変わってるらしいよ」
「大丈夫だよ。マルク兄なら探せるって」
「そうそう、マルクに一さんは運がいいからねー」
「・・・お前ら、ポジティブ過ぎだろ・・・」

ダイマール・シンズイ

次の日、さっそく図書館で資料をあさる。

「ダイじい・・・凄い人なんだな」

『未開の地、＜シェルドワール＞を制覇。
カイダルマンバスを数体、研究機関に寄付。
奇跡の薬草、＜ドリーニルーマ＞の栽培に成功』
といった、驚くべき記事が続々出てくる。

「まさに現代の偉人、と言ったところか・・・」

マルクはふと、画面に映った写真に釘付けになった。
「あ・・・これってカルサーだ！」

そこには、ダイじいとカルサーと、あと1人、男の人が写っていた。
記事を見ると、『ダイマール氏の弟子、カルサーとエンドウ』と書かれている。

・・・弟子の2人目。・・・ということは。この人も進化人なのかな？

その後、すべての資料に目を通したが、
現在の居場所につながる情報は無かった。

居場所がわからないまま一ヶ月が過ぎた。
そして、マルクの体は完全に回復していたのだが・・・

「もういつでも出発できるってのに・・・情報が無い」
「ヤンバは何も言ってこないの？」
「調べても分からなかったって。ヤンバの方も大変そうだし」
「クラス分けがあるって言ってた、あれ？」
マルクは頷いた。

「とりあえず、ハンターの聖地に行ってくるかな・・・」
「そこなら情報が集まる？」
「さあ・・・」

そこに、マーレイが遊びに来た。
「マルクに一さん、一緒にハンターズTV見ようよー」
「ん、兄弟はどうしたんだい？」
「みんないないよー。サガス兄ちゃんが一緒に見ることになってたんだけど、
友達が森にさそって、行っちゃったし・・・」

そうか、サガスは狩ができる年齢になったんだ。

「じゃあ、一緒に見ようか」

「うん！ うちに行こっ」

ヤンバの家でハンターズTVを見ていると、
お馴染みのZANや、様々なハンターが紹介されていた。

「わたしのお気に入りだねー、＜フラス・ドトー＞なの」

「どんな人？」

「えー！ フラス知らないの！？ 今、人気なんだよー。スゴイビダンシなの！」

「ふーん・・・ハンターの腕に、顔は関係無くない？」

「フラスはウデも、ちょー一流！ つまり、パーフェクト！」

その時、テレビから、「ハンターズTV臨時ニュース！」という声が聞こえた。

「こちら、トガル地区から中継です！ なんと、ダイマール氏が1名、
弟子を募集することを伝えてきました！」

「おお、それは凄いニュースだ！

生ける伝説といわれたダイマール氏が、まさか弟子を・・・」

「ええと・・・日にちは6月1日、時間は正午、場所はトガル地区、ソートクの滝、です！」

「・・・ダイじいさん、弟子を大募集だ・・・」

「マルクに一さん、よかったね」

「ところで、トガル地区、ソートクの滝って・・・どこ？」

「しょーがないわね、テレビをネットに切り替えてっと・・・

ワールドマップ・プロで検索」

テレビには、滝を中心に、森が取り囲んでいる地図が表示された。

トガル地区 ソートクの滝

「もうちょっと全体を表示して。あと、レベル表示できる？」

「まかせて」

リモコンでピコピコ操作すると、やっと近くの町が現れた。

「グリントゾーンの町・・・って、地球の反対側じゃん！」

「ヤンバに一さんよりも遠い？」

「多分、近くにZANの養成学校もあるかも」

地図を広げると、広大な森に囲まれた養成学校が現れた。

「えーっと、レベル表示は・・・滝の周りがレベル30！？・・・なかなか厳しいねえ」

「サンガン倒せるんだから、らくしよーでしょ？」

「サンガンはレベル20だよ・・・ライナーですら25だぞ？」

「でも、ダイマールさんの弟子になるのには、行くしかないでしょー？」

「・・・まあ、そうだね」

マルクは再び、図書館に行き、トガル地区に存在する猛獣を調査した。

「・・・全部借りていくわけにはいかないか」

そこには本が10冊以上あった。

「必要などころだけコピーして持っていこう・・・あ！」

マルクの目に留まったのは、ブックリーダーと呼ばれている読書用端末だ。

「あれを1つ借りていけば、かさばらないか」

調べた本をブックリーダーに登録してもらい、それを借りることにした。

「・・・今度、端末買わなきゃな・・・」

家に帰ったマルクは、出発の準備を整えた。

「母さん、行ってくるね」

「もう行くの？ 6月はまだ先よ？」

「電車の時間があるし、滝にたどり着くのに、何日かかるか判らないんだ。」

「そう。じゃ、行ってらっしゃい。無事を祈ってるわね・・・」

「うん・・・」

マルクは母さんに抱きついた。

「マルクったら！・・・もう」

母の目は潤んでいた。

「必ず帰ってくるから安心して・・・それじゃ」

そう言い終ると、家を勢いよく飛び出した。

第5章 裏側の地

グリントゾーン

駅に到着すると、グリントゾーン行きのチケットを買った。

結構な金額になったが、サンガンを何体も倒して貯金してたので
たいした痛手にならない。

もっとも、家のために極力お金を使うことは控えないと。

電車が到着し、乗り込む。

「いよいよ、この町から離れるのか・・・こんな日が来るとはね」

電車はゆっくりと動き出す。

「待ってるよ、ダイジい。今、会いに行くぜ！」

1時間後・・・

マルクはぐったりしていた。

なれない電車で、しかも長時間乗り続ける試練に、まいっていた。

「こんなところで、まいってたまるか・・・」

しかし、恐るべし地球・・・デカイわ・・・」

電車は、暗い洞窟を走り続ける。

「そうだ、本を読むのに好都合じゃないか！」

ブックリーダーを取り出すと、電源を入れる。

すると、登録された本が画面に並ぶ。

「まずは・・・これからいこう」

その後、すべての本を読み終えても、まだ到着しない。

仕方なく、もう一度、すべての本を読むことにした。

「こんなことなら、もっと借りてくるべきだったな」

何度か電車を乗り換え、ついに掲示板に
「トガル」の文字が見えるようになった。

その頃から、がたいのいい男や、
ハンター装備の充実した集団を見かけるようになった。

・・・ハンターの聖地、＜トルエモ＞でもないのに、ハンターらしき人が
ここにいるってことは・・・ダイじいの弟子希望？

次第に電車は満席になり、立っている人も出始めた。

・・・ちょっと待てよ？ 今日だけでこれだけ来てるってことは・・・
最終的に人数何人になるんだよ！？

マルクの予想は的中し、皆がグリントゾーン駅で降りた。

町に出てみて愕然とする。
ハンターらしき人が、大勢歩いていたからだ。

近くにあった店に入り、聞いてみる。
「あの一、ハンターって、いつもこんなにいるんですか？」

その質問に店長が答える。
「いや、いつもはもっと少ないよ。まあ、他の町よりは多いけどね」
「もしかしてダイマールさんの・・・」
「そうそう、ん？ 君も同じ目当てで来たんだろ？」
「・・・よくわかりましたね」
「皆、同じ目をしているからさ。期待に目が輝いている」
「・・・でも弟子は1人だけ」
「彼が弟子をとるってだけでも奇跡なんだから」
「何だか、泣けてきます・・・」

それを聞いた店長は大笑いした。
「他のハンターに気押されてるな！ やる前から諦めてちゃダメだ。
特にダイマール氏の場合はね」
「どういう意味でしょう？」
「あの人の選び方は特殊だ。何を基準に選んでるんだか、
一般人の私にや、さっぱりわからんからね」

「・・・詳しいですね」

「あいつとは、おさななじみでね。世界を旅する前は、うちの店にしょっちゅう出入りしてたのさ」

店長と別れた後、電話ボックスを探して、家に電話した。

「母さん、グリントゾーンに到着したよ」

「地獄の電車旅は、どうだった？」

「参ったよ。本がなければ、退屈死してたかも」

「この後はどうするの？」

「早速、森に入ろうと思ってる。怪我で鈍った体を鍛えなきゃ」

「弟子になれることを祈ってるわ」

「うん、ありがとう」

マルクは電話を切った。

次は、いつ電話できるだろう・・・

「端末を手に入れなきゃね・・・弟子になった記念に」

今はまだないほうがいい。

「さて、森はどっちだ？」

フェンカの森

町で地図を手に入れると、早速森へと分け入った。

この森は、パッドの森ほど、うっそうとしていない。

空は木々に隠れて見えないが、葉を通して光が森へと降り注いでいる。

「ここがフェンカの森・・・本で見た限りでは、

動物よりも植物の数が、圧倒的に多いらしい」

地面は、ふわふわしていて、足元を見ると、コケがびっしり覆っていた。

「すごい・・・いろんな種類のコケがある・・・
探せば、葉になるコケも見つかりそうだ」

ふと、マルクは視線を感じた。
後ろに目をやると、毛むくじらの塊が目前に迫っている！

「うわっ！」
間一髪、頭を引っ込めたおかげで、必殺の一撃を受けずに済んだ。

「こいつは・・・<キャロウ>！羽の生えた化け猫だ！」
前方に着地したキャロウは、「フーッ」と威嚇音を発した。

こいつには刃物は効かない。
もじゃもじゃとした毛が、とても硬くできているらしい。

「ならば・・・思い切り殴ってみるか！」
手を硬化させたマルクは、飛び立とうとしたキャロウを
グーの手でぶん殴った！

だが、毛がクッションになって体には届かない。
キャロウは吹っ飛ばされた力を利用して木に飛びつき、
スルスルと登りだした。

「お前もライナーみたいな戦い方をするのか？」
しかし・・・森の木には<マーヴォウ>という猛獣が潜んでいる。
だからそんなに上には登れないはずだ。

上から、木を蹴るような音が響く。
おそらく、木を飛び回って速度を上げているな・・・

「グーでもダメ、手刀でも切れそうにないなら・・・」
マルクは人差し指を立てた。
「針で突き刺せばいいんだ」

後方から、恐るべき速さでキャロウが迫る。
とはいっても、風切り音がひどいので、すぐに発見できる。

「せいっ！」
鈍い音が聞こえ、キャロウが悲鳴を上げ地面に落ちた。

「やった！」

指先を見ると、少し血が付いている。

キャロウを捕獲しようと、足を進めた時、何か違和感を感じた。

木から・・・手が出ている？

その手は、気絶しているキャロウを掴むと、木の上に引き上げ始めた。

「・・・これは、まさか」

声を聞いたのか、木陰から丸い目が覗いた。

マーヴォウだ！

マーヴォウ

マルクは、本に書いてあった通りに実行する。

マーヴォウの目を見つめながら、ウインクしたのだ。
するとマーヴォウは、こちらに向かってウインクを返し、
木の上に登って行った。もちろん、キャロウを掴んだまま。

「本を読んでいなかったら、危ないところだ・・・」

マーヴォウのウインクは、仲間の証。
もしこれを怠ると、敵だと思われて、一巻の終わり。

見た目は、ゆったりのんびりしているが、
彼らは「木上の王者」と呼ばれるくらい強い。

木の上で、彼らに敵はいない。

もちろん・・・地上では彼らも獲物に過ぎないが。

「今日はこの辺でテントを張るか」

リュックを置き、寝床の準備に取り掛かる。

この辺りは、森の切れ目なのか、空が見えている。

近くに川も流れていて、飲み水に事欠かない。

「一応、シールド寝袋と、シールドテントは持ってきたけど、

今夜からは体全体を硬化させて寝てみるか」

ライナー戦で感じた力不足を解消するために、

より強力な硬化の力を手に入れる・・・

ダイじいは、カイダルマンバスを素手で倒せる程だ。

カイダルマンバスといえば、通り名が、「シールドブレイカー」と

名付けられるほど、最新の防具すら一撃で切り裂く。

そんな爪をものもしないなんて・・・

マルクは自分の手を硬化させてみた。

「手だけなら、ナイフで切ったって切れないけどね」

しかし全身を硬化させると、果たして、どの程度役に立つか・・・

と不安なほどヤワだ。

「寝て、起きるまで硬化させ続けられれば、強化できると思うけど・・・

こんな修行でいいのかな」

すっかり夜も更け、見えるのは月と星だけになった。

「さて、どうやったら寝ている最中も、硬化してたか知ることができる？」

マルクは、母さんにもらったナイフを取り出した。

「お父さんのナイフ・・・これを強く握り締めて寝れば・・・」

体を硬化させ、ナイフを握り締める。

「おやすみ」

出会い

真夜中、
マルクは何かの足音で目を覚ました。

「・・・硬化、してないね。ナイフも放しちゃってるし」

だが、それどころではない。
足音の謎を調べなければ。

マルクはテントからそっと顔を出す。
森の中には、小さな2つの目が光っている。

「キュキュッ！」
猛獣は奇声を発して突進して来た！
だが、硬化させた手で、簡単に捕らえられた。

「何だ、こいつ」
全身に棘を持ったネズミのような生物が、そこにはいた。

「確か・・・＜シググル＞とかいう奴だっけ」
手を放すと、テントをかじり始めた。
噛み切れないとわかると、針を突き立てた・・・が、
この程度でシールドテントに穴を開けられるはずもない。

「最下位ランクのテントなんだけど、少しは役に立つね」
マルクはリュックからお菓子を取り出すと、それを手の中に隠した。

「ほら、ここにお菓子があるよ」
シググルは近寄り、匂いを嗅ぎ始めた。
気に入ったのか、手をこじ開けようと必死になっている。

「よし、このまま寝てみるか」

・・・朝起きたら、手が無くなっていないか？

少し恐怖を感じながら眠りについた。

朝、マルクの手は血だらけになっていた。

握っていたはずのお菓子は、すっかり無くなっていた。

「・・・硬化が解けた後も、お菓子を放さなかったのかな？」

すぐ手が開いたなら、こんな血まみれにはなっていなかっただろう。

リュックから救急セットを取り出し、バンソウコウを手に巻きつける。

「これも一番安い奴だったから、塗るタイプのバンソウコウは入っていないのか。」

安かろう悪かろう、だね。

テントを片付けようとしたら、隅っこにシッグルが寝ていた。

「外に出てくれよ」

シッグルは、のそのそとテントの外に出た。

「おいおい、そんなんじゃ、キャロウに捕まっちゃうぞ」

すると、のそのそとマルクの足にしがみ付く。

「こいつ、テントが気に入ったのか？ 困ったな・・・」

マルクが食事の準備に、せわしなく動き回っても、

足にしがみ付いたまま離れようとしなない。

「一応、釣り道具も持ってきては見たんだけど・・・」

マニュアルを見ながら餌をつけて川に垂らしてみる。

「川には<マイカモウ>って魚がいるんだったよな」

頭の中で、覚えた記憶を探る。

本には、森で一番美味だと書かれていたはず。

期待に胸を膨らませつつ、ウキを見つめていると、

急に引っ張られた！

「かかった！？」

マルクは、あわてて引っ張り返す。

竿が勢いよくなる。

「この竿、大丈夫なのか？ ずいぶん曲がってるけど・・・」

格闘すること10分・・・ついに決着がつく。

マルクの買った竿は、真っ二つに折れてしまった！

「・・・やっぱり、安物は駄目だな」

マニュアルをもう一度確認すると、

”この竿で釣ることのできる魚の重量は、50キロまで”
と、書かれていた。

「50キロ越えのマイカモウだった・・・かな？」

結局、朝食は持ってきた栄養食を食べる。

「おまえもいるか？」

ひとかけらを、シググルに差し出す。

シググルは再び匂いを嗅ぎ、かけらを口いっぱい頬張った。

「何でも食うな」

ブックリーダーを操作して、シググルについて調べると、
雑食である、と書かれていた。

「さて、食事も済んだし・・・何やるか」

修行したいが、調子よく獲物が現れるわけもない。

「そうだ、寝ている間に、硬化の力が切れるなら、
起きてる間中、硬化を続ければいい」

ポイズナー

マルクはテントをたたみ、リュックを背負って
森の奥へと向かうことにした。

少しずつソートクの滝に近づいていく作戦だ。

苔むした地面をゆっくり歩いていく。

時々、きれいな花を咲かせたコケを観察したり、
棘のあるツルを切ってリュックにしまったりする。

ふと気がつくと、硬化が解けていた。

「・・・気を緩めると解けてしまうのか・・・気を引き締めないと」

何とか無意識になっても、硬化を持続できるようにならなければ、この先の戦闘に耐えられないだろう。

そんなことを考えて歩いていると、

目の前の枝に実がなっているのに気がついた。

「あれって・・・<マイトウ>じゃないか！ 10年に1度しか収穫できない、幻の・・・」

驚きに気があせり、周囲を確認もしないで走り出し、気がついた時には手遅れだった。

「うわっ、何だ、このネバネバは・・・あっ！」

マルクの脳裏に、本で見た光景が浮かんだ。

”ポイズナーが仕掛ける網に注意！”

その写真には、捕らえられたキャロウの成れの果てが写っていた。

ま、まずい！

だが、時すでに遅く、忍び寄ったポイズナーの、強烈な一撃が襲った！

全身の硬化はポイズナーの牙に、何の役にも立たなかった。激痛が襲ったかと思うと、体の力が抜けていく。

ポイズナーの毒に致死性はないが、体の力を入らなくさせ、気を失わせるだけの力がある。

そして、それで事足りる。

後は、動かなくなった獲物に消化液を流し込み、中身だけ溶かして吸い出してしまうためだ。

僕は、こんなところで・・・母さんを悲しませちゃうな・・・

マルクは気を失う前に、妙なものを見た。

ポイズナーに何かが飛びつき、両者は取っ組み合いになった。

気がつくと、ポイズナーの網で、体中ベトベトだった。

「あれ、まだ生きてる……」

隣を見ると、網の上に、お腹を膨らせたシググルが寝ている。

「……やれやれ、まさか君に助けられるとはね」

シググルにポイズナーの毒は効かない。

この森で、ポイズナーが唯一恐れているものはシググルなのだ。

マルクはなんとか腕を引き抜くと、ナイフを使って網を切り始めた。

「網というか……蜘蛛の巣だよな。」

こんなに細いのに、人の体も支えるなんて」

目を覚ましたシググルが頭の上に飛び乗る。

「ありがとね。君を朝食にしてたら、命はなかったよ」

シググルは満足そうに鳴いた。

マルク達は、さらに森の奥へ進んでいた。

シググルは、すっかりなついてしまったので、名前をつけることにした。

「よく食べるから”イート”でどうかな……」

それとも、トゲトゲだから”スパイク”かなー……」

なかなかいい名前が思いつかない。

「うーん、なら、自分の名前から”マ”を取って……」

”マイト”！ お、かっこいいね！」

こうしてマルクとマイトの、1人と1匹の旅は続く。

マルクは少しずつ、自分の力の制御を体で覚えていき、

硬化を無意識で持続させる事に成功した。

ただし、起きてる間だけだが。

第6章 クラス分け

森の能力試験

その頃、ヤンバは疲れ果てていた。

「くそ、〈森の能力試験〉は、キツイと言われてたけど・・・
ここまでは・・・」

端末で、現在地点を確認する。

「現在のCエリアは、レベル15か・・・
あと何キロで次のエリアに行けるんだよ・・・」

できるだけ先に進まなければならない。
先に進めば進むほど、Aクラスに近くなる。

「これは、ZANのメンバーになるための、試練なんだ・・・」
腕に光るリングを見つめながら、
自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

ヤンバが長い電車の旅を終え、ZAN養成学校に到着すると、
入り口でリングを手渡された。

「クラスを決めるにあたり、今の実力を知る必要がある。
この森はレベルごとに仕切られており、
どこまで進めるかによってクラスが決定する。
だが、無理は禁物だ。死んだら何もならない。
もしもの時や、もう進めないと判断した場合は、
このリングのボタンを押すこと。
そうすれば我々が救出に向かう。」

ヤンバは、恐る恐る聞いた。
「あの・・・どのエリアまで行けばAクラスに入れますか？」
「あまり無理をさせたくないんだが・・・Gエリアに行くことができれば
間違いなく入れるだろう」

「Gって・・・げ、レベル45！」

「年に何回も進級試験がある。今、無理にAクラスに入らなくても、何度もチャンスはあるんだ。わかったね？」

「はい、でも・・・できるだけ頑張ってみます！」

そして、現在に至る。

ヤンバは装備を確認する。

「ブーストブーツのバッテリー量は50%か・・・少し使いすぎだな」

ブーストブーツは、跳躍力や走行力をアシストする便利な靴だ。

だが、ヤンバの買ったエントリーモデルには回生充電機能が付いていないので、充電した分しか役に立たない。

「ナイフのバッテリーは・・・げ、30%！？

ちっ、＜ジャンバラ＞に会わなければ、こんなに消費しなくて済んだのに・・・」

このナイフは、超音波振動で硬いものでも切ることができる。

刃りで、ザワザワと、忙しない音が聞こえてくる。

「・・・またジャンバラかよ！ もう、構ってる暇もないっての！」

現れたのは、ジャンバラと呼ばれるダンゴムシだ。

大きさは、ヤンバの膝ほどもある。

しかも結構なスピードで追ってくるから厄介だ。

ジャンバラ最大の武器は、体内にいる微生物。

一度噛まれれば、その部分は腐ってしまう。

獲物の体全体を噛むことによって腐らせ、その後食べるのだ。

ヤンバは再び走り始める。

それをジャンバラが追ってゆく。

「ブーストブーツ、最大出力！」

ブーツに仕込まれているモーターが、うなりを上げる。

・・・何とかこのエリアから抜ける。

次のエリアは、さほど移動速度の速い奴はいなかったはず。

ヤンバは前傾姿勢を崩さずに駆け抜ける。

ジャンバラは、やっと追うのをあきらめたようだ。

目の前に柵が見えた。
エリアを区切っている柵だ。
「出口見つけ！」

出口にはハンターが立っていた。
「おや、ヤンバ君、やっと来たね」
「あ、入り口で会った人！」
「私の名前はセズだ。以後よろしく」
「・・・セズさん、いや、セズ先生ですか？」
「ZAN養成学校では”師匠”と呼ぶがね。まあ、先生でも構わんよ」
「では・・・次のエリアに行ってきます」
「無事を祈る」

レベル20

次のエリアは、レベル20。

すでに下調べはしてある。
ここには、<ザندان>や、<パワード>といった、力自慢の連中が多い。
その代わり、一撃さえ交わせれば簡単に逃げ切れる。

近くで木が音を立てて砕けた。
「もうお出ましですかい？」

現れたのはパワードだ！
だが、様子がおかしい。
パワードは、目の焦点が合っていないような・・・？

そしてそのまま・・・前のめりに倒れた。

「やあ、誰だい君？」
パワードの背中に誰かが飛び乗った。

「俺かい？俺はヤンバっていうんだ」

「ヤンバかい。僕はテンクーだ」

「それ、どうしたの」

「倒したのさ」

ヤンバは驚いて声も出ない。

テンクーは、驚いているヤンバが面白くて笑った。

「パスワードは、生まれ故郷の＜パントル地区＞で、ポピュラーだからね。

弱点は知ってるんだよ」

「よく知ってるって…パスワードはレベル20だろ？」

「この程度で驚いてちゃダメだなあ」

「まあな…そりゃそうかもしれないけど」

その時、近くから軽快な足音が聞こえてきた。

「おっ！＜タバーン＞だ。歩き疲れてたから、丁度いいや」

そう言うと、現れたタバーンの背中に飛び乗り、どこかへ行ってしまった。

「何だったんだ…ま、いい方法を教えてもらったよ」

すぐそばで、うなり声が聞こえる。

「…パスワードが…起きたァー！！！」

パスワードが巨大な口でヤンバを一飲みしようとしたが、

ブーストブーツの跳躍力で、何とか難を逃れた。

「しとめたんじゃ、なかったのかよ！？それとも気絶させただけ！？」

ヤンバは頭を回転させ、情報を探り出す。

「えーっと、タバーン、タバーン…そうだ、確か走り続けてる奴だったな」

逆に言うと、走り続けていなければ、他の猛獣に簡単に捕食されてしまうから。

「そのエネルギー源は木の実、だとすれば…」

走りながら木の実を探す。

その後をパスワードが追いかける。

「これだ！」

目的の木を見つけ、木登りを開始。

音を立てないように、ゆっくりと登る。

近くにパワーがいるが・・・奴は鼻が利かない。
見つかりさえしなければ、木ごとなぎ倒されずにすむ。

「グルルル・・・」
パワーが近づく。
ヤンバは、緊張の面持ちで見つめている。

頼む・・・どこかに行ってくれ・・・

何と、パワーは木に居座ってしまった。

見つかったわけじゃない。勘でも働くのか？
・・・いや、俺を諦めて、タバーンを待ち伏せて狩るつもりだ・・・

ヤンバはベルトにつけている、唯一の飛び道具を使うことに決めた。

何と、パチンコだ！

ただのパチンコと思うなかれ・・・これは、ハンター御用達のパチンコだ！
ZANのメンバーである、＜カルカラー＞が得意とする武器なのだ。
その名も、＜サイレントスリングショット＞。
ゴムを弾いた音が、まったくしない優れものだ。

ヤンバは＜発破玉＞を取り出し、遠くの木に目がけて発射した。

爆発音が響くと、パワーが音のした方へ歩いていった。
すると、聞き覚えのある足音が近づいてきた。

来たー！！

振り返るパワー。
だが、間に合わないと知るや、巨大な咆哮を響かせた。

ヤンバは木の上から飛び降り、タバーンの背中に飛び乗った。
「よっしゃー！ う、うわあ、振り落とされるー！」

慌てて急加速したタバーンに落とされそうになりながらも、
やっとの思いで角を掴み、その場から遠ざかった。

「そういえば、タバーンの操作ってどうやるの？」

・・・後の祭りってこのことだな。

「えーい、仕方ない・・・端末を確認して、
進路から外れそうなら飛び降りるしかないか・・・」

ザンダン v s パワード

<タヌパの木>

” タバーン唯一の食べ物。そして飲み物でもあるタヌパの実。
それを提供する代わりに、種を遠くへ運んでもらっている。
タヌパが無ければタバーンは生存できず、タバーンがいなければ
タヌパは繁栄できないという、共存関係にある”

「ふーん、スゴイな、お前らの関係」

ヤンバは片手で角をつかみ、片手で端末を操作している。
どうやら、無事に次のゲートに向かっているようだ。

「ん・・・あれは、ザンダンだ！」

前方にザンダンが現れた。
その顔は赤く染まっている。

「やばい・・・攻撃体勢だ」

ザンダンは強靱な腕と、鋭い爪を持つ。
タバーンなんて一撃で仕留められてしまう・・・

タバーンは速度をアップでザンダンを振り切る！

「ははは、楽勝だぜ！」

ヤンバが歓喜の声を上げたと同時に、
木陰から2体目のザンダンが現れた！

「なぁー！？ 連係プレー！」

ザンダンの爪がタバーンを襲う！
タバーンは頭を引っ込めてやり過ごしたが、

爪の軌道上にはヤンバがいる。

もはや考える猶予もなかった。
逃げる道はひとつ・・・飛び降りるしかない！

ものすごい衝撃がヤンバを襲う。
「いってえー！ くそ、アーマーを着てなかったら、骨が折れてるところだ」

ヤンバは起き上がって状況を確認した。
すでにタバーンは見る影も無く、ザンダンが2体で、こちらを狙っている。
「ずるくない？ ザンダンがグループを組むなんて情報は無かったのに・・・」

奴らは威嚇音を発しながら近づいてくる。
「一度に2体・・・いや、1体だって逃げるしかないってのに」

ヤンバは策を巡らす。
・・・またジャンプしてやり過ぎすか？
いや、トップスピードで逃げ切るしかないか。

ぐちゅっ！

森に気味の悪い音が響いた。
ヤンバに気を取られていたザンダン1体が、
パワードに頭を噛み潰されたのだ。

もう1体のザンダンは逃げるしかない。
2体で戦えば、勝つ確立は半々だが、
1体では相手に傷を負わせる事しかできない。

パワードは1体で満足したのか、そのまま食事を始めた。

ヤンバは騒ぎに乗じて脱出に成功！
「助かったぜパワード・・・さて、ゲートまでの距離は・・・」
端末を確認すると、地図がありえない場所を指し示している。

「GPS機能が、さっきのショックで逝ってしまった・・・」
肩を落とすヤンバ。
「仕方ない、柵に沿って歩くしかないな」

ガルベリア・サダー

森の構造はわかっている。

いくつもの柵に囲まれてるってことは、
柵を辿っていけばゲートにたどり着くってことだ。

「効率悪いから、やりたくはないけど・・・これしかない」
ヤンバは仕方なく柵を辿っていく。

しばらく歩くと、遠くにゲートが見えてきたが、
まだ油断はできない。
視線を柵の向こうに移すと、猛獣がこちらに近づいて来ていた。

毛がフサフサの白い巨体を揺すりながら現れ、
ヤンバの横を歩き始めた。

「・・・次のエリア、恐怖の存在、＜ガルベリア＞か・・・」

”ガルベリア・・・パワー、スピード共にバランスが取れた猛獣。
レベル25攻略の為には、ガルベリア対策を立てておかなければならない”

”ZAN攻略講座”というブログに、そう書いてあったような。

「しかし君、何で尻尾が黒いのかな？」

尻尾が黒いのは、希少種の＜ガルベリア・サダー＞で、
ガルベリアの中でも、強力な身体能力を持っている証。

「ガルベリア・サダーは、レベル32・・・

君、そっちのエリアに存在しちゃいけないはずなんだけど？」

そいつは一・・・軽々と柵を破壊し、こっちのエリアへと侵入した。

背筋が凍りつく。
ヤンバは一刻も早く立ち去りたくなり、
気付くと、ブーストブーツのマックスパワーでジャンプしていた。

そして、それがヤンバの命を救う。
だが、左足は使い物にならなくなった。

「ぐうう！ 足が・・・」
ヤンバの足は一瞬にして切り裂かれ、かろうじて皮で繋がっている程度だ。

あまりの激痛に、一瞬意識が飛ぶ。

ぐぐ・・・何とか着地しなければ・・・
だが、こんな高さから片足で着地できるのか？

下を見ると、ゲートにいたハンターが、
慌ててガルベリアの捕獲に走っている。

その後、何とか片足で着地したヤンバだったが、
右足の骨は砕け、関節は潰れてしまった。

もうろうとする意識の中、ハンターが放った網で、
ガルベリアが捕らえられた事を確認した。

病室にて

気がつくと、ベッドに寝ていた。

「お、目が覚めた？」

「・・・テンクー？」

「おや、覚えていてくれたんだ」

「君の登場シーンは、強烈だったからねえ」

「ははは、そうかもね」

ヤンバはある事を思い出した。

「そうだ、足はどうなったんだ？」

掛け布団を引っぺがすと、2つ並んだ足が見えた。

「・・・無事か」

「片足は義足だったりして？」

「ちゃんと指先まで動くよ」

ヤンバはニヤリと笑った。

病室の扉が開かれる。

「もう起きていたか。しばらく安静にしてた方がいい」

「センズ先生、お見舞いに来てくれたんですか」

「まあ、こちらの落ち度があったものでね。で、君の足だが、

1日もすれば切断された方の足は元通りだ」

「・・・もう片方は？」

「右足は複雑骨折してたし、関節もひどい状態だったからな。

一応、元に戻してあるが、1週間は歩けないと思っていてくれ」

「1週間か・・・」

「心配ないよ。聞いた話だと、授業が始まるのは、まだ先だよ」

「えっ、すぐに始まるわけじゃないんだ」

センズは、わざとらしく咳をした。

「まー、怪我してるのは君だけじゃないって事だ。

中には腹を半分くらい食いちぎられた人もいるからな」

「・・・内臓とかも再生できるの？」

「もちろん。ZANの医療施設は最新の設備が整っている。

脳が問題なければ何とかなる」

「・・・ってことは、頭が無くなったらアウトですね」

「それはそうだ。再生したところで、人間ではいられないだろう」

「記憶の再生は不可能ってことですね」

テンクーが、さらりと言ったのけた。

「ところで、クラス分けは決定ですか？」

「うむ。君はEクラスだ」

「ええー・・・戦ったのはレベル32のガルベリア・サダーですよ？

せめてCクラスに・・・」

「それは駄目だ。こちらの落ち度があったとしても、
クラス分けには”運”も考慮されている。それに、
君はレベル25をクリアできたと思うかね？」

「・・・運が良ければ。・・・って、運悪いな俺！」

「ま、そういうことだ」

「うー、Fじゃないだけ、まだマシか。そういえば、Aクラスは何人、入りました？」

「今年はゼロだ。去年だって入れたのは1人だけだがね」

「・・・凄い厳しいな、Aってのは」

そこにテンクーが割り込んだ。

「Bも5人でしたよね」

「ああ。君はそのうちの1人だったね」

「ええ！？君、B！？」

「驚くことないだろ？」

「君は、だいぶ余力を残していたはずだな。なぜ次のエリアに行かなかった？」

「んー？ 歩き疲れた」

2人そろって絶句。

「じゃあ、疲れなければ・・・」

「もちろん、全てクリアしてたと思うよ。

まー、行ってないのに言うセリフじゃないですね」

「君は・・・底が知れないな」

セنزは思わずつぶやいた。

テンクーの能力

その後、セنزが出て行った病室で、

ヤンバはテンクーに強さの秘密を聞いた。

「んー・・・僕はね、周囲の状況が把握できるんだよ」

「環境音とか、もしくは気配を感じたり？」

「何って言われても・・・感覚だよ」

「感覚、ねえ？」

「例えば、人には、視覚・聴覚・触覚・味覚・臭覚の五感があるだろ？」

それに、もう一感を加えた感じだよ。僕はそれを＜空覚＞と呼んでいる」

ヤンバはため息をついた。

「まるでマルクと同じようだな・・・」

教えてもらっても、自分の役に立ちそうもないよ」

「マルクって？」

「マルクは俺の親友。体を硬くできるんだよ」

「ふーん、人それぞれ能力は違うもんさ」

「とは言ってもさ、人の能力を超えちゃってる感があるよ」

しばらくして、ヤンバが歩けるようになった頃、

病室に1人の男性がやってきた。

「ヤンバさん、足の様子を診ますので、

15BのEエリアまで来て頂けますか？」

「あれ、ずいぶん地下ですね。今までの5Bではないんですか？」

「はい、5Bは治療のための階ですが、経過確認は15Bで行います」

「わかりました」

エレベータを使って下へと降りていく。

「ずいぶん深いなー、15Bって最下位の階じゃん」

15Bはやや暗く、人気がるでない。

Eエリアまで歩いていくと、人が待っていた。

「ではこちらへ」

中には色々な機器が並べられており、ヤンバは台の上に寝かされた。

「この装置は何を？」

「体内の構造を確認するものです。ちゃんと足が機能するかを調べます」

装置がうなり始めた。

医療師が何人かいて、ディスプレイを確認している。

ヤンバはいつの間にか眠っていた。

「・・・凄いぞこれは」

「では、A2Cって事ですね？」

「しかもクラスAだとは・・・」

「至急”上”に報告を」

「了解だ」

気がつくときベッドの上にあった。

「あれ？ 俺、寝てたっけ？」

扉が開かれ、看護師が入ってきた。

「ヤンバさん、退院です」

「あ、そうなの？ やっと体を動かせる」

「では、こちらで手続きして下さい」

「・・・」

「どうしました？」

「いや・・・何か忘れてるような・・・」

「忘れ物ですか？ では外で待ってますよ」

「いや、行きましょう。多分思い違いです」

ヤンバは15Bに行ったことを覚えていない。

水面下で計画が進行していることなど、知る由もない・・・

第7章 スパイクス

ムサカ

その頃、マルクとマイトは滝と町の間時点にいた。
よりうっそうと茂った森は、太陽の光を通さなくなっていく。

「暗くなったな・・・この辺りからレベルが上がるんだったな」
滝の近くはレベル30だから、この辺りは25くらいか。

「そして・・・スパイクスが現れるエリアに突入したってこと」

本に載っていた解説は、こんな感じである。
”スパイクス・・・この森の、樹上の頂点がマーヴォウなら、
地上の頂点はスパイクスだ。全身が棘に包まれ、
振動ナイフで切れないほど硬い。
サンガンのように弱点がはっきりしているわけでもなく、
できれば出会いたくない猛獣だ。
使用可能武器：サンダーソー・バーニングガン”

「さーて、どうやっつけようか・・・」

頭上にいるマイトが小さく鳴いた。
「心配するな。どんな奴にだって弱点はある」

しばらく進むと、開けた場所にたどり着いた。
そこにはテントがいくつか張ってある。

「ダイじいの弟子希望者・・・だよな。先に入ってた人がいたんだ」
こんなに早く森に入っているのは、自分だけだとマルクは思っていた。

森の奥から足音が近づいてくる。
現れたのは男性で、スマートな体に似合わぬ、ゴツイ剣を背中に背負っていた。
「おや、君も弟子希望者かい？」

「はい。皆さんも・・・？」

「ああ。私は何組かと一緒に行動している。名前はムサカだ」

「僕はマルク。こいつはマイトです」

ムサカは珍しそうにマイトを眺めた。

「シッグルが、こんなになつくとは・・・驚きだ」

「そうなんですか？」

「そもそも、滅多に見られるものじゃないよ」

「ふーん・・・」

「ところで、これからどうするんだい？」

「とりあえず、もう少し進んでからテントを張りますよ」

「気を付けた方がいい。昨日、この辺りで1人やられてる」

「まさか・・・」

「そのまさかだよ。スパイクスが出たらしい・・・」

もし良かったら、我々と一緒に休んだらどうだい？」

「ありがたいですけど、僕は修行も兼ねて来てますので・・・」

「そうか、十分注意してくれ。何かあったら、これを鳴らすといい」

マルクは〈威嚇玉〉をもらった。

「わかりました。それじゃ」

ムサカは、マルクが見えなくなる前に叫ぶ。

「くれぐれも無理はするなよ！」

それにマルクは手を上げて答えた。

その後、森の少し開けた場所にテントを張った。

マルクは寝るまで音に神経質になったが、何も変化は感じられなかった。

森の王者

マルクが寝静まった頃、森の鳴き声に変化があった。

急に静まり返った森の奥から、荒い息をしながら何かが近づいてくる。

ゼフッ、ゼフッ、ゼフッ・・・キョウワァー！

現れたスパイクスに、マルクの寝ていたテントは吹っ飛ばされた！

「何？ スパイクス？」

スパイクスは容赦しない。

次から次へとテントに突進し、相手に息つく暇も与えない。

「うわわわわあ！ どーにもならん！」

テントのお陰か、マルクは傷を負わずに済んでいた。

しかし、テントを支えている支柱は、ねじ曲がってしまっている。

テントはようやく動きを止めた。

木に引っかかって、これ以上前に進めない。

スパイクスは、止めをさそうと突進した。

テントが内側から切り裂かれ、そこからマルクが飛び出た！

「せいやあ！！」

硬化させた手で、思いっきり頭をぶん殴った。

「かってえー！ 腕が痺れる・・・」

「ギョウアッ！」

スパイクスはマルクに頭突きを放った。

マルクは腕を硬化してガードする。

鈍い音が響き渡り、マルクは突き飛ばされた！

数十メートルも吹っ飛ばされたが、マルクは傷一つ負っていなかった。

突き飛ばされた後、すぐに全身を硬化させていたからだ。

「硬化の領域変化は、素早くなったかも」

そこにスパイクスが迫る！

「さて、どうしたもんかね・・・」

「ギョウワァア！」

突撃した先の大木が、音を立てながら倒れていく。

マルクは硬化させた足でスパイクスを踏みつけ、その場から跳んで逃げていた。

「動きはたいした事ないな・・・あ、いいこと思いついちゃった」

足を再び硬化させ、スパイクスの胴体に飛び乗る。
驚いて振り向いた顔に、強烈な蹴りをお見舞いした！
「足の方が強力だろ？」

スパイクスの尻尾がうなる。
マルクはすぐ飛びのき、射程外へと逃げる。

「足でも効果なし、か・・・」
弱点はどこだ？
頭も体も棘だらけだ。
目を潰してみる？ 口の中はどうだろうか・・・

考えているうちにも、次の攻撃を仕掛けようと、どんどん近づいてくる。
スパイクスは、マルクを一飲みにしようと、大口を開けて突進してきた！
「こうなりゃ、無防備な口の中でアッパーだ！」

体重を乗せた、思い切りのアッパー！
鈍い音が聞こえたが、スパイクスはそのまま腕に噛み付いた！
「ぐっ！」

まずい、今、頭を振り回されたりしたら、腕が千切れてしまう！
マルクはあわてて威嚇玉を目にぶつけた！

一瞬、辺りが真っ白になった。

スパイクスは、目の前で起こった轟音とフラッシュに、
あわてて口を開け、あとずさった。

その隙にマルクは脱出した。
「危ない・・・気をつけないと。しかし・・・」

腕を見ると、噛まれた場所から血が流れていた。
「硬化させた腕なのに、骨が噛み砕かれそうだった・・・」

意図

スパイクスは身もだえした。

片目がチカチカして使い物にならない。

それに、この獲物は硬そうだ。

食べられないなら襲う必要もないか……

身を翻そうとしたが、足が動かない。

足を確認しようと、横を向いたつもりが、夜空を見上げていた。

あれ……

スパイクスは何が起こったかわからずに絶命した。

「凄い切れ味……それがサンダーソーですか」

「その通り。スパイクスに対抗するには、一番の武器だよ」

スパイクスは、4つの足を器具で固定されてから、
頭をサンダーソーで切り落とされたのだ。

「ずいぶん戦いなれてるんですね」

「それはこっちの台詞ですよ。有効な武器も持たないで、
余裕を持って戦えるとは……」

「余裕ってわけでもないけどね。ムサカさんが近所を偵察
していなかったら、やばかったかも」

「そうかな？ スパイクスは戦闘意欲を失っていたように見えるがね」

ムサカはマルクをじっと見つめた。

そして、マルクの腕に、血が流れている事を確認する。

間違いなく噛まれた後……

この子はダイマール氏によく似ている……

「なるほど、ダイマール氏が弟子を募集した訳が、わかった気がします」

「えっ、どういう意味です？」

「ダイマール氏は、弟子を採ったことはあるが、弟子を募集する事などまずやらないだろう。今回大々的に発表したのは、自分の居場所を誰かに知らせる必要ができたという訳さ」

「それが僕ですか？」

「違うかな？」

最初は白を切るつもりだったが、ムサカの真剣な眼差しに、マルクは根負けした。

「お察しの通りですよ。僕はカルサーさんにダイマールさんを紹介されたんです。

でも、弟子になれるかどうかは、わかりませんけどね」

ムサカは満足そうに笑顔を見せた。

「これでわざわざ滝まで行かずに済んだ。やれやれ、

最初からおかしいと思ってたんだ」

「そんな・・・チャンスは平等にあると思います！

それに・・・僕はまだ未熟ですから・・・」

「そんな事は関係ない。今できることで、何がやれるかだけを考えなさい」

マルクは、頭を殴られたような衝撃を感じた。

「そうか・・・僕は今まで足りないとばかり思っていました。

ムサカさん、ありがとうございます！目が覚めました！」

「それは何より」

「えーっと、それと・・・テントが使い物にならないので、

できれば今夜、泊めてもらえませんか？」

「・・・そのようだね」

壊れたテントから、何かが顔を出した。

「マイト！無事だったか」

マイトは「キュッ」と一鳴きすると、自分の定位置、すなわち

マルクの頭の上へと飛び乗った。

川見草とカタイハの木

次の日、出発のときにムサカがテントをプレゼントした。

「持ってきては見たものの、組み立てに手間取って、
結局使わずじまいだ。コンパクトなのはいいんだが・・・」

「ありがとうございます。お陰で野宿を免れました」

「ははは、野宿には変わらないがね」

「さて、これからどう進むかな・・・」

「川を伝って行けば間違いないが、猛獣に出会う確立は増えると思うね」

「戦えるのはありがたいですけど・・・スパイクスには会いたくありませんね」

「だったら、この植物を確認しながら行くといい」

ムサカが示した先に、放射状に伸びる草が確認できた。

「通称<川見草>と言われている。この草は川岸から伸び、
森の奥へと成長する」

「これを見つければ、川が近くにあるってことか」

「そういうこと。川の近くに行かなくても、これなら迷わないさ」

ムサカと別れたマルクは、滝を目指して森の奥へと足を進める。

しばらく歩いていると、足元の音が変わった。

最初からあった苔が見えなくなり、

変わりにシャリシャリと音を立てる落ち葉になっていた。

「なんだろう、この葉は・・・」

落ち葉を一枚拾い上げてみる。

「すごい硬い。金属みたいだ・・・」

破ろうとしても破れない。

丸めてみても、元の形状に戻ってしまう。

マルクはブックリーダーを取り出し、

植物に関する本を開いてみる。

「これかな？」

”<カタイハの木>・・・葉が異常に硬く、金属のようだが
プラスチックに近い。種はもっと硬く、割るのは困難だが
とても美味である。カタイハの木の周りには、それを食し、
分解するための<ブルクス>というミミズが生息している。”

「ふーん、ブルックスねえ？」

昆虫図鑑を開くと、実に様々な生物がいる。
その中に、ブルックスも掲載されていた。

スパイクス v s ブルックス

” <ブルックス>・・・森の掃除屋と呼ばれ、どんなものでも消化し
土に戻してしまう。身に危険が迫ると、体中から消化液を出し、
身を守る。素手で触るのは厳禁。”

「どれ、探して観察してみようかな」

カタイハの落ち葉を退けていくと、簡単に発見できた。
「親指程の太さで、全長は15センチ程度か」

マルクはふと、硬化させた手で触るとどうなるか、実験したくなった。

手を硬化させ、ブルックスをつまんで見る。
「お、大丈夫そうだぞ？ ん？ うわっ、ヒリヒリしてきた！」

慌てて手を離し、指を確認すると、皮が少し溶けていた。
「短時間なら、掴んでもオーケー」

この強力な力を何かに使えないかな・・・と、思案していると、
スパイクスが近づいてきた！

「ギョウアー！」
大口を開けて襲ってくるスパイクスに、閃いた。

「えーっと・・・」
マルクは手元の枯葉を払いのけ、ブルックスを何匹か手に入れた。

「今だっ！」

すぐ近くまで接近したスパイクスの口に目がけて、ブルックスを放り込んだ！

すぐさまジャンプして横に逸れると、スパイクスの様子を観察した。スパイクスは再びマルクを襲おうとしたが、急に悶え苦しみ始めた。

すると、スパイクスの腹に穴が開き、中からブルックスが落ちてきた。「凄い・・・これほど強力な消化作用があるなんて・・・」

これは色々役に立つな。
しかし、どうやって運べばいいのやら。
何しろ、プラスチックや金属は溶かしてしまうから
容器としては使えない。

「いや・・・さてよ？ 石で容器を作ったらどうかな。
もしくは、土で器を作ればいい」

その間にもスパイクスは悶え苦しんでいた。
「・・・止めを刺してやらなきゃね」

穴の開いた腹に手を差し込み、そのまま心臓を突き破った。
スパイクスは少し震えてから、動かなくなった。

「苦しませたのは悪かった。ごめんね」
マルクはスパイクスの頭に、そっと手を乗せた。

「さて・・・スパイクスって、おいしいのかな？」

森の宴

ブルックスをスパイクスの上に線を描くように並べ、
棒を使って刺激する。

すると、しばらくしてスパイクスは真っ二つになった。

「使い方次第で、硬いものでも加工できるぞ」

マルクは火を起こし、スパイクスの肉を焼いてみた。

「いい匂いだ・・・どれ」

肉にかぶりついたマルクは、その味に衝撃を受けた。

「う、うま・・・マズー！ 最初はおいしかったのに・・・
後から猛烈な苦味が襲ってくるぞ！」

頭から腕に飛び乗り、肉の味見をするマイト。

「キュキュー！！」

「だろ？ これは無いよなあ・・・って、猛烈に食べてる！？」

マイトは、あっという間に肉を平らげた。

「・・・お前、どうやったら自分の大きさ以上の肉が食べられるんだ？」

そのとき、上から羽音が迫る！

「ちっ、この音はキャロウだな」

身構えたマルクを通り過ぎると、切り裂かれたスパイクスに飛び乗り、
肉をかじり始めた。

「焼かなければ苦くないのかも・・・

いや、さすがに生肉は食べられないよ」

もしくは、人と猛獣の味覚の違いなんだろうか？

そう考えている間にも、猛獣は増え続ける。

木を下ってマーヴォウが、それにシッグルが数匹、

さらには別のスパイクスが他の猛獣を蹴散らしてかぶりつく。

「まるで動物園だな・・・さて、そろそろいいかな？」

火のそばに置いていた手作り土器を取り出し、常温まで冷えるのを待った。

そして中に土を入れ、枯葉も入れ、ブルックスを何匹か放り込んで木で作った栓で蓋を
する。

「これで、しばらくは大丈夫かな」
食事に夢中の猛獣を残して、森の奥へと姿を消した。

しばらく森を進むと、遠くに滝が見えはじめる。
「おっ、あれが第3の滝！ ソートクの滝までは、後20キロ程度だな。
今日はこの辺でテントを張るか」

ムサカさんにもらったテントの説明書を広げる。
「なるほど、面倒そうな組み立てだけど、
一回覚えちゃえば、そんなに時間はかからなそうだ」

説明書を見ながらテントをテキパキと組み立てていく。
「支柱が細いけど、すごい強度だな。しかも軽いし」

テントの素材自体も軽くて強力。
これならナイフで突き刺したって切れそうにない。
「いいものをもらったな。ありがとう、ムサカさん」

そして一人と一匹は眠りについた。

謎の光る昆虫

真夜中、マルクは目を覚ました。

まだ夜は明けないはずなのに、この明かるさは一体？

テントから顔を出すと、滝の近くで何かが光り輝いている。

「何だ・・・あれは」

滝のすぐそばの木に、巨大な昆虫が止まっている。
その昆虫は光り輝き、辺りを照らしていた。

マルクはブックリーダーを取り出し、図鑑を見る。
「光る昆虫なんて載ってないぞ？」

やがて昆虫は羽根を開き、ふわりと羽ばたいた。

その姿に思わず見とれてしまった。
こんなきれいな昆虫がいるなんて・・・

その昆虫は、マルクの方へ近づいていく。
マルクが、そっと手を差し伸べると、その手のひらに止まった。

「きれいだ・・・おや、その姿に似つかわしくない武器を持ってるね」
その昆虫には、鋭い針のようなものを持っている。

毒があったらどうしよう・・・

マルクの心配をよそに、昆虫は再び羽ばたき、
森の奥へと消えていった。
「・・・ダイじいに会ったら聞いてみよう」

マルクは気付かない。
この時、生命の選択が行われていた事など。

あの光る昆虫は、一部のハンターに、こう呼ばれている。
〈森の管理者〉と・・・

第8章 学校生活

壊れた端末とマーレイの報告

ヤンバは退院後、ZAN養成学校の個室に来ていた。

「すげーな、一人一部屋かよ。ってか、ここに何人ぐらいいるんだ？」

「5000人はいるな。ほとんどがFやEクラス。

Cクラス以上は50人もいないんじゃないか？」

ハトバはさらりと言った。

「あー、端末に履歴が一杯だ・・・

おかしいな・・・着信音なんてしなかったぞ？」

「大分痛んでるな。スピーカーか、音を出力する回路でも壊れてるんじゃないか？」

「あー、あの時の・・・端末、買い換えなきゃな」

端末を操作してメールを確認する。

「ほとんどマーレイからかよ。あいつはメール魔でもあったな。

ハトバ、端末貸してくんない？」

「いいよ」

ヤンバは家に電話した。

「もっしー、ハトバに一さん。ヤンバに一さんと、つながらないんだけど、何かあったのー？」

「オレだよ。心配かけてゴメンな。端末壊れちゃって・・・」

「・・・あのねえ、おに一ちゃん・・・

私がどれだけシンプイしたとおもってるのよー！！！！」

「ご、ごめんな、マーレイ・・・すぐ新しいの買うから・・・」

「ぜったいだよー！・・・今日中、今日中に買ってね」

「・・・はい」

・・・マーレイ、怒ると怖えーなー・・・

「で、ぶじなのね？」

「怪我はしたけど、もう完治したよ」

「じゃあ、みんなにそう伝えておくからね」

「よろしくお願いします」

「あ、そうそう、サガスに一ちゃんがね、すごいもの捕ってきたよ」

「え！？まさか、あの年でサンガンを・・・？」

「まさか！そんなバカな」

・・・サガス、ひどい言われようだな。

「じゃあ何？」

「よくわかんないけど・・・かなりキチョーなキノコでね、
売ったら百万ラースになったって」

「ひっ、百万！？」

「うん、この地区ではじめてらしくてね、ガクジュツテキに
なんたらかんたら」

「さすが、”植物博士”の異名を持つだけはあるな・・・」

「でもなー、マーレイはキノコよりサンガン狩れる人が好きだな」

「んー・・・人それぞれだよ。そうだ、マルクはどうしてる？」

「あれ、知らないの？ダイじいが弟子を大ぼしゅうしたんだよ。

今ごろはフェンカの森じゃない？」

「フェンカって・・・近くじゃん！ハトバ知ってた？」

「ああ。この学校からも何人か行ってるって噂だぜ」

「・・・そんな事していいのかよ」

「問題ないよ。仕事なんかで休む人も多いらしい」

「ふーん・・・まあ、今は仕事より体を鍛えるのが先決だな」

「おーい、なに二人でしゃべってるの。も一切るわよ？」

「新しい端末買ったら連絡するよ」

「りょーかい。またねー」

ヤンバは、端末を渡しながらハトバに聞いた。

「そういえば、クラスはどこになった？」

「Eクラスだよ。レベル25は無理だったから、ゲートまで行って棄権した」

「ゲートまで行けたんだ・・・何で俺の時だけ奴が来るんだよー！」

「僕は君の後だったからね。捕獲された後だったみたいだ」
「・・・つくづく運がないっていうか・・・さて、端末買うの付き合ってくれよ」

新端末

ZANの養成学校では、様々な物が手に入る、
ショッピングモールが併設されている。
その中に端末屋も何軒か入っていて、
値段や機能で競い合っている。

「あ、スゲーぞこれ。ZAN限定モデル！」
「・・・僕は機能で選ぶけどな」
「機能だって凄いぞ？ 標準装備に加えて、発電モジュール付きだ」
「そんなの、もう古いぞ」

ハトバは自分の端末を取り出す。
「最近買ったばかりの新型だ。バッテリーレスモデルだけ？」
「はぁ？ バッテリー無くてどうするんだよ」
「電源は、これ一枚」

見た目は金属でできたプレート状のもの。

「これ一枚で一ヶ月は持つ。しかもかさばらないから
何枚でも持って歩けるぞ」
「へえー、すごいじゃん。何なのコレ」
「金属に大量の水素を固定してあるものらしい。
周りの酸素と結合させて電気を得ているんだよ」
「ああ、燃料電池ね」

さらに店内を見て回ると、最新機種が目にとまった。

「おお・・・端末に＜サンダーショット＞機能が付いてる・・・」
「何だよ、それは」

ハトバがパンフレットを読みあさる。

「これ、ダメじゃないか？ サンダーショット1回で

バッテリーが空になるぞ……」

「でもよ、もしもの時には打って付けじゃん。サンガンだって倒せるぜ」

「まあ……でも、それだったら本物のサンダーショット買えばいいだろ？」

「本物は50万ぐらいするぞ」

「む……だったら、それにすれば？ 基本機能はハイスペックだし、

ショックアブソーバー付きだから、今度は落としても大丈夫だ」

「うん、発電モジュールも入ってるしな。……ちと高いが」

「……15万かよ。僕のより高いな……」

ヤンバは壊れた端末で口座の残高を確認した。

「むう……仕事しないと減る一方だな」

「仕事より体鍛えるのが先なんだろう？」

「弱いって大変だな……俺もマルクみたいな力が欲しかったぜ！ まったく……」

ないものねだり

しばらくは自主トレーニングが続いた。

森のレベルが低いエリアで猛獣と戦い、

ZAN養成学校生しか入れない専用サイトで

様々な知識を身につける。

だが、数週間程度で、実感できるほど力が上がったりはしないものだ。

「うー……パワーアップした気にもならんな。

と言うか、卒業してから何も変わってないとすら思える……」

「まあまあ、そう簡単に変われるもんじゃないよ」

テンクーはそうたしなめるが、当の本人は最終エリアで磨きをかけている。

「テンクーはいいよなー。空覚だっけ？ そんな力を持ってて・・・」
「無い物ねだりはダメだよ。僕だって、今の状態では
これ以上上には行けない・・・もっと努力しなくちゃ」

ヤンバは驚いた顔をした。

「なんだい、その顔は」
「いや、力があれば、努力なんてしなくてもいいものかと」
「・・・買いかぶりだね。僕の力は、逃げるか待ち伏せるか・・・
出会わないことにしか使えない」
「確かに、戦闘向きじゃないか」

「それに・・・上に行ける人は、努力を怠らない人だよ。
力におぼれず・・・足を知る者こそ、上を見ることができる人だ」

いつもののんびりとしたテンクーの顔ではなかった。
まるで・・・熟練したハンターのような雰囲気漂わせている。

「・・・その意識は見習わなきゃな。無い無い言っても始まらねーわな」
「そういうこと。今ある技術に磨きをかける方がいいって」
「そうは言ってもだな。人より秀でたものがあるわけじゃないし」
「じゃあ、まず自分の長所を探すことから始めなきゃね」

ヤンバは自分の手をじっと見る。

「俺の長所・・・力は無いぞ。スピードだって一般的。
あ、端末操作はうまいぞ。情報も他人より豊富だ。
ま、ハトバには敵わんが・・・」
「・・・まず、他人と比べるのをやめようね」
「うっ・・・」
「まあ、今のを聞いただけでも、方向性ははっきりするよね」

テンクーは自信を持ってヤンバを見た。

「で、どーなの？」
「まず、パワー・スピードが期待できないなら、
ブレストブーツやパワーアーマーに頼るしかない。
常に意識してアイテム選びをしないとね」
「・・・金があればね」

「無い物ねだりはダメですよ。一ついいことを教えておくと、

授業が始まればアーマーやブーツをもらえるってこと」

「タダで!？」

「もちろん。ZAN養成学校仕様の、機能はだいたい

ディフェンザのミドルクラス程度のもの」

「・・・よく知ってるな」

「兄貴が卒業生なんだ。〈オーゾラ〉って知ってる？」

「うそっ!? 現ZANメンバーじゃないか! ・・・サインもらえない？」

「・・・聞いとくよ。とにかく、次は情報だけど、知ってるだけじゃ

いざという時役に立たないよ。ちゃんと実践して自分の物にすること」

「なるほど・・・」

「後は・・・君は感じてないようだけど、実は凄い力を隠し持ってる」

「えっ？」

「ガルベリア・サダーから逃れられたのは、君の危険探知能力のお陰。

普通の人間じゃ、餌食になってたよ」

「・・・そうか? みんなすぐに逃げるだろ？」

「ヤンバは言っていただろ? 奴と会ったときに、

一刻も早く逃げなきゃいけない感じがしたって」

「でもなあ・・・それだったら奴が見えた時点でわかってもおかしくないだろ」

「どうだかな。現れた当初は、君を食べようと思ってなかったかもしれないよ?」

殺意を持ったときは、柵を壊したあたりじゃなかったのかな」

「うーん、それは調べてみる価値があるかもな・・・秘めたる能力か」

「以外と気づかないもんだよ? 僕だって昔は、

みんな同じように周りが見えているとばかり思ってた」

「いつ気がついたの？」

「兄貴と狩りをしたときだね。僕にはパワードが近づいてくることがわかってたけど、

”まだ足音もしてないぞ”って言われたから」

「兄貴か・・・俺、一番上だからなー・・・」

「また」

「うっ・・・ねだるよなあ」

「すぐには変わらないさ。でも、変わろうと努力をすれば、いつかは変わる」

「・・・そうだな」

授業開始

ZANの授業が始まった。
テンクーの言っていたとおり、全員に防具一式が配られた。

中には、それよりいい防具を持っていた奴もいたらしく、
すぐに売却した輩がいるようだ。

授業では、全員にプレート端末が手渡され、
サイトにアクセスする形で進められた。

基本的な知識、様々なアイテムや武器、防具の使い方、
地上の地理、猛獣の弱点や調理方法まで教えられる。

時には森を一日中走らされたり、特定の猛獣とのバトルや、
襲われたときの対処法を身を持って体験させられた。

しばらくは授業についていくことでやっとだったが、
次第に余裕が生まれてくる。

すると、あちこちで生徒がいなくなり、学校から出て
猛獣捕獲などの仕事を始めていく。

「何だよ、教室がガラガラだ」

「最近じゃ、休んで仕事に出る生徒が多いからね」

「俺はそれどころじゃないっての。ハトバは仕事する予定？」

「いや、そろそろ試験があるだろ？ クラス上げに専念するよ」

「だよなあ・・・」

「まあ、試験はいくらでもあるしな。クラスが下がるわけでもないし。

仕事して、いい武器買って試験に臨むっていうスタンスもありかもね」

そこにテンクーが割り込んだ。

「やあ、お二人さん。調子はどうだい？」

「おおい、授業が始まるぞ。早く戻った方が・・・」

「いや、心配ご無用。僕は休みだ」

「何だよ。テンクー、仕事？」

「いや、試験に向けて、森に籠もって修行さ」

「・・・テンクー、そんなことしなくてもAに上がれるだろ」

「もちろん。でも、完璧にしたいだけだよ」

「さすがテンクー」

授業のベルが鳴り始める。

「あ、授業が始まるね。それじゃ」

「またな」

兄の言葉

テンクーは、森の通路を歩いてGエリアに向かう。

「完璧にしたい、なんて言っちゃったけど、まだまだなんだよな」

確実にAクラスには上がれる・・・

でもそれだけじゃダメだ。

何か一つでも、他より秀でていなければ、

厳しい地上では生き残れない。

それには・・・空覚の強化が必要だね。

「僕が秀でているのは、これくらいしかないからね」

”自分をよく知ることは、自分を救うことに繋がる”

兄さんがよく言ってた言葉だ。

「自分を知りもしないで、想像で「俺は凄い」とか「僕は劣っている」とぬかす奴らが多いが、まず自分を知り、短所や長所を含めて認めること。その上で自分の進む道を見つけりゃいいんだ」

ZANの養成学校に行く前日。

兄さんは、殊更に”自分を知る事”が大事だと語った。

「自分を知る事。その他の事は、付け足しにしかなんねーのよ。

まず、自分を箱に例えてみろ。その箱は凹んでいたり、出っ張ってたりする。

弱いと思ってる奴は、凹んだ所しか見てないで、弱点をカバーしようと

躍起になるか、見ぬ振りをしてやり過ごす。自分の出っ張ってる所なんて見向きもしない。

強いと思ってる奴は、出っ張ったところしか見えてない。より強くしようと、

更に出っ張らせるか、それに満足して何もしない。まー、どっちにしても

凹んでいる所なんて見向きもしないわけさ。

正解は、凹んでいるところを自覚して、それを埋める努力をする。

出っ張ってる所に満足せずに、更に出っ張らせるわけだな。

間違っても真四角しようなんて思うなよ？ そんなもんはありえねーし、

出っ張ってなけりゃ滑り落ちるだけさ。自惚れつつ一落とし穴にな・・・」

「にいさん・・・語ってる時のあんたは、落とし穴に落ちそうだよ？」

「む、言うねえ！俺はどうも口が過ぎるようだねえ」

ふと、昔のことを思い出し、ほほえんだ。

「さて、言われたとおり、出っ張ってるところを、更に伸ばすとしますか」

僕の能力「空覚」は、まだまだ未完成だ。

感じられるといっても、遠くのものには形があやふやになる。

例えば、木は円柱だし、猛獣もボールが動いているようにしか感じられない。

近くであれば、目で見たように鮮明だが、それなら目で見たって同じだ。

課題は二つ。

遠くのものでも鮮明に感じることに。
近くのもの、体と連動させること。

遠くでも正確に知ることができれば、敵の種類もわかるし、
そうすれば対策を立てることができる。
近くのもの、例えば猛獣と交戦中に、自動的に攻撃を回避できれば、
次の一手を考えることができる。避けるのにいちいち考えていては、
そのタイムラグで生死が分かれる事になる。

「とても大変だけど・・・やるしかない。努力あるのみだね」

養成学校 秘密の地下施設

テンクーはふと、自分の領域に人が入ってきたことを感じた。
大きさやスピードで、ある程度は推測できるのだ。

しばらく立ち止まっていると、見慣れた人が歩いてきた。
「おや、テンクー。修行にでも行くのかね」
「センス師匠、授業はよいのですか？」
「ああ、別の者に任せてきたよ」
「急用、って感じですね」
「急用でもないがね。ある事の担当になってしまっただけだよ」
「ふうん・・・」
「さて・・・君も来るかね？ 少し早いけど、Aクラスのみが
使用できる施設があるんだよ」
「僕はまだAではないですよ？」
「すぐにAに上がるだろうから、心配ないだろ？ さあ、こっちだ」

2人はGの扉を通らず、その奥へと進んだ。

しばらく行くと、建物が見えてくる。

兄さんが言ったのは、これのことか・・・

そこには、”関係者以外立ち入り禁止”のプレートが張り付いた扉があった。

指紋認証を済ませると、扉が開き、エレベータが現れる。

エレベータは、地下へと進み、次に扉が開いた時、そこで見たものは・・・

広大な森・・・？

テンクーの領域外まで森が広がっている。

「これは・・・」

「ここは、様々な猛獣が暮らしている。全てクローンだがね」

「猛獣を生産しているんですね」

「地上と同じ環境を作るのは大変だったようだがね。」

「今やZANの資金源になっている」

窓の外の森を見ながら通路を歩くと、

その先に扉がいくつか現れた。

「扉にアルファベットがついてますね」

「君はもう気づいているだろう？」

「これが噂の、Aクラスだけが入れerエリア・・・H・I・J」

「Jはレベル50の猛獣がいる。ZANのメンバーも、たまに訪れて体を鍛えている」

「僕にはまだまだ・・・ん、一番奥の部屋は・・・」

「この部屋は”管理者以外立ち入り禁止”だ。覗いて、みるかい？」

センズが手を乗せ、認証されると、ゆっくりと扉が開く。

中にはディスプレイが一面に並べられていて、

地下の森や、地上の森が監視できるようになっている。

「ここで・・・試験用にエリアを切り替える作業をする」

「切り替える!？」

「AからGエリアは、バラバラに地下のエリアと交換ができる」

「ち、ちょっと待って・・・あの広大な森が、入れ替わる!？」

「いつも同じ敵ではつまらんだろ？」

セズがニヤリの笑う。

「さて、私はここでやることがある。君はどうするかね？」

「僕はGエリアに行って修行の続きです。」

Hエリアに興味はありますが・・・今はやめときます」

第9章 進級試験

試験当日

試験当日。

試験に順番はない。

今行ける、と思った者からリングをはめてゲートから入る。

「お、テinker。まだ入ってなかったんだ」

「やあヤンバ。僕は人の観察中さ」

「人？」

「中に入ったら驚くぞ」

「どーいう意味だ？」

耳を澄ますと、森の中から、「うわっ、何だコイツ！」とか、
「このエリアに、こんなヤツいたっけ？」という声が聞こえてきた。

「これって・・・」

「今、エリアは全て入れ替わってるんだよ。

だから、君の嫌いなガルベリア・サダーは、今回気にしなくていい」

「それはうれしいけど・・・結局別の奴が来るだけだろ」

得手不得手はあるにしても・・・危険なのには変わらない。

「しかし、どーやって入れ替えるんだよ」

「さあね。仕組みは知らないけど、”地面ごと”入れ替わっているのは事実」

「はい！？ 猛獣だけじゃなくて？」

「よく見てみなよ。あんな植物、前はあったか？」

タンクが指す先には、全身トゲトゲの木があった。

「・・・あったら気づくと思うけどなー」

「猛獣が入れ替わったって事は、植物も入れ替わらないと、
草食の猛獣は食べ物なくなる。そして、植物が入れ替わったって事は、
土も入れ替えないとダメって事だよ」

「にわかには信じられないけど、そういえば昨日の夜・・・」

試験の前日・・・

「なあ、ヤンバ。音がうるさくって眠れくない？」

扉を開けて入ってきたハトバは、開口一番、妙なことを言った。

「はあ？ 音って？」

「・・・お前鈍感だなー！ この機械音聞こえないの？」

「キ、キカイ音!？」

「はあ・・・何も感じない奴がうらやましい・・・」

「どんな音だよそれ」

「少し前から、ずっと聞こえてる・・・なんか唸ってるような音だよ」

「・・・さっぱり」

「悪かったな、睡眠をじゃまして。・・・俺、寝付けるかなー・・・」

「わからなくてゴメンな。まー・・・あまり気にするなよ。

耳栓とか持ってきてないのか？」

「あっ！！ 持ってきてたの忘れてた！ さすがヤンバだぜ！」

・・・さっきと態度が180度違くない？

「助かった・・・これで試験に臨める！」

「じゃあ、早く寝かせてくれよ」

「おっと、悪い悪い。じゃ、明日な！」

「とまあ、こんな事があったわけさ」

「ふーん、耳がいいんだねえ。その音の正体が土地入れ替え作業の

機械音だったってわけか」

「テンクーは聞こえた？」

「いや、爆睡してました」

「・・・だよな」

「ハトバはおそらく、特定の周波数に敏感に反応する耳を持っているのかもね」

「おお、ハトバの隠された能力か！」

「いや、能力と言うよりは、特異体質に近いか。

人類の進化過程の、一つの可能性かな」

「人間も進化してんのか？」

「もちろん。人類は少しずつ、着実に進化してるよ。

ただし、地上で暮らせるようになるには、数千年という月日が必要だけど」

「じゃあ、マルクとかテンクーの能力も、進化の過程って事？」

「僕らの能力は・・・進化の過程、と言うには・・・あまりにも劇的すぎる」

テンクーは、意味深な言葉を残し、森に入っていった。

「・・・なんだかな」

「お、ヤンバ！ 待たせたな。行くかい？」

「ハトバ、待ちわびたぜ・・・で、一緒に行く気？」

「途中までならいいだろ？ もっとも、どの道分かれると思うけど」

「・・・ま、行ってみますか！ 目指せ、Eエリア！」

懐かしい感覚

2人は軽々とA・B・Cエリアをクリアし、
前回2人がギブアップしたDエリアに到達した。

「Cエリアの食獣植物はヤバかったなー！」

「まさか植物がいきなり動くとはね。情報として持っていても

にわかには信じられなかったしね」

「まったく・・・さて、いよいよDだ。とにかく、ここを抜けなきゃな」

「所で、バッテリーはどれくらいになった？」

ヤンバはバッテリーを確認する。

「おお、スゲッ！ ブーストブーツの残量は70%！

前のブーツなんて、Cエリアで50%だったぞ・・・」

「さすが、回生機能付きだね。発電モジュールも機能してるし」

「しかもショックアブソーバも付いてるから、今度は高い所からもへっちゃら！」

「・・・ちゃんと足から着地できれば、の話だろ？」

「まあ、そう言うなよ・・・おっ、ナイフのバッテリーも60%だし、

アーマーも75%残ってる。今回の猛獣は、俺達にピッタリだな」

「そうだね・・・所でさ、この森、なんか懐かしい感じがしない？」

「ん・・・確かに感じる・・・何でだ？」

遠くから規則正しい足音が聞こえてくる。

「まさかここって・・・」

「イワザル地区、パッドの森・・・」

「だーよなあ、だってこの足音は・・・」

「サンガンだよ！」

ギャオオオオー！

「出た！ だが・・・取るに足らないぜ！ 弱点はお見通しだしな！」

ヤンバは、得意のパチンコでサンガンの鼻を狙った。

激しい音と光、しかも鼻を刺激されたサンガンは、
悲鳴を上げて森の奥へと消えた。

「どんなもんだ！」

「僕の出る幕ないじゃ、ぐわっ！」

ハトバは、新たに現れたサンガンに吹っ飛ばされた！

「ハトバー！ 無事か！？ こいつめ！」

ヤンバは立て続けに炸裂弾を放ってサンガンを撃退した。

「危ない危ない・・・アーマーのお陰で無傷だよ」

茂みからハトバが顔を出す。

「さすがだな、このアーマー・・・ショックアブソーバ付きは伊達じゃないぜ！」

「まあ、それでも、噛まれてたらひどい怪我をした所だ・・・」

「・・・さっさと、このエリアを抜けるぞ。」

走っていけば追ってこられないだろ」

「待ち伏せされてなけりゃね」

「サンガンがか？ 心配ないね。突進するしか脳のない奴らさ」

再び足音が近づく。

「おいおい、この森に何体いるんだよ？ 過密気味じゃないか？」

「今度は僕に任せろ。新兵器で倒してやる」

「新兵器？」

そこに現れたのは、腹の黄色いサンガンだった。

ハトバの新兵器

「うおっ、デケェ！ しかもラプトサンガン！」

「食らいな。＜サンダーガン＞の一撃を！」

ハトバが引き金を引くと、サンガンに向かって
一直線に雷が走った！

空気が裂ける音とともに、サンガンの巨体がゆっくりと倒れていく。

「しとめた！」

「凄いな・・・このサンダーガンは・・・」

「何だよ、そのサンダーガンって。あまり聞かない名前だな」

「サンダーショットの元になった商品さ。

この間、アウトレットで安く出てたから買って見た」

「ショッピングセンターに、そんな店があるのかよ・・・」

「カートリッジ1つにつき、5回まで撃てる。もっとカートリッジが
欲しかったんだけど、何しろ生産終了してるからさ。

結局、このカートリッジを使い回すしかないんだ」

「じゃあ、残り4回か」

「まあね。時間があれば、端末の充電機能を使って
チャージできるけどな・・・」

また足音が近づいてくる。

「・・・ま、無駄には使えないってことか。行くぜハトバ」

「りょーかいっ！」

2人はサンガンに目もくれず、Eエリアのゲートに向かって走り始める。

しばらくして、何事もなくゲートに到着した。

「おや、君達かい。やっと来たね。テンクーは一足先にFエリアだ」

「あ、センズ師匠。テンクーの奴は速いなー！」

「あいつは別格だって」

「さて、君達はEエリアに進むかね？」

「愚問ですよ」

「ではおめでとう。Cクラスは確定だ」

「よしっ！」

「おいおいハトバ、俺達の目標はAクラシだろ」
「まあ・・・でも、Cは確定だし。進歩できたじゃないか」
「今日は運も見方にできたしな」

セズがニヤリと笑う。
「快進撃はここまで。今回のEエリアは今までと違う。
油断していると食われるからな。すぐボタンを押すように」
「・・・何が出るんだ、ここは？」
「それは教えられんね。幸運を祈る」
「こりゃ、セズ師匠の嫌がらせだぜ、ヤンバ」
「なーに、クリアしてギャフンと言わせてやるさ」
「では、ゲームスタートだな」

Eエリアの扉が開かれる。

「うっ！？ 何だ、このムシムシした空気は・・・」
「おいヤンバ、これ見てみる」

ハトバは端末を手渡す。
「湿度が90%！？ 気温も40度・・・」
「・・・熱帯ゾーンかよ」
「あらゆる所から、熱い蒸気が吹き出ているので
火傷しないように」
「おいおいおい・・・不快指数100%な、こんな所に
猛獣なんているのかよ・・・」
「・・・危険なのは植物かもな」

テinkerとトラップ

その頃、テンクーはGエリアのゲートに到着していた。

「速いねー、テンクー。一番乗りだよー」

「カイバラ師匠、Gエリアに行けばAクラス確定ですか？」

「いんや、Gエリアをクリアしないとダメだよ」

「ふーん・・・じゃ、行ってきます」

「おいおい、ブーストブーツのバッテリー、もう空なんじゃないの？」

「予備バッテリーを5個持ってきましたから、
最後までトップスピードで駆け抜けますよ」

「・・・やるねえ。ま、それが常識なんだけどね」

「はい、兄もそう言ってました」

「まあ、君だからこそトップスピードで駆け抜けるんだけどね」

「・・・ご謙遜ですよ」

「そうかい？ じゃ、頑張るって」

「ありがとうございます」

ゲートが開くとトップスピードで走り始め、
あっと言う間に姿が見えなくなった。

「テンクーならGエリアも楽勝でしょうね。
しかし、最後の罠を切り抜けるかな？」

テンクーは、ひたすら走る。
突然飛び出して襲う猛獣もいるが、テンクーは既に別のルートを走っている。
さらに、このスピードについてきて、噛みつこうとする猛獣は、
＜強化銃＞で撃退する。

遠くにゲートが存在することを、テンクーが感じ取った。
「そろそろバッテリーを換えておくか」

空気で確認するかぎり、この先に猛獣はいない。

「よし、準備完了。有言実行で走り抜けますか」

再びトップスピードで走っていると、ゲートを目で確認できるまで接近した。

その時・・・前方の地面が開き、
中から、おびただしい猛獣が現れる！

なにっ！？

テンクーの空覚が、後方からも猛獣の群が迫っていることを感じ取った。

「しまった・・・目で確認する事を怠っていましたね。
こんな分かりやすいトラップに引っかかるとは・・・」

さらに左右からも同じく猛獣が迫ってきている。

しかし・・・テンクーは笑顔だ。
「でも問題ありませんね。強化銃の弾数は十分だし、なにより・・・
地上に出てきたら、動きは全て読めるしね」

テンクーは銃を取り出す。
「強化銃連射モード・・・では、始めようか」

テンクーは銃を連射しながら、ぐるぐると回転した。
無闇に連射しているようだが、テンクーには全ての猛獣の位置が感じ取れる。
そして、銃の特性はもちろん、弾道も認識しているわけで、
打ち出された弾丸は的確に、猛獣の集団に降り注ぐことになる。

「おそらく・・・動かなくなった猛獣が4 5・・・6、
動きが鈍くなった猛獣が3 2・・・」

テンクーは回転しながら連射し、そして猛獣を数える。
銃の打つ角度を変えながら、全ての猛獣を自分に近づく前に
倒してしまおうと考えている。

そう、これも彼にとっては1つの修行に過ぎない。

「残り弾数は150、動いている猛獣は15体」

・・・残念ながら、15体の猛獣に接近を許してしまったか。

そう考えながら、残りの猛獣も片づける。
そして・・・悠々とゲートにたどり着いた。

カルカラー

ゲートにいた男が、パチパチと拍手をする。

「すごいな、オマエ。Aクラスおめでとう」

「あなたは・・・現ZANメンバーのカルカラーさん」

「おう。兄貴のオーゾラには世話になってるよ」

「はは、兄がお世話になってます」

「しかしよお、尋常じゃないトラップだったな。」

「今までこんなに大量の猛獣を放つ事なんてなかったぜ」

「・・・センス師匠の、お遊びですね」

「アイツめ、俺ん時だって、危険度40の猛獣を出して来やがって」

「・・・ちゃんと本人の力量をわきまえてるって事ですかね」

「ヤな奴には変わらないがな」

「ところで、今日はどうしたんですか？」

「なに、Jエリアで遊んでたらよ、人員が足りないとかヌカしやがってよー。

Gエリアの担当にされたってワケ」

テンクーの空覚が、猛獣がこちらに向かっている事を感じ取る。

後ろを向いて銃を構えると、遠くから爆発音が響きわたった。

「む・・・」

「スゲーな、空覚ってのは。まだ見えてねーってのによ」

その手には筒のような武器が握られていた。

「あなたも空覚を？」

「まーさか」

しかし・・・現に先ほどの猛獣が動かなくなったところを見ると、カルカラーさんが放った攻撃で倒されたと言うしかない。

「俺には、残念ながら空覚は無い。だったら今の技術で作ればいい」

カルカラーはテンクーにブーツを見せた。

「このブーツは、俺がディフェンザと共同開発したテストブーツだ。

ブーツの底には、高性能な振動センサが付いててだな、

大地の振動を検知して分析し、教えてくれるって仕掛けさ」

「凄いですねー・・・」

「だけどよー、立ち止まってないと役に立たないってのが課題だな」

「カルカラーさんって発明家なんですね」

「ま、これもZANメンバーだからできる道楽さ。

ついでに、これも見せてやるよ」

リュックから丸いものを取り出し、手のひらに置くと

ふわふわと上昇し、ある高さでピタリと止まった。

「超広角カメラを搭載させた<スパイスフィア>さ。

上空を飛行しながら、全方位を監視してくれる」
「凄いですね・・・これ、どうやって飛んでるんですか？」
「機体が軽く出来ててな、空気中から分離した水素を使って浮いてるのさ。
そのせいで、風が強いと使えない駄作だけだな」

その時、カルカラーの端末から、ベルの音が聞こえてきた。

「お、Gエリアに入ってきた奴がいるな。別のトラップを起動させなきゃな」
「・・・きっと<マイルズ>だな」
「友達かい？」
「いや。あだ名が”ゴージャス・マイルズ”って奴だね。
身につけている装備は、すべて最高級品」
「ここまで来れたのも、装備のお陰って訳か？」
「・・・そうかもしれないけど、彼は道具の扱いに長けてるからね。
自分で公言してるように、道具に頼りきっている。
これも1つのスタイルだとは思うけど」
「まあー、今のハンターの90%近くが、このスタイルだと言ってもいい。
君みたいなタイプは、1%程度だろうね」

コントローラー

その頃、ヤンバとハトバは、汗だくになりながら

Eエリアを疾走していた。

「あー・・・気が遠くなる」

「このままじゃ死んじゃう・・・なあヤンバ、無い知恵絞ってくれる？」

「てめー、無いってどーいう事だ」

「しかしさ、地上には、こんな暑い場所もあるんだな・・・」

「授業で習ってたけど、まさかここまで暑いとは・・・」

それに引き換え、地下の環境は格別だ。常に適温に保たれている。

それが人間の適応能力を退化させているのかもな・・・

「しかし・・・敵が出てこねーのは一体・・・？」

「決まってる。僕が言ったとおり、敵は植物にあり！」

「・・・」

「何黙ってるんだよ」

「前を見てみな」

「うおっ！？ 何だこりゃ！」

そこには、道幅一杯に育った植物が、天高く伸びていた。

「こいつは・・・別名＜支配草＞と呼ばれる＜コントローラー・プランツ＞だ！」

「危険度ってそんなに高かったか？」

「さて・・・大して危険はなかったはずだけど？」

「とりあえず、迂回はできそうに無い。突っ込むか・・・」

「よし、俺がナイフで切り開いてやる。ハトバは背後を頼む」

「了解」

ヤンバがナイフを一閃すると、簡単に切れた。

「おお、こりゃ楽だな。どんどん進める」

調子に乗ってバッサバッサと切り進んでいく。

しかし・・・周りが見えないって本当に怖いな。

何が隠れているのか、わかったもんじゃない・・・

「ヤンバ！ 後ろを見ろ！」

「な、何？」

後ろを向いたヤンバは絶句した。

入り口が塞がっている・・・

「この草、成長スピードがハンパないぞ！」

「なるほどね、一旦定着したら、この場所を支配してしまう・・・」

「見ろ、お互いに絡まりつつ、どんどん上へ伸びてるぞ」

「取りあえず・・・先に進んだ方がいいね」

手に持った端末で位置を確認しつつ、

ヤンバは再び切り裂きながら前へと進む。

「ん・・・少し開けたぞ？」

「何だここ」

そこは、支配草の真っ只中であって、なぜかこの空間だけ草が無い。

「はっ！ 避ける！」

「えっ、何が？ うわああああー！」

ヤンバは危険を感じ、地面に伏せたが、ハトバは間に合わなかった。

何と、空から降ってきたロープ状のものに連れ去られてしまった！

ハズラーとハトバの最終兵器

「ハトバーっ！ 今助けるぞ！」

上を見上げると、巨大な枝に袋のような物がぶら下がっている。

「こいつ、食獣植物の〈ハズラー〉だ！」

ロープ、ではなく、蔓に巻きつかれたハトバは、

必死で脱出を試みる。

「くそ、ナイフじゃ歯が立たん！」

見る見るうちに袋の上に持ち上げられ、袋の中身が見えた。

「・・・このままじゃ、中にある猛獣みたいに溶けちまう！」

そこには、ほとんど骨だけになった、哀れな猛獣の姿があった。

「くそ、これでも食らえ！」

ヤンバは振動ナイフで幹を切断しようとしたが、

この植物の外皮は金属のように硬い。

振動ナイフは、要するに何万回もナイフで切っているだけに過ぎず、

歯が立たないものは基本的に切れない。

さらに、振動による熱によっても切ることが可能だが、

この植物は、この程度の熱ではびくともしない。

「歯が立たねー！ ナイフが削れちまうよ・・・」

「ヤンバ！ 俺のことは放っておけ！ 先に進めよ！」

「何、馬鹿言ってるんだ！ 絶対助けるぞ！」

「いや、僕には秘策があつてな。君がここにいると困るんだ」

「何を・・・げ！ 確かにここにいないほうがいいな。」

「じゃあ、先行ってるぞ！」

「すぐ行くさ」

ヤンバが先に進んだことを確認すると、手に持っていたものを

袋目掛けて投げつけた！

ハズラーは爆発した。

さすがに爆弾の超高熱と破壊力には太刀打ちできなかったようだ。

しかし、小型爆弾を使用した当の本人も、

あまりの威力に吹っ飛ばされ、少しの間、意識が飛んだ。

その頃、ヤンバはナイフを使って支配草を切り倒して前に進んでいた。

すると、近くで爆発音が響く。

「ハトバの奴、あんな物騒なもん、どこで手に入れやがったんだ？」

旧式だったが、サンガン程度だったら、

一撃で木っ端微塵にできる程の威力だ。

「またアウトレットか？ まだ売ってるなら、俺も何個か欲しいけど・・・」

「おっ、やっとな支配草エリア突破！」

ナイフを一閃すると、太陽の光が降り注ぐ。

そこは広く、草原のようだ。

「相変わらず蒸し暑いが・・・草が纏わりつくよりマシだな」

ヤンバの後悔

しばらく草原を進んでいると、遠くに角のようなものが見えた。

「猛獣か！？・・・何だ、草食獣の<デュラホーン>か。びっくりさせるなよ」

・・・はて？ デュラホーンと言えば、危険度は大したこと無いはず。

まてよ？ 確か、テリトリーに入った者は容赦しないと書いてあったか。

デュラホーンは、「ズモッ！」と一鳴きすると、

前足で地面を引っかいた。

「うわー・・・ここテリトリーだったか。すぐに逃げないと」

逃げ道を見つけようと、周囲を確認すると、

周りにも次々とデュラホーンが集まってきている。

次の瞬間、けたたましい叫び声を上げ、一斉に襲ってきた！

「ええい、飛ぶしかねーだろ！ 最大出力でこの場から脱出！」

モーターが唸りを上げた、その数秒後・・・

ヤンバは上空にいた。

「たっ、高けえー！！ いや、落ち着け！ ちゃんと着地すれば、

ショックはブーツが吸収してくれる！」

だが・・・飛んで逃げたのは失敗だったと思い知る。

「この感覚・・・ガルベリア・サダーの時と同じ・・・

着地したらヤバイ。だけど・・・」

着地せずにはられない。

飛ぶための装備など持っていないのだから・・・

見下ろすと、木陰に猛獣の姿が見えた。

間違いなく、こちらを狙っている。

「どけよ、お前！」

ヤンバはパチンコを何発か放って威嚇したが、

猛獣は、じっとこちらを睨んだまま、動こうとしない。

「こうなったら・・・早く助けにきてくれよ！」

腕のリングのボタンを押す。

これですぐハンターが駆けつけてくる。

ヤンバはナイフを引き抜くと、着地体制に入った。

猛獣は着地場所に向かって走り始めた。

「この猛獣は・・・＜バルングラ＞か。スピードと顎の力が強いんだっか」

ヤンバが無事に着地する。

バルングラは既に口を開けながら飛び跳ねていた。

この刹那に、ヤンバは後悔した。

そーいえば、俺の端末は武器になるんだっただなー・・・

森に骨の碎ける、不気味な音が響き渡った。

第 1 0 章 正体

謎の行動

一方、マルクとマイトは、第二の滝を越え、

ソートクの滝へと近づいていた。

「うわっ、またスパイクスかよ・・・これで何体目だ？」

息を潜めた側をスパイクスが通り過ぎる。

カタイハの枯葉が立てる音が大きく、

近くにいても気づかれることはない。

「しかも、滝に近づくにつれて、スパイクスの遭遇率が上がってるぞ・・・」

一体、滝に何があるんだろう・・・

餌が豊富だとしか考えられないんだけど。

ふと、視線を感じ、木の上に目をやると、

複数の目がこちらを見ている。

おっと、マーヴォウだ。

マルクは片目を閉じて挨拶した。

すると、マーヴォウ達が一斉にウインクを返してきた。

「そういえば、マーヴォウもよく見るようになったな」

もしかして、マーヴォウも滝へ行くのか？

「マイト、君も行ったことあるのかい？」

「キュ？」

「・・・知らなそうだね。確かに、スパイクスが

一杯いる所なんかに行きたくもないよね」

森に特徴のある羽音が響く。

「すごっ！ キャロウの大群だ！」

数十体はいるだろう、キャロウは、木々をすり抜け、

飛びつきながら移動している。

「やっぱり何かある・・・」

危険を冒してまで、滝に近づくなんて・・・

「しかし、よく考えると、ちゃんと棲み分けができてるもんだね」

木の上はマーヴォウ、地面から少し離れて飛ぶのがキャロウ、

地面を歩ってるのがスパイクス。

「シッグルは地面と地下ってところかな？ ま、いずれにしても、

獲物を獲るためには危険を冒さなきゃいけないわけだね」

しばらく歩っていると、何とも言えない臭いが漂ってきた。

「何だ、この臭い・・・どこかで嗅いだことが・・・」

更には、霧が視界を妨げる。

「もー、何も見えん・・・あれ？ すぐに霧が晴れたぞ？」

霧じゃない・・・だとしたら何だ？

そして・・・木々の隙間から滝がちらりと見えた。

「おっ、到着だ！」

マルクは駆け出し、すぐに全容が見えるようになった。

滝の秘密

「これは・・・湖？ しかも霧が・・・いや、これは湯気だな」

ソートクの滝、それに続く湖からは、湯気が立ち上っていた。

「うそっ！？ 温泉！？ そんな情報知らないぞ？」

ブックリーダーを取り出し、地理図鑑を探してみる。

「おかしいなあ、この周辺の地理図鑑を入れておいたはずだけど・・・」

そういえば、一度も見たこと無かったような・・・あっ！」

画面の隅に「次へ」のボタン・・・

ボタンを押すと、次のページが表示され、そこに地理図鑑が現れた。

「なにになに・・・周期は不明だが、流れる水が温泉に変わる。

ミネラルが豊富であり、皮膚病や筋肉痛・打ち身に効果があり・・・なるほど」

湖に沿って、さらに滝に近づく。

温泉と化した湖には、様々な猛獣が浸かっている。

スパイクスの隣にマーヴォウやキャロウがいるが、意にも介さない。

そして、どの猛獣も、まったくとした顔になっていた。

森を歩いていると、体から湯気の出た猛獣をあちこちで目にする。

・・・温泉の温度って何度くらいなんだろ・・・

しばらく進むと、遠くに切り立った壁が姿を現した。

「ありや、あの崖は登れないなあ・・・

滝に近づくには湖に入らなきゃダメか。マイト、泳げる？」

マイトは首を左右に激しく振った。

・・・泳げそうな気もするけどな。

マイトにとっては、未知の体験か。

「さて、泳ぎますか。こんな時のために、水着を持ってきてたしね」

服を脱ぎ、リュックに詰め込む。

リュックは防水仕様なので水が入ることはない。

着替える様子をマイトがじっと見つめていたので、

マルクは少し恥ずかしくなった。

「よし、準備完了。あ、この壺、水が入ってこないかな？」

ブルックスを入れている壺を湖に浮かせてみる。

「ちゃんと浮くね。何とかなるか」

マルクはマイトを頭に乘せて、湖を泳ぎ始めた。

「うわ・・・いい温度だー！！ しばらく浸かってから行くか」

「キュキュー！」

マイトが激しく髪を引っ張る。

「何だ何だ、何が言いたいのか？」

マイトは髪を引くことをやめない。

「上を見ろって事？」

マルクは空を見たが、マイトを襲うような鳥が飛んでいるわけでもない。

今度は髪を引くのをやめ、頭を押し始めた。

「もう少し下？」

視線を下にずらすと、滝の上に人影があったが、

湯気のせいでうまく見えない。

「弟子希望者かな？ あっ！！」

その人影は、滝から湖に向かって飛び込んだ！

魚人現る

次の瞬間、大きな音と水しぶきを上げ、湖へと着水した。

マルクは泳いで着水地点まで来たが、なかなか上がってこない。

「無茶するなあ・・・滝からここまで何メートルあると思ってるの・・・」

顔を水面につけて底を覗いてみると、今いる場所だけが異常に深い。

・・・底が見えない。

あの人？ は、どこまで潜ってしまったのか・・・

しばらく見ていると、暗い奥底から何かが上昇してくる。

・・・人？ 猛獣？ 何だ、こいつは！

人間の姿はしているが、頭は異様に長く、

腕の先は膨らみ、そこからさらに伸びている。

上がってくるにつれて、その人？ らしき姿がよく見えてきた。

・・・ええ！？ 何これ！？ 顔に魚、腕にも魚が付着している！

ん？ 違うな。魚を両手に持って、口にもくわえてるんだ！

水面から姿を現した、そいつは・・・おじいさんだった。

「ええ！？ 何、この状況！」

その老人は、口にくわえていた魚を投げてよこした。

「食べるかね？ 絶品じゃぞ」

「あー、はい。いただきます・・・」

マルクはその時、図書館で見たダイじいの顔と、

今、目の前にいる老人の顔が同じことに気づく。

「もしかしてあなたは・・・」

「あー、そういうのは後々。滝の上に行くぞ」

そう言うと泳ぎだし、そのまま滝の中に消えた。

「僕らも行くぞ。しっかりつかまってるよ！」

泳ぎながら滝のすぐそばまで来ると、裏側に洞窟が隠れていた。

「いったん、潜らなきゃ行けないな・・・マイト、大丈夫？」

「キュ！」

「よし、潜るぞ！」

1人と1匹は滝の手前で潜り、しばらくして滝の裏側へたどり着いた。

「こんな所に洞窟があったとはね・・・」

洞窟の先は暗くなっていたが、一箇所だけスポットライトのように

照らされている場所がある。

そこまで行って見上げてみると、空が見えた。

「おーい、洞窟の先には行っちゃいかんぞ。上じゃ上」

「先には何があるんですか？」

「秘密じゃ」

・・・何で秘密？

先を気にしつつ、上に向かって登り始めると、

岩に白い粉がこびりついている。

・・・何かの糞？ 洞窟の先に猛獣でもいるんだろうか？

「ほれ、魚をよこしなされ。マイカモウは早いとこ調理しないと、

鮮度が落ちて食えなくなってしまうぞ」

そう言うと、ナイフを手にして、見事な手さばきで解体し始めた。

試練の達成

・・・凄い手さばき。しかも・・・このナイフ、柄が無い！

刃渡り 30 センチはある、葉の形をしたナイフは、

すべての面が砥がれ、持つべき場所が存在しなかった。

「やっぱりあなたは・・・」

「おおっと、手が滑った！」

老人の手からナイフが抜け、マルクの方に飛んできた！

マルクはすかさず、手の硬化を強化し、ナイフをキャッチする。

その様子を見た老人は目を細め、続いて微笑んだ。

「お主がマルクじゃな？ 話はカルサーから聞いておる」

「やっぱり・・・ダイじい、じゃなくてダイマール・シンズイさん、ですね？」

「ふふ、ダイじいで結構じゃよ」

やっと出会えた・・・

でも、何で僕がマルクだとわかったんだ？

マルクの思いを見透かしたダイじいは答えた。

「普通の間人が、そのナイフを受け止めたら、手が切れてる所じゃ」

「えっ？ 普通のナイフなのに？」

「特殊金属で作られたナイフでな。目に見えない程度の振動を繰り返しておる」

「ふーん・・・高そうですね」

「買うとしたら、一千万ラースは下らないそうじゃよ」

「い、いっせんまん!？」

「これは以前に、一緒に旅をした友人が持っていたものでな、

彼が引退する際に貰ったものじゃ」

「お金持ちだったんですかね」

「この合金を開発した、張本人じゃよ。」

彼はその後、ハンター協会会長となったわい」

「ああ、あの人か。前に学校へ来たことがありましたよ」

「おっと、話はここまでじゃ。マイカモウが不味くなってしまうぞ」

マルクからナイフを受け取ると、魚を捌き、薪の上にある鍋に放り込んだ。

「マイカモウは鍋に限るわい。出汁がよく出るし、身はプルプルじゃ」

ダイじいは続いて、何だか分からない植物を鍋に放り込む。

「・・・あまり見ない野菜ですね」

「そりゃそうじゃろ、そこら辺に生えとる草をむしって来ただけだしのう」

「鍋が台無しじゃないですか・・・」

「ふふ、冗談じゃ。ちゃんと食べられる野菜だから、心配するでない。」

ほれ、この大きい葉は、〈ブラーボ〉という野菜でな、

シャキシヤキの食感が特徴じゃな。こっちの細いのは、〈ブリング〉じゃ。

煮ると透明になって、舌触りがなめらか」

「よく知ってますね・・・」

「これから君も覚えるんじゃ。様々な事を知らないと、

外の世界では生きることが出来んからな」

「え・・・じゃあ、僕を弟子にしてくれるんですか!？」

「そりゃそうじゃろうが。誰の為にテレビの力を借りたと思うとる」

「でも・・・皆、弟子になろうとして、やって来てるのに・・・」

「ま、それが問題じゃのう。

・・・そうじゃ、いいこと考えた！ わしの仕事を手伝ってもらおうかのう」

「それがテスト？」

「この森で一度だけ発見されたキノコを、皆で探してもらおう。

ハント難易度がS級じゃがな」

「そのS級って何ですか？」

「一流のハンターでも入手困難って奴じゃよ」

「・・・僕に見つかるでしょうか？」

「そうじゃのう、頭の上に乗っとる奴に聞いてみたらよい」

「えっ、マイトに？」

「ほう、マイトと言うのか。そもそも、あのキノコは苔の下にあってのう。

シグルの好物じゃ」

「では、彼に頼ってみます」

「それが賢明じゃの。ほれ、煮えたぞ」

”力”の正体

食事を終えた2人は、滝の上にある森の中に入っていく。

「全員が到着するまで約一週間かのう。それまでに君に

教えておくとなれば、わしらが持っている、特殊な力のこと、

その使い方じゃな」

「硬化の力、ですか？」

「硬化の力が全てではない。これは単なる、得意分野じゃよ。」

「あっ、そうか！ カルサーが百発百中なのも、それが彼の

得意分野って事ですね」

「そういう事じゃ。じゃが、この力を極めれば、誰の得意分野でも

真似する事が出来るようになる」

「硬化の力も強力になりますか？」

「勿論じゃ」

「ぜひ教えてほしいです！」

「まあ、慌てるでない。まずは基本中の基本である、

”力”の正体を明かそう」

ダイじいは教えてくれた。

”力”の正体は、目に見えない生物が関係していると。

その生物自体がエネルギーであり、〈エネルギー生命体〉と

呼ばれている。

その生物は、あらゆる場所に存在し、もちろん人の体の中や、

表面にも存在する。

その生物は変化自在、どんな物質にも変わることが出来る。

「そんな生物がいるなんて・・・彼らのおかげで、

この力は生まれるんですね？」

「硬化の力を使っていて、おかしいとは思わなかったか？」

硬化しているはずなのに、体は自由に動くなあ、とか」

「あっ！！ そう言われてみれば・・・これが普通だったので

気づきませんでした・・・」

「それはのう、彼らが複数の生物である事を示しておく。

一つ一つは、どんな物でも跳ね返す程の硬さ、質量だが、

その複数の生物が、さながら鎖かたびらのように、自由に

動けるからこそ、硬化していても自由に動き回れる所以じゃよ」

「じゃあ、なぜダイじいと僕とでは強度が違うんですか？」

「それは生物の数で決まっておるからじゃ。生物が少ないと、

全身を膜のように覆うだけじゃから、繋がりがすぐ解けてしまう。

生物が多ければ、より密度が上がるし、鎧のように分厚く

纏う事ができる」

「なるほど・・・では、どうすれば、彼らとより多く友達になれますか？」

「では、わしの質問に答えてもらおう。マルクは、その力に

感謝したことがあるかね？」

「えっ、感謝ですか？・・・そういえば、あまりありません」

「まあ、無理も無いかの。この力を自分の力だと信じておる輩が多いからのう。

では、仲良くなるにはどうするか、もう分かったじゃろ？」

「・・・僕は、この力を借りてるだけなんですわね・・・そうか、

自分とは別のものだとすれば、手伝ってもらっている相方に感謝するべきだ」

マルクはそう言うと、大声を張り上げて叫んだ。

「ごめんね！今まで自分の力だと思って命令ばかりしてたけど、

今日からは君と僕は友達だ！今までありがとう！

そして、これからも友達として力を貸してね！」

叫び終わった瞬間、全身がざわついた。

「この感覚は・・・答えてくれたってこと？」

「よくわかったのう。彼らは心の奥からの君の思いを受け取って

合図を送ったのじゃ。これで、彼らが仲間がを呼んでくれるはずじゃよ」

「えっ、これだけで！？」

「まあ、すぐにわしのように増えんがの。じゃが、彼らの居心地を

良くしておけば、必ず仲間を呼び寄せるし、その仲間が居着いてくれるはずじゃ。

では、絶対厳守すべき事を述べるぞ。

不平不満は述べてはならん。彼らは不満が嫌いじゃ。

悪口も言ってはならん。汚い言葉も彼らを遠ざける。

イライラするなかれ。彼らの居心地が悪くなるからのう。

これらを守っとれば、いずれわしのように強力な力を

借り続けられるじゃろ」

信じる心と自惚れ

「次は使い方を教えて下さい！」

「そう焦るな。まず、この力が生物だという事を話したな？」

彼らは”思い”で動く。何事もイメージが大事じゃ。

使い方によっては、こんなことも出来る」

ダイじいはそう言うと、手元にあるカタイハの木に向かって

手刀で切る仕草をした。

すると、ズツと滑ったかと思った瞬間、

木は激しい音を立てて倒れていった。

「手を触れてないのに・・・？」

「切っておるのは手じゃないぞ。わしのイメージによって剣のような

形になった彼らが切っておるのじゃ」

「そんな事が可能なんですか？」

「全てはイメージの成せる技じゃよ。ほれ、やってみい」

マルクは手から刃が出ているイメージをした。

「えいっ！」

手元にあった木が、ガサガサと音を立てた。

だが、切ることはおろか、切り傷も付いていない。

見てみると、木には凹みができているだけだった。

「ふむ、ずいぶん分厚い剣を作ったのう。

おもちゃの剣のように刃が付いておらん」

「ええー・・・そうか、厚みはイメージしてないかも」

「リアルにイメージする事が重要じゃよ。それにマルク、

君はまだ、彼らの力を信じきってはおらんな？」

「えっ、そんな事は・・・」

「頭で分かったつもり、は、半人前じゃぞ。心でも彼らを信じて

やらねばな。ま、時間はかかるじゃろ」

「・・・頭と心って違うものですか？」

「常識では、同一だと語られるが、わしゃ違うと思っとる。

頭と心・・・いや、体と心は別個のものじゃ。

そして、それを繋ぐ役割を担っているのが彼らなんじゃよ」

「体と心は別々・・・ふうむ、教わったこととは違うけど、

ダイじいがそう言うならそう考えます。」

「他人の考えを丸写ししてはいかんよ」

「自分で経験して考えろ、と？ あ、他人といえば、

僕らと他人とでは何が違うんでしょうか？

「進化人か、そうでないか、かの？ うーむ、進化人というもの

ちと違う気もするのだがの・・・ある人はこうっておる。

進化人は役目を持って生まれてくる、とな」

「ダイじいもそう思ってる？」

「思わん！ わしとしては、単なる個性に過ぎぬ、とな。

この操る力を特別視してはならん。それは自惚れに繋がる。

謙虚になれ！ お主のやれることをやったらよい」

「あ！」

「何じゃ？」

「似たような台詞を、ムサカさんから聞きましたよ」

「ほう、あいつに会ったか！ あいつには苦労させられた・・・」

「弟子ではないんですよね？」

「弟子は、＜シンド＞とエンドゥとカルサーだけじゃ」

弟子の最後の一人が判明。でもシンドって誰だ？

「ムサカはのう、わしを追い回し、百回以上「弟子にして下さい！」を

聞かされたわい。わしがシェルドワールに入る前に訪れてのう、

彼は、「これ以上は追えない・・・私をどうしても弟子にしてくれないなら、

ここでお別れです」と言ってきた」

「ダイじいは何と？」

「弟子には出来んが、力の秘密を教えてやったわい。

涙を流して感謝しとったぞ」

「ダイじいをよく知ってたから、今回の騒動も変だと気づいたんですね。

あ、そういえば、ムサカさんは進化人ではないですよ？」

「ごく普通の人間でも効果はあるんじゃよ。たとえば病気になりにくくなったり、

傷が早く治ったり、頭脳明晰になるらしい」

「へえー、今度ヤンバに教えてやろう」

「あまり人には話さん方がよいぞ。変人に思われるからのう」

「ヤンバはそんな人じゃないよ・・・でも、他の人には話さないほうがいいか」

森の管理者

「では、次に応用編じゃ。彼らはイメージによって動くと教えたな？」

「硬化を手から引き伸ばしましたね」

「それを更に応用すると、手からも離すことができる」

ダイじい木に巻きついてた蔓を切り取り、片方を手に持つと。

柔らかかった蔓がピンと一直線に固まった。

「こんな具合に、即席に武器が作れるわい。しかも・・・」

硬化させた蔓を木に向かって槍のように放つと、

木に勢いよく突き刺さった。

「蔓に付いて行った彼らはどうなるんですか？」

「わしがイメージした時間だけそこに留まる。

後は勝手に戻ってくる、と思われる」

「思われるって・・・」

「見えんのかな、そう思うしかなかなかろう」

「なるほど。って、納得は出来ないですけど」

「長く付き合っていれば、わかるようになるじゃろ・・・」

その他にも、動物と簡単な意思疎通ができる」

「うそっ!？」

「何じゃ、わしを信用しとらんのか？ 見ててみい」

そう言うと、マルクの頭の上にいるマイトを撫でた。

マイトは一鳴きすると、マルクを駆け下り、地面から

一枚の葉を取って戻ってきた。

「すごい・・・マイトと会話したんですか!？」

「いや、イメージを彼らに伝えてもらっただけじゃよ。

伝える事は単純なほどよいぞ。難しいイメージは理解できないからの」

「すぐできるんでしょうか？」

「何事も鍛錬じゃ。これを集合時間までに慣れておかなければ、

わしのテストには合格出来んぞ」

「うー・・・試練は続いていますね・・・」

「楽しみながら続けると良い。さて、今教えられる事は全て教えた。

後は正式な弟子になった後じゃ。質問はないかの？」

「知りたいことは一杯あるけど・・・うーん」

その時、マルクの脳裏に、あの光る生物が現れた。

「あ！ そうだ、一番聞きたいことがあるんです！

この森で見た、光る昆虫について、何か知ってませんか？」

「そいつはのう、ハンターの間で囁かれ続けている伝説のようなもんじゃ。

我々の間では<森の管理者>と呼ばれとる」

「えっ、あの小さな昆虫が森を管理してるんですか？」

「侮ってはいかんぞ。小さくても、針の一突きで猛獣を倒す程の毒を持っておる」

「やっぱり・・・凄い針を持ってたもんなぁ・・・刺されなくてよかったです」

「何じゃ、間近で見たのか？」

「僕の手のひらに乗ってきたんですよ。綺麗だったなー・・・」

「・・・」

ダイじいの様子がおかしい・・・

さっきまで陽気に喋っていたのに、まるで別人だ。

「あの・・・ダイじい？」

「おお、すまんのう、少し考え事をしとったわい・・・」

しかしのう、まさか手に乗ってきたか・・・」

「何か問題でも？」

「いや、その逆じゃよ。マルク、君は森に生存を許されたのじゃ。

管理者が殺すのは猛獣だけではない。我々ハンターの中にも

殺された者がおる」

「・・・生死の理由は何なのでしょう？」

「そうじゃのう、今まで見てきた事から推測するに、

猛獣を殺しすぎた場合や、あるいは・・・彼のように

森に及ぼす影響が強い者が狙われる」

「彼・・・？」

「ZAN創設者にして、現在も現役でハンターをしている、

<ザン・イバーラ>の事じゃよ」

ザン・イバーラ

「ザン・イバーラ・・・」

「” たった一代で帝国を作り上げた男” と呼ばれとるのう。

彼も進化人でな。本人はその力のことを<隠者>と呼んでるらしいが・・・

その力故に森の管理者の目をかいくぐっておる」

「凄い人ですねえ・・・」

「ハンター産業を牽引する彼がいなければ、ハンターは、ごく一部の人間

だけになってたじゃろう。それ故に森の管理者に狙われるのじゃ」

「むやみに自然は壊せないって事ですね・・・」

「まあ、そう簡単に壊れるようなものでもないがのう。

おや、お呼びでない奴らが来おったのう・・・」

見ると、遠くからカメラや放送機材を運ぶ一行が現れた。

「まさか、ハンターズTV？」

「あそこまで大々的に宣伝したからのう。試験の様子とかを

撮影しようって腹じゃろ。あわよくば、次なるヒーローの誕生を

最初に放送したいと考えておるな。

・・・ではマルク、ちゃんと言われた事を修行しておくんじゃぞ。

では、集合時間に会おう」

ダイじいはそう言うと、ものすごい速さで山を下っていった。

「速っ！ あれでよくぶつかったりしないもんだな・・・さて」

マルクは頭の上にいるマイトを、ひょいと手のひらに乗せた。

「マイト、君の力が必要になる。修行に付き合ってくれる？」

「キュ！！」

「やる気十分だな。・・・しかしマイトは人の言葉がわかるのかな・・・」

まっ、考えても仕方ないか。マイトを信じるしか無いね」

マルクとマイトは、より森の奥に分け入り、修行場所を確保した。

「さて・・・まずはマイトとの意思疎通か・・・ダイじいがやってみたいに

葉っぱを持ってきてもらうか」

まずはイメージ。

カタイハの葉をイメージし、それを手に取るマイトをイメージした。

そしてマイトを撫でて、彼らに自分のイメージを伝えてもらう。

するとマイトが地面に降り、葉をつかんだ。

「よし！ 偉いぞマイト！・・・あ、次の動作をイメージしてなかったな」

マイトは、葉を抱えながらマルクをじっと見た。

「マイト、それ持って上がってきて」

「キュ！」

マイトは葉を口にくわえて手まで戻ってくる。

「・・・やっぱり、言葉がわかってるとしか思えないけど」

マイトは特別なんだろうか・・・

「ま、でもこれで会話とイメージを使った意思疎通ができるってわかった。

後は、よりスピーディーにイメージを作って送ってもらわなきゃ」

マルクは木の前に立ち、イメージする。

「ナイフのように鋭利に、より薄く、より長くイメージ・・・

頼んだぞ、愛しきエネルギー生命体達」

木から少し離れ、手刀を振り下ろす。

葉がカサカサと音を立て、静まりかえった。

「む・・・切れてはいるけど浅いなあ。ナイフで切りつけた後みたいだ。

・・・そうか、斧みたいな重量のイメージも必要って事か」

マルクはその側に寝転んだ。

「まだまだやることが一杯あるな・・・あと一週間、

どこまで出来るようになるかな・・・」

その後、マルクは朝から晩まで修行に明け暮れた。

第 1 1 章 探索

謎の少年 モリト

早朝、マルクはブックリーダーを取り出し、日付を確認する。

「来たね、試験当日。では、出かける前に最後の確認といきますか」

マルクはマイトにイメージを伝えた。

するとマイトは、マルクの周りを五周して戻ってきた。

「ナイスだマイト」

「キュ」

「大分早くイメージできるようになったな・・・よし、次！」

マルクは傷だらけな木の前に立つ。

「今日は切らせてもらおうよ」

手刀が一閃する。

木が激しく揺れ、バキバキと音を立てて折れた。

「ありゃー！途中で折れたか・・・叩き折っただけみたいだな。

でも、確実に進歩してる！」

とは言っても、30センチに満たない、若い木だけど。

カタイハの木は、年をとるごとに硬くなっていく。

ダイじい切った木の直径は1メートル程度だったから、

これより更に硬いはず・・・

「ま、修行のし甲斐があるよ・・・さて、出発するかい？」

「キュッ！」

滝を目指してしばらく歩いていると、

周囲にちらほらハンターが見え出した。

その時、不意に背後から背中をつつかれた。

「うおっ！？ 何？」

後ろを見ると、子供が自分を見上げていた。

「ねえ、おに一さん、滝に行くんだろ？ 俺も一緒について行っていい？」

「ええ！？ 君も弟子希望者！？ って言うか、どーやってここまで？」

「歩いてきたよ。ちなみに、俺はデシキボーシャじゃないから。」

「じゃ、何のために滝へ？」

「これってさ、ビッグイベントじゃん。間近で見たくってさ」

「間近でね・・・」

マルクは困惑していた。

歳はほとんどマーレイと変わらないか、多少年上くらいだ。

それなのに、この森を歩いて来た！？ 普通の服で、

しかも武器らしいものも持ってないのに！？

マルクの心を見透かしてか、少年はニヤリとした。

「あれ、おに一さん、知らないの？ グルッセから来れば

猛獣がいないんだぜ。歩く距離は二倍になるけど」

「知らなかった・・・僕はグリントゾーンからだよ・・・」

「おっ、おに一さん、タダモンじゃないね！ そんなナイフだけでここまで来るなんて」

「そ、そんな事はないけど・・・」

「あ、俺の名前はモリトっていうんだ。よろしく」

「僕の名前はマルク。こっちはマイトだ」

「キュッ」

「よろしく、マイト」

マルクは何とか自分の心を納得させ、一緒に滝へと向かった。

有力候補

滝の周りには、まだ朝だというのに、

すでに百人を超えるハンターが集まっていた。

「うわー・・・約束の時間までに、どれだけ増えるんだろ・・・」

「千人はいくだろ」

「まさか・・・でもありえるかも」

「それに、俺みたいな物好きもやってくるだろうから、

もっと増えるな」

「物好きっていうか、野次馬じゃないか？」

「言ってくれるじゃんか」

どこからか、端末の着信音が鳴った。

「げっ！ 母ちゃんだ！ 着信拒否しとくの忘れてた・・・えいっ」

モリトは電話を切った。

「おい・・・母さんに内緒でここまで来たの？」

「ん？ 父さんにもナイショさ！」

「どれだけ行動力があるんだ、君・・・」

「俺は、思ったとおりに行動するんだ。意思決定の速度は、

あのダイジイより早いぞ」

そう言うと、モリトは端末をいじり始めた。

モリトの母さんは心配しているだろうな・・・

今までも色々なことをしてそうだし。

「おっ、このサイトで弟子予想をやってる、

おー、すげえ顔ぶれがそろってるぞ」

「どんなのがいるんだ？」

「一番有力なのが、ハンター歴20年でA級ライセンスを持つてる、

オリバス・キャメルって人。ランキングでも50位以内に入ってるね」

「何だその、ライセンスとかランキングってのは？」

「げ、そんなことも知らないの？ ライセンスはA級B級とあって、

キケンが高いエリア行くことができるんだ。ランキングってのは、

よーするに、ハンターの中で誰が人気かってことだよ」

「ふーん・・・本当に知らないことが多いな」

「B級ライセンスは取っておいたほうがいいよ。行ける場所が90%になるから」

「あと10%はA級の人しかいけないのか」

「そういうこと。例えば、ダイじいがセイハしたシェルドワールがA級」

「よく知ってるねえ」

「マルクに一さんが知らなさすぎ」

モリトは端末をいじり、有力候補を挙げていった。

「二番目が、ヨシュオ・トシュオ兄弟のヨシュオの方、三番目は・・・お、

この人もA級持ってる。カザムキー・ヨームって、食獣植物研究の第一人者じゃん」

「うわー・・・道のり険しいなあ・・・」

「まっ、こんなのカンケーないよ。父さんによると、ダイじいは

メディアを利用しただけで、弟子は決まっているって言ってたしね」

「それじゃ、皆は無駄な勝負をしに来たってことになっちゃうよ」

「実際そうだもん。ダイじいは一体どうやってみんなをナットクさせるつもりなんだろうね」

「・・・そうだよねえ」

「・・・マルクに一さん、口堅いねえ。俺に対してウソついてもしよーがないよ。

手も触れずに木を切り倒したの見ちゃったのにさ」

やっぱりー！？

いやいや、落ち着け。

触れないで木を切るくらい、できる人は一杯いるって！

「触れないで木を切り倒すくらい、ライセンスもってる人なら、どーってことはないだろ？」

世界に何人だっているよ」

「だーから、俺にはウソつけないって言ってるじゃん。

返答に時間がかかりすぎだよ」

「そんな馬鹿な！ 会話のタイミングは変えてないはず・・・あーっ！」

「うっししし、あーあ、自分から白状しちゃった」

「こっ、こんな子供に誘導尋問されるとは・・・あんた何者！？」

「ナニモノだっていいだろ。俺は常に会話のタイミングや表情、

しぐさを確認してるからね。俺をだませるのは、プロのうそつきだけさ」

「嘘つきにプロがいるのか？」

「・・・そのうちここにやって来るだろ。会いたくないけど」

フーリン茸

時間が経ち、約束の正午になった。

周りはずでに人であふれている。

すると、滝の突端から煙が引き出し、

薄れた時には、ダイじい³が姿を現していた。

周りから歓声⁴が上がり、テレビカメラの前ではリポーターが

「ダイマール氏が今、姿を現しました！ 今まで一体、どこに隠れていたのでしょうか！？」

と、実況している。

「スゲーなー！ どんな手を使ったんだろ？」

マルクは全て分かっていたが、あえて言わないことにした。

ダイじい³が手を上げると、歓声⁴が止んだ。

「皆さん、よく来たのう。わしゃ、弟子を一人採ると言っただけなんじゃがのう。

まあ、来たものはしょうがない。一つ、わしの仕事を手伝ってもらおう。

その成績如何で弟子になる人を決める。それでよろしいかな？」

周りから拍手があがる。

「では仕事じゃ。わしゃ、とある人から、あるものの採取を頼まれておる。

本来そのあるものは、フリン地区のシュラブ湿原で採取されるものじゃが、

依頼者はここ、トガル地区産を望んでおっのう」

辺りがザワザワとした。

フリン地区とトガル地区で採れるもの・・・

いや、トガル地区で採れた例があったものと言えば・・・

「何ザワザワしてるんだ？」

「マルクに一さんは知らないだろうけど、ダイじいは、

とんでもないモノを探させる気さ」

「とんでもないもの・・・？」

「知識豊富なハンターが多いようじゃな。ご存知の通り、フーリン茸は

20年前に一度発見されたきりじゃ。それ故に色々な噂が飛び交っているの。

依頼者は真相を確かめるために一千万ラース用意すると持ちかけた」

い、一千万ラース！キノコに一つに！？

「これがそのフーリン茸じゃ。シュラブ湿原のものより色白で、表面に

筋状の模様が入るとるのが特徴じゃな」

巨大パネルをかざしているダイじいと目が合った。

すると、脳裏にフーリン茸と、なぜかメモ帳のイメージも一緒に送られてきた。

なるほど。イメージを記憶しておけ、という意味だ。

マルクがにこりと微笑むと、ダイじいは僕から目をそらした。

「期限は明日の正午まで。一番最初に持ってきた者を弟子とする。

森は広いぞ。ほれ、早く行かんかい！」

その合図とともに、ハンターが一斉に動き始めた。

マイトの出番

マルクはまだ、そこに留まっていたので、テレビの取材を受けてしまった。

「あらあなた、他のハンターはほう出発したわよ？」

「僕も、これから行きますので」

「お名前は？」

「マルクです」

「では行く前にカメラに向かって一言どうぞ！」

「えーっと、母さん、頑張るからね！ あ、マーレイも見てるかな？」

「頑張ってくるよー！」

そう言うと、マルクは走り出した。

その後をモリトがついていく。

「モリト、一緒に付いてくる気？」

「おもしろそーじゃん」

「あのねえ・・・責任持てないぞ」

「だいじょーぶ、マルクに一さんが助けてくれるでしょ？」

それに俺、逃げ足はえーのよ」

「はぁ・・・仕方ない。それだけ言うなら連れてってあげる。

ちゃんと走りについてこいよ！」

しばらく走り、森の奥へと入る。

モリトは言われた通り、走ってついてきた所か、

汗もかかずに余裕の表情。

・・・本当に、何者なんだ、こいつは・・・

「さて、マイト。出番だぞ！」

マイトは一鳴きすると、頭から手に移動した。

「さて・・・イメージを伝えるのはいいけど・・・マイトの後を

ついていく訳にはいかないな」

「マイトに探してもらうんだ。でもなあ、マイトの足じゃあ、一ヶ月はかかるだろ」

「うーん、何か、僕たちを指示する方法が必要だな・・・」

「・・・昔の映画でさ、頭の上に乗ったネズミが人間を操作するってのを

見たことがあるんだ。それが使えない？」

「え？ どうやって？」

「進む方向の髪を引っ張ってもらえばいいじゃん」

「なーるほど、やってみるか・・・」

マルクはキノコのイメージと、頭の上に乗って、髪の毛を引っ張るイメージを伝えた。

「進む方向の髪の毛を引っ張るんだ。できるかい？」

「キュー！」

マイトは急いで頭に上り、前のほうの髪を引っ張り始めた。

「・・・前、でいいのかな」

「こればかりは、信じて行くしかないよ」

「では、出発！」

二人と一匹は再び走り始めた。

キノコの在り処

一時間も経たないうちにマルクは息が上がっていた。

「くぅー！ キツイ・・・長く走るってのはキツイなあ・・・」

「マルクに一さん、走るリズムがバラバラだよ。

それにペース配分もムチャクチャだね」

「マラソンなんてしたことないしなあ・・・って、モリトは全然疲れてないね。

どーなってんの、その体」

「子供の頃から父さんと一緒に地上へ行ってたからね。

体力には自信があるんだよ」

「ふーん・・・」

これって体力だけで説明できるんだろうか？

何か隠しているような気がしてならない・・・

「ねえ、これは俺のカンなんだけどさ。マイトはグリントゾーンに向かっているよね？

もしかすると、コケが関係してるのかもね」

「なるほど、カタイハの木が茂ったここよりは環境がいいかもね」

その時、マルクは何かを忘れていたような感じがした。

なんだっけ？ 確かダイじいからヒントをもらったような・・・

「だったらさ、こんな所でグッタリしてる場合じゃないでしょ」

「・・・そうだね。あ、モリトが前に行ってよ。僕は後をついていくから」

「ペースメーカーってやつをやれって？」

「その通り。モリトは知ってるんだろ？ 走るリズムって奴を」

「ようし、マルクに一さんに最適なリズムで走ってやるよ」

「では、行くか！」

こうして二人は走り始めた。

しばらく走っていると、体が楽に走れていることに気づく。

・・・これが走るリズム。

覚えておくと便利かもね。

しかし、前に行くモリトは、その姿を見せることで

僕のリズムを取っているってことか。

子供ながら、凄いでモリト・・・

「そろそろ休むかい？」

モリトがマルクを気遣って声をかけた。

「いや、調子が出てきたみたいだ。もう少し走ろう」

「りょーかいっ！」

更に走っていると、前方に日の光を反射する水面が見えた。

「えっ！？ 川か？ 走る方角を間違えてた？」

「・・・よく見てみなよ。これは湖さ。つまり、南よりに走ってたってこと」

「んー？ でも、マイトの指示に従ってたはずだがなあ」

「マルクに一さん、マイトはグリントゾーンに行く気はないんだぜ？」

キノコを探してるんだから・・・」

「おっと、忘れてた」

マルクはブックリーダーを取り出し、地図を確認してみる。

「あ、これか。フェンカの湖。確かに南だな」

マイトがスルスルとマルクを降り、地面で匂いを嗅ぐしぐさをした。

「キュッ！」

何かの匂いを感じ取ったのか、すぐに走り始める。

「マルクに一さん、行くよ！」

「ちょっと待て、ブックリーダーしまわなくちゃ」

二人は慌ててマイトを追う。

マイトはわき目も振らずに進んでいき、苔の中に潜り込んだ！

「しまった、追えないぞこりゃあ」

「・・・ああー、そう言えば、キノコは地下にあるって言ってたな・・・」

これじゃあ見つからないわけだ」

「だったら、片っ端からコケをはがすぞ！」

マイトが潜ったと思われる苔を引き剥がし続けると、

途中で空洞になっていた。

そしてそこには、フーリン茸が大量に生えている・・・

「これ！？ こんなに生えちゃってていいの？」

「こりゃーいいね！ バーベキューで食べようぜ」

「えっ！？」

「一本だけ確保しておけばいいんだろ？ 後はライバルが現れないように

全部食べちゃえばいいんだよ」

「ああ・・・それもそうか。あ、苔を戻すのを忘れないようにね」

一千万ラーズの味

パチパチの木が爆ぜる音が聞こえ、辺りに甘い香りが漂い出す。

「いい匂いだなー。一つ一千万のキノコか・・・」

「そろそろいいんじゃない？ 早く食べようよ」

「まあ待て、あと少し。しかし、火を起こすの楽だったなー。

<クイックファイア>だっけ？ 後で僕も買おっと」

「マルク兄さん、<ファイアーリキッド>なんて時代遅れだよ。

そもそも、火種が必要な道具なんて・・・」

「まあ・・・ね。ファイアーリキッドは火を点きやすくするためのものだからね。

お、もういいかな」

マルクは、網の上からキノコを取ると、そのままかぶりつく。

「うわっ！ 何この旨みと甘み！ こんな美味しいキノコがあるとは・・・」

感動しているマルクをよそに、モリトもキノコを手にとると、

傘の中に溜まったダシを一飲みし、キノコを半分に引き裂く。

そのまま香りを確認しつつ、口の中に放り込む。

「うん・・・シュラブ湿原産と比べると、香りが良く、甘みも強い。

しかも雑味が無いとはね。こりゃ大当たりだよ」

「何、その料理長とか評論家みたいな感想は？」

「俺は何度もシュラブ湿原に行って、フーリン茸を食べてるからね。

そこら辺にいるコックより味の違いがわかるんだよ」

「・・・ほんとに何者だ、あんた・・・」

「俺の父親は植物学者だからね。小さい頃から父について回ったんだよ。

あ、そもそもフーリン茸はダシを取るのに使われてて、普通は食べないんだけど・・・」

「おっと、そこまで！キノコが焦げちゃうよ」

モリトの解説を止めつつ、マルクはキノコを口に放り込んだ。

「知識欲より食欲が勝ってるね」

モリトはそう言うと、キノコを一つ摘み、マルクの頭の上にいるマイトに食べさせた。

「キュキュー！」

「おや、シッグルも生よりは焼いた方が好きなんだね」

笑顔だったモリトの表情が曇る。

・・・こちらに向かってくる人がいる。

数は・・・三人か。

おそらく匂いを探ってきたな。

モリトが残っていたキノコを口一杯に頬張り、

あっという間に飲み込んだ。

「おいモリト、ずるいぞ」

「マルクに一さん、俺おしっこしてくる」

「えっ、ついて行こうか？」

「そんなにガキじゃないよ。猛獣が出たら、こいつで呼ぶから」

モリトはポケットから笛を取り出して見せた。

「それならいいけど・・・気をつけて」

「心配性だなー、母さんみたいじゃねーか」

「ほらほら、早くして来いよ」

「言われなくても行くよ。まったく・・・」

さて・・・マルクに一さんは、どうやって切り抜けるかな？

モリトの姿が森に消えたと同時に、近くから人の声が聞こえてきた。

キノコ強奪

「兄貴、こっちですって。俺の鼻がキノコを呼んでますぜ」

「スギータ、”キノコが呼んでる” だろ？」

「イリーガ、でめえっ！ 言い方はどーだっていいんだよ！」

「二人共、いい加減にしないか。ちゃんと俺様をサポートしろよ」

「あ、兄貴、こちら辺ですぜ。・・・って、誰だお前！？」

そこにはキノコを焼いていた網をしまっていたマルクがいた。

「ん？ マルクだけど？」

「聞いてねーよ！ おいおい、その網・・・まさかキノコを焼いたのか！？」

「ああー・・・なんと言うことだ。スリヴ兄さん、時既に遅し、ですよ」

「まあ待てお前ら。一千万のキノコを焼いて食ったのはファンキーだが、

こいつも弟子希望者だろ？ 全部食うマネはしねえはずだ」

「さすが兄貴！ 冴えてますねえ。おいミルク！ 兄貴に

キノコを差し出せ。そーすりゃあ・・・」

「そのようにすれば、痛い目には遭いませんよ？」

「イリーガ！ 俺の台詞を盗るんじゃねえ！」

この漫才のような会話に、マルクは呆然としていた。

「見ろ、お前ら！ 威嚇にも脅しにもなってねえぞ！

そもそも名前はミルクじゃあねえ！ マルタだ」

「・・・マルクです」

「あ、そうだった・・・お前も早く差し出せ！」

「そうは言っても」

「この野郎・・・いや待て、キノコが入ってるのは、その坪だな？」

「い、いや、それは違う！」

マルクは慌てて壺を取ろうとしたが、スギータに奪われてしまった。

「ミエミエな嘘はつくなよ。兄貴、どうぞ」

「ご苦労」

「・・・どうなっても知らないぞ」

「はっ！ 安い脅しだな、お前は！ ワンコインで買えるぜ！」

「スギータの脅しは、捨てる程の価値しか無いがね」

「イリーガ・・・今度俺を軽蔑しやがったら、振動刀で三枚におろしてやる！」

「お前が私に近づけると思ってるのか？ お前ごときが？」

「やめておけ、お前ら！ あまり俺を怒らせるなよ・・・」

一秒後には肉片になって、スパイクスの餌になってるぜ」

スリヴは無造作に栓を引き抜き、手を突っ込んだ。

「ん？ 何だこのウネウネした・・・ぎゃあああああーっ！！」

慌てて手を引っこ抜くと、手は血だらけになり、

指先から骨が見えていた。

「おの、おの、おのれええええーっ！ ブッタ切る！」

「だから言っといたのに・・・」

マルクは既に支度を調べ、手には大小二本の枝が握られていた。

スリヴのサンダーソーが襲いかかる！

マルクは避けながら、硬化させた細い枝をサンダーソーの隙間に突き刺す。

急激に動きを止められたギアは破壊され、使い物にならなくなった。

続くスギータの振動刀には、硬化させた太い枝を叩き付け、

一撃で砕いてしまう。

イリーガはナイフを引き抜き、マルクに投げつけてきたが、

それを枝で払い落とすと・・・そのまま逃走した。

「何やってる！ 追えー！ 絶対逃がすな！」

「おっと、そうはいかないよ」

茂みから悠々と姿を現したモリトに、三人は唾然とした。

「何だてめえ、ガキだからって容赦はしねえぞ」

スリヴはナイフを引き抜くと、モリトに襲いかかる。

「ごっついナイフ持ってるねー。でも、相手に当たらなきゃイミないよね」

モリトは不敵な笑みを浮かべると、あっという間に三人を打ち倒した。

三悪人の命運

「うー、やれやれ、面倒なことに・・・彼らを巻いて、

モリトの所に戻らなきゃならん・・・」

遠くから「おーい」と叫ぶ声が聞こえる。

あれ？ モリトの声だ！

「おーい！ あ、いたいた。マルク兄さん、俺を置いていかないでよー！」

「ご、ごめん、色々あって・・・三人組がいなかった？」

「さあ？ あ、そういえば壺が割れてたね。何があったの？」

「襲われた・・・訳でも無いけど、キノコを奪おうとする連中と

一悶着あったんだよ」

「うわー、やべえーじゃん！ さっさと帰ろうぜ！

行くぜマルク兄さん！」

「えっ、また走るのー！？ 全く・・・元気だねえ。

しかし・・・彼らはどこに行ったのやら？」

マルクはモリトに追いつこうと、急いで走り始めた。

その頃、倒された三人は、目を覚ましていた。

「うー、体が動かない・・・参ったなあ、兄貴・・・」

「くそ、あのガキに何かされたみてえだな」

「しかし・・・あんなのアリですか？ 何の装備も着けてないのですよ？」

「そーだよなあ・・・武器がナイフしか無かったとは言え、

ガキにボロクソやられるなんて・・・兄貴い、何者ですかありやあー・・・」

「世の中にはな、触れてはなんねー領域がある。

俺たちは、それを垣間見たのさ。恐ろしい・・・」

「・・・まあ、それも怖い事ですけどね。

近くに、もっと怖い奴がいるんですよ」

「何がだ」

「スパイクス・・・ですね」

「はあ？」

スロヴが、ぎこちなく首を回すと・・・すぐ側にスパイクスが立っていた。

「だれかあああああああー・・・」

あ、近くにスパイクスがいたっぼいけど、あいつら食べられたかな？

・・・それならそれでジゴウジトクって奴だな。

そんな事を考えながら、モリトは森を疾走していく。

第 1 2 章 弟子

モリトの料理

「おーい、モリトー！ リズム早すぎるぞ！ これじゃ、くたびれちまうよ」

「あ、自分のリズムで走ってた。ごめんごめん」

「そろそろ夜が近い。テント張って休もうよ」

「ええー？」

「この森で夜は危険だよ。真っ暗になって何も見えなくなる」

「ああ、それもそうだね」

マルクに一さんは〈空識〉を使えないんだな。

ちゃんと弟子になれば教えてもらえるだろうけど。

マルクはテキパキとテントを組み立て、中に明かりを灯す。

モリトがテントに入ると、あまりの狭さに驚いた。

「せまっ！ これ一人用だろ・・・」

「仕方ないだろ？ 二人で泊まるなんて思ってなかったし」

「俺の父さんが使ってるテントなんて、十人用だぜ」

「・・・組み立てるの大変そうだな」

「手で組み立てるワケないじゃん。全自動だよ」

「凄いのを持ってるねえ・・・あ、夕食どうぞ」

差し出されたものを見ると、それは小さなレンガみたいに見えた。

「・・・携帯食かよ。しょうがねえなあ、俺がとっておきの

鍋料理をごちそうしてやるよ」

「具材はおろか、鍋もないぞ？」

「鍋はここにあるよ」

モリトはポケットから袋のようなものを取り出した。

「袋？」

「水を入れれば、ちゃんと鍋になるんだ」

「へえー、こんなに柔らかい袋がねえ・・・」

マルクは物珍しそうに引っ張っていると、一部だけ硬い部分があった。

「そこ折り曲げて壊すなよ。加熱装置が入ってるんだ」

「ええ！？ これ単独で鍋ができちゃうの！？」

「わざわざ火をおこさなくていいだろ？ じゃ、俺は食材調達してくるから」

「あまり遠くに行くなよ。笛の音が届かなくなっちゃうから」

「大丈夫、一キロは届くから。じゃーねー」

そういうと、モリトはさっさと出て行ってしまった。

「・・・僕を信頼しすぎだろ。なあ、マイト」

「・・・キュッ」

ほどなくモリトは、たくさんの草を抱えて戻ってきた。

「これ本当に食えるの？ 筋しか無いような奴とか、

見るからに硬そうだったり、これなんて黒紫色してるぞ・・・」

「俺は植物学者の息子だぜ？ 任せなって」

果たして、鍋料理は完成した。

マルクが目を見張る程の調理法で、明らかに食べられなさそうな草が、

食材へと変化する。

「いやー、凄かった。モリトはすぐにでも学者になれるよ」

「俺は学者よりも料理人になりたいんだ。食べるのが好きだからね」

「君は凄い料理人になると思うよ」

「おや、光栄だねえ」

「では食べよう！ って、どーやって食べるんだ？」

「鍋といえば箸でつつくもんだ。ほら、二人分作ってきたよ」

「さすが！ じゃ、いただきまーす！」

こうして二人と一匹の夜は更けていった。

プリニーティー

次の朝、マルクはいつにも増して爽快な目覚めだった。

「・・・なんだ、この爽快な目覚めは。昨日の鍋の効果か？」

隣ではモリトが、マイトを抱えて丸くなって寝ている。

「寝顔を見ると、普通の子供なんだがな……」

マルクはモリトを起こさないようにテントを出た。

外はまだ薄暗い。

太陽がでていないのか、そもそも曇りなのか、

ここからでは判断できない。

「しかし……うまかったなー、あの鍋」

透明なゼリーみたいな食べ物や、独特な食感があるものや、

今まで味わったことが無いスープ……

思い出だけで唾液が出てくる。

「とりあえず、目覚めの修行といきますか」

そう言うと、マルクは森の奥へと走っていった。

「……マルクに一さん、これから走り続ける事を忘れたわけじゃなかろうね？」

テントの扉から、そっとのぞきこんでいたモリトが呟く。

「さて、朝食のティーでも用意しますか……確か、この辺りには

プリニー草が生えているはず」

テントの近くを搜索すると、見慣れた姿が現れた。

「おっ、これこれ」

モリトは素早くプリニー草を集め、クイックファイアで起こした火にくべる。

表面の皮が焼けて広がってくるのを確認し、火から取り除くと、

めくれた皮を削ぎ始めた。

「この皮、取っとかないと、苦くなるんだよなー。

この手間さえなけりゃ、楽にうまい茶が飲めるのに」

皮をむいたプリニー草を、マルクが持ってきたジャバラやかんに詰め込み、

ろ過ポットから水を入れる。

「あれっ、水がほとんど出ないじゃん。あ……このポット、水生成装置が

入ってないのか！ マルクに一さん、わざわざ川で水汲んでたのかよ……」

モリトは、ひとつ走りして川で水を汲んで帰り、やかんを火にかける。
そして、お茶ができるころ、マルクが帰ってきた。

「お、何作ってるの？」

「お茶だよ。プリニーティーといって、高級茶の一種」

「ふーん、飲んだこと無いなあ」

「そりゃそうだよ、＜地下都市＞でしか手に入らないもん」

「ああ、地底人が住んでる所か」

「・・・マルクに一さん、それは彼らに対する悪口だからね」

「ええ！？ だって町のみんなが言ってるよ？」

「本来、地下都市に住んでいる裕福層のことを揶揄した言葉なんだ。

愛着をこめて言っているとしても、彼らにとっては嫌な言葉さ」

「そうか・・・今後気をつけるよ」

「さあさあ、早くお茶飲んで、ダイじいの所に行くよ」

「了解！」

ギャザル・バーム

二人は疾走する。

今日の正午までにダイじいの所に行かなければ、

弟子になるのが微妙な状態になってしまう。

先頭のモリトが端末を利用して、滝まで最適なコース、スピードで走る。

それをマルクが追いかけてながら森を進む。

カタイハの木々の隙間から見える太陽は、徐々に高度を上げ、

二人に時が迫っていることを、否が応にも感じさせた。

モリトが端末に目をやる。

時刻は11時・・・

このまま走っていれば、あと三十分程度で到着するはず。

何の障害も無ければ・・・ね。

その頃、ダイじいに一人の男が近づき、言葉を交わす。

「よう、ダイマールさんよ。少し聞いてえ事があるのだが」

「む、お主は・・・何用じゃ？」

「俺の事を知ってるようなら話が早い。どんな形でも、

あんたに茸を持ってくりゃあ、弟子になれるんだな？」

「ふん、どうせ人から奪う気じゃろ？ まあ、誰だとしても、

茸を持ってきた者を弟子にすることには変わらない」

「へっへっへ、話がわかるねえ」

その男は、豪快に指を打ち鳴らすと、滝の突端への道が人でふさがった。

「あんたの弟子には俺がなる。悪く思わんでくれよ」

「茸を持ってきてから言うべきじゃな」

「はっ！ 俺に敵う奴が、あんたを措いて、この場所にいるとは思えんね」

そう言うと、人で作った壁の向こう側に行き、

そこであぐらをかいて座り込んだ。

テレビのリポーターが、その状況を解説する。

「何と！ ギャザルです！ ギャザルがダイマール氏へと続く道を

ふさいでしまったあー！ 今日のターゲットは弟子の権利なのかー！？」

端末をいじりながら走っていたモリトが、驚きの声を上げた。

「どうした？」

「・・・このまま走っても、ダイじいにキノコは渡せない。

まさか、あの<ギャザル・バーム>が、ここにいたとはね・・・」

「誰それ？」

「知らないの？ 大盗賊ギャザルを！？ ハンターライセンスA級で、神出鬼没。

望んだものは必ず手に入れるって有名だよ」

「へえー、凄いねえ。・・・ん？ ということはもしかして」

「今回のターゲットは、ダイじいの弟子の権利だ。

こーなったら誰にも手が出せないよ。正午に持っていくのは諦めよう」

「そんな！」

「他の誰もキノコを見つけれなければ、やり直しになると思うけど」

「どうかなー・・・弟子に値する人がいない、とか言って、取りやめにならない？」

「・・・考えられなくもない」

マルクは少し考え、名案を思いついた。

「ギャザルがいるのは、滝へと続く道なんだよね？」

だとしたらまだ希望がある！」

「・・・滝側からよじ登るなんて無理だぜ？」

「まあ、僕に任せてよ。それにはまず、ダイじいが見える位置まで行かないとね。

ほら、走って走って」

弟子の決定

マルクとモリトは滝の上が見える位置まで到着した。

「どうするつもり？」

「まず、ダイじいに合図を送る。それから湖を壁伝いに進む。

後は・・・見てのお楽しみ」

「どーやって合図するつもりだよ？」

「僕とダイじいの中にだけ通じる合図があるんだよ」

「・・・ふーん」

「ではやるか」

マルクはダイじいにイメージを送る。

イメージは、足と煙。

ダイじいなら何のことかわかるはず。

ダイじいが振り向き、マルクと目が合う。

すると、誰にも気づかれぬようにウインクした。

「よしっ！ 通じたみたいだね。じゃ、モリトはここで待ってて。

あ、マイトはどうする？」

「キュッ！」

マイトは頭の髪を引っ張った。

「では、一緒に行こう」

マルクは水音を立てないように湖に入り、崖に沿って泳いでいく。

すると、滝の手前で潜ったかと思うと、そのまま浮いてこない。

モリトが不思議がって、空識を使い、滝の周辺を探索すると、

滝の裏側に洞窟があることが感じ取れた。

「ははあ、これはダイじいが登場するときに使った洞窟か。

種がわかったら、どーって事ないね。・・・意識をちゃんと全体に

向けてないと、こんなトリックにも気づかないとはね」

まだまだ修行あるのみ、か。

するとその時、滝の上から白煙が吹き上がった。

煙が晴れると、マルクがダイじいに向き合い、茸を差し出していた。

「マルクに一さん、かけえー！！」

「さて、名は何と申すかね」

「マルクです」

するとダイじいは、大声を張り上げ、宣言した。

「わしの弟子は、マルクに決定した！」

辺りにいたハンターや、観戦者（と言うより野次馬だ）に、

拍手が沸き起こった。

喝采

近くにいたギャザルが、あっけにとられていたかと思うと、

マルクの前まで走ってきた。

「てめえ、マルクとかいったな！ 弟子の権利を賭けて、俺と勝負しろ！」

「聞かなかった？ 弟子は僕に決定したんです。この時点で

弟子の権利、なんてものは無くなったんですよ」

「そうじゃよ、ギャザル君。君が彼に勝った所で、弟子になるのはマルク君じゃ」

「ほほう、ではマルク君を殺してしまえば、心変わりもするというもの」

ギャザルの真意を測りかねていると、

その時すでに、ダイじいさんがギャザルの首をつかんで地面に打ち倒していた。

・・・何があったんだ！？

一瞬の出来事に驚きつつも、悪態ついて暴れているギャザルの足を押さえつける。

「はっ、流星はダイマールじいさんだ！ 最新の＜マインドスーツ＞でも

反応が遅れるとはね・・・その秘密を手に入れ損ねたのは残念だねえ・・・」

「弟子になったばかりのマルクを、わしの目の前で殺そうなど・・・

わしが全力で阻止するわい」

その時、ギャザルは、人ごみの中からこちらに駆けてくる、

数人の男が目に入った。

「あー、はいはい。俺の負け。今回は引き上げてやるぜ」

ダイじいの手を離すと、ギャザルは勢いよく立ち上がり、

口笛で仲間に合図を出した。

その合図を聞いた仲間たちは、急いで森の中に走り去っていく。

その後を、何者かが追いかけていった。

「・・・<ハンターポリス>め、俺は捕まえられないんで、

子分を捕獲しようとしてやがる。俺が目に見せてやるさ」

ギャザルはそう言うと、滝の上から湖に飛び込んだ。

その後が大変だった。

リポーターに質問攻めに合い、他のハンターからは祝福されたり、

嫌味を言われたりと、とんでもない慌しさだ。

マルクが開放されたのは、太陽が地平線に差し掛かっている頃だった。

「マルクに一さん、おめでとう。ほんとにダイじいの弟子になっちゃったね」

「モリトのお陰だよ。君がいなければ、茸にたどり着けなかったかもしれない」

「ごケンソンだね」

「いや、本当に感謝してるんだ。モリト、ありがとう！」

「・・・どーいたしまして！」

モリトが会心の笑顔を見せた。

「ふふ、何やら楽しそうじゃのう。わしも混ぜてくれんかね？」

近づいてきたダイじいと言った。

「あ、紹介します。僕の親友のモリトです」

「じーさん、おひさ」

「お、おいモリト！ おふざけが過ぎるぞ・・・」

ダイじいが目を輝かせた。

「お主か！ 大きくなったのう。父は元気か？」

「相変わらず研究一筋だよ」

マルクの目が点になる。

「えーっと・・・一体どーいう関係で？」

「モリトはのう、わしの一番弟子、シンドの息子じゃ」

「ええー！！」

モリトの正体

「モリト、何も話さなかったのかね？」

「聞かれなかったし、教えてもしょーがないじゃん。

それに、マルクに一さんに俺の正体ばらしたくなかったし」

「・・・しかし、父さんはハンターじゃ、ないんだよね？」

「何も、ハンターを目指していなくても、進化人なら弟子にしておるからのう。

時にマルク、今の君ではモリトに手も足も出んじやろ」

「ええー！？ 何それ・・・モリト、君って奴は、弱い振りをしてたんだ・・・」

「俺が強かったのを知ってたら、ふつーのマルクに一さんを

見られないじゃんか」

「・・・一理あるけど」

「シンドはのう、＜心速＞という得意分野を持っておった。

そして何故か、モリトは心速と＜強化＞、二つの得意分野を持って

生まれてきたのじゃ」

「得意分野が二つもあるなんて凄い！」

「わしが不思議がっている所はそこではない。進化人の子供が

必ず進化人になれる訳ではない。モリトの場合は、非常にまれな、

特殊なケースじゃよ」

「この力は遺伝しないんですね・・・ところで、心速とか強化って

どんな力なんですか？」

「俺が説明してやるよ。心速とは、”心の思うままに体を動かす”ことさ。

小さい友達に、心と体を繋ぐパイプを太くしてもらえば、体の反応速度が上がる。

ピストルの弾丸だって避けられるぜ。ただし、それには強化が必要だ。

小さい友達に、体細胞を強化してもらうことによって、普通ではありえない

動きができるようになる。心速と合わさることで、初めて弾丸が避けられる。

まあ一、マルクに一さんには関係ないか。硬化しちゃえば、弾丸なんて

跳ね返せるしね」

「いや、弾丸はちょっと・・・」

「そういえばモリト、一人で来たのかね？」

「あー、そろそろ母さん、来るかもね・・・」

「こらあーっ！ モリト！ 何も相談なしに、一人で出歩くんじゃないのおー！」

噂をすれば、モリトの母親が走って向かってきた。

到着早々、母親は地面にへたれこんだ。

「あっ、母ちゃん、その装備、いつ買ったの？ スゲー似合ってるよ」

「もーっ！ お世辞はいらさないわ！ もう帰るわよ」

「じーちゃんに挨拶くらいしなよ」

「じーちゃん・・・あっ！ ダイマールさん、お久しぶりです！」

この場にダイじいがいることを、今やっと気づいた。

「リサさん、元気そうでなによりじゃ」

「げっ元気・・・こんな姿を見せて、お恥ずかしいかぎりです・・・」

「こら、モリト、ちゃんと言ってから出かけないと駄目じゃぞ」

「えー！ 言ったらダメだって言うんだもん」

「そりゃそうでしょ。モリトに何かあったら、母さん泣いちゃうわよ」

「・・・そう言われると何もできないじゃん」

「まあリサさん、モリトはライセンスも持っとるんじゃ。

この程度の危険度区域なら、何の問題もなかろう」

「私が過保護だと仰るんですか？」

「いや、逆じゃよ。どちらかというと、リサさん、あなたの方が心配じゃ」

「うっ、それを言われると・・・ああもう、わかりましたよ。モリト、

これからは自由に出かけてもいいわ。ただし、行き先を教えるのと、

電話には必ず出ること。わかったわね？」

「そーいうことなら、その通りにするよ、母ちゃん」

「ほっほっほ、一件落着じゃわい」

「・・・モリト、ライセンス持ってたんだ」

「B級だけだな。マルクに一さんも、これから取るんだよ。でしょ？」

「その通りじゃ。これからはバシバシ行くからのう。覚悟しておれ」

「ええー・・・でも文句も言ってもらえないか、ダイじい、よろしくお願いします！」

マルクは深々と頭を下げた。

「うむ、素直でよろしい！ これから半年かけて、わしの全ての知識を教えよう。

そしてB級ライセンスを獲得、その後はわしと一緒に仕事をしながら、

わしがいいと言うまで一緒にいてもらおう」

「マルクに一さん、がんばれよ！」

「うん、モリトもね」

太陽は森へと沈み、暗闇と静寂が訪れた。

第13章 新しい体

目覚め

ヤンバの意識は深く沈みこんでいた。

どうしてここにいるのか、いつまでここにいるのか、

何もわからぬまま、思い出の中に浸っていた。

「おい、ヤンバ、いつまで寝てる気だよ」

気付くと、見慣れた森の中を夕日が照らしていた。

隣にはマルクが立っている。

・・・ここは、パッドの森。

「はあ？ 今俺、起きてるけど？」

「ここがどこだかわかってるよな？ 今、いるはずも無い場所だ」

「今・・・ここにいるだろーが。ん・・・？ 何か違うような・・・」

ヤンバは思い出そうとしたが、頭が痛くなって思い出すのをやめた。

「嫌でも思い出せ！ いつまでもここにいるわけにはいかないんだから」

「あーもう、聞きたくもない！ これが夢なら、ここから出て行ってくれよ！」

ヤンバが叫ぶと、パッドの森は暗闇に飲み込まれていった。

「ヤンバ、ここから出ることが出来れば、君は”理想の自分”を

手に入れることができるんだ。こんな所で、昔の自分に浸っていても、

何も変わらないぞ。いや・・・むしろ悪くなるだろうな。一線を越えてしまったら、

二度と目覚めることはできないんだからな・・・」

マルクは、そう言い残し、暗闇へと消えた。

辺りは真っ暗になり、ヤンバー人しかいなくなった。

マルクの言った事が頭に響く。

いつまで寝てる気だ・・・

嫌でも思い出せ・・・

理想の自分・・・

理想の自分？

俺の理想は、マルクみたいな力を持った自分。

目を覚ませば、そんな理想の力が手に入る？

「確かに、今までの自分は嫌だ、理想の自分になれるなら、

目でも何でも開けてやろーじゃん！」

思い出せ・・・なぜ俺はこんな所にいる？

頭が少しずつ痛くなる。

だがヤンバは必死にこれまでのことを思い出した。

学校を卒業・・・ZAN養成学校に入って・・・

あ、進級試験でハトバが爆弾を・・・

思い出が確信に近づくと、頭が割れるように痛む。

「ううっ！ あと少しだ・・・デュラホーンに会って、俺は逃げるために跳躍して・・・」

刺すような眼。

バルングラだ！

ヤンバの体に悪寒が走る。

「そうだ・・・あいつは俺のナイフをものともしないで・・・」

体にかぶり付いたんだ！！」

次の瞬間、鈍い音と共にヤンバは目を覚ました。

トップシークレット

「うぐおああ・・・ヤンバ、いきなり飛び起きるなよ・・・」

「ヤンバの顔を覗き込んでいたハトバが悪いよ」

「・・・ハトバとテンクー？」

「ヤンバ・・・やっと起きたな、この野郎！ 二度と目を覚まさないかと思ったぜー！」

「・・・俺は何日寝てたんだ？」

「半月程だね」

テンクーが、さらっと答える。

「そんなに！？ あーっ、勿体ねえー！」

「ま、死ぬより良かっただろ。危ないトコだったからな」

「・・・俺ってどんな状態だったの？」

「俺が気を取り戻した後、お前を追ってたんだ・・・」

ハトバの話では、俺は即死だったらしい。

バルングラの最初の一口で、心臓までえぐり取られていたのだ。

「俺が見たときは、お前の頭を噛み潰している途中だった。」

サンダーガンで仕留めなければ死んでいた・・・いや、生き返る事はなかったな」

その後、ハンターが到着し、体の残った部分を全て移動用の治療槽に入れ、

大事な頭部には、血液を循環させる機器が取り付けられた。

「そして緊急手術・・・だと思うよな？」

「そりゃそうだろ。放っておかれても困るし」

「所がなー、俺たちが手術室の前で待ってようと思って、受付に聞いてみたらさ、

教えられないって言うんだ」

「・・・何で？」

「何か、色々な事を言われて追い返されたんだ」

「そうそう、そこでハトバの出番さ」

「ハッカーの俺に不可能はないぜ！・・・って言うのは冗談だけど、

要するに病院のシステムに進入して調べてみたんだ」

「驚いた事に、どこの手術室にもマルクの名前は無かったんだよね」

「・・・どーいう事だ？」

「面白い事になってきただろ？ 俺はその後、病院のシステムを

片っ端から調べた。そして、削除された履歴を復活させ、

やっとヤンバの名前を探り当てたんだ！」

「さあヤンバ、君の名前はどこにあったと思う？」

ハトバとテンクー、二人して興奮しながらヤンバに迫る。

「俺にわかるわけないだろ・・・早く答えを聞かせろよ」

「・・・ちっ、盛り上がらねーな」

「やれやれ、二人で苦労して調べてやったのに」

「・・・感じ悪っ！」

そもそもテンクー、君はハトバがハッキングしてるのを見てただけじゃ・・・

ハトバは自分の端末を見せた。

「ヤンバ・フローバスを一定期間、トップシークレットとする・・・何だよこれ！」

「受付の端末に送られ、その後削除されたメッセージさ。

送り先にも侵入したかったんだけどさ、セキュリティが強力すぎて、

短期間で攻略するのは無理だ」

「トップシークレット・・・一体俺に何があったんだよ・・・」

ヤンバは手をじっと見る。

「手術が機密扱いだとしたら、何か特別な手術だったって事か？」

「僕たちも、それが知りたくって毎日通ってるんだ」

「どういう事だ？」

「どーもこーも、仕入れた情報によると、近日、会長が学校に来るらしい。

おそらく君に会いに来るんだろ」

「俺らもそれに立ち会う為に通ってるわけ」

「なるほど・・・事の真相を知りたいって訳ね」

その時、唐突に扉を開ける音が響いた。

会長の来訪 明かされた秘密

「会長、ノックも無しですか」

そこには、シールドスーツを着た会長が立っていた。

「そんな手間はかけんのだ。ふん、やっと目が覚めたか。

目が覚めなかったら大損してるところだ」

「・・・俺の体に何をした？」

「口の利き方に気をつけたまえ」

会長はヤンバから目をそらすと、隣にいるハトバとテンクーを見る。

「不正にシステムに進入したのは君かね？ どうやら君たちも

真相を知りたいようだね・・・まあ、よかよう。未来のZANメンバーに

なるんだ、このことは知っておくべきだからな」

ハトバとヤンバは戸惑った。

「あの一、会長・・・テンクーはともかく、俺らはZANメンバーに

なれるかどうかは・・・」

「他言は無用だ。君たちは”A2C”という言葉を知っているかね？」

会長は二人の意見を切り捨てた。

「A2Cとは、”変化順応体質”の略語だ。この学校に入る際、血液検査により

簡易的にA2Cのチェックが行われる。ヤンバ君はその際、かなり高い数値を示した。

そこで足を負傷した際、詳しく検査が行われ、”クラスA”だと確認された。

君ほどの数値は、一億人に一人いるかいないか、と言うほどの貴重なものだ。

そこで私は、君の体を我々が研究している<強化体>へと入れ替える計画を立てた。

ちょうどいいタイミングで君が死に、計画は無事に成功した」

三人は何も言えなかった。

ヤンバは手を握ったり開いたりしている。

「君が目を覚ましたので、すべて計画通りいった。

ヤンバ君には強化体を使いこなすためのリハビリをしよう」

「何か・・・そんなに強くなった気がしないけど」

「君は面白い事を言う。強さとは、相手が居て、初めてわかるものだ」

「あ、そうか・・・」

「君はもう、ZANから離れられないぞ。強化体の移植にかかった

二十億円分、働いてもらうからね」

「俺の望み通りさ、ZANメンバーに入れるならね」

「それはなにより」

「・・・ねぇ、会長。俺のA2Cはどーなのさ？ 働くよー」

ハトバが興味本位で聞いてみる。

「ハトバ君、君のA2Cは最下位クラスだ。体の入れ替えはおろか、

細胞一つの入替もままならん」

「あらっ」

「君はその頭脳を生かしたまえ。B-14の研究室エリアに招待しよう。

君に打って付けの研究があるんだ」

そう言うと、会長はハトバにカードを手渡した。

「・・・その研究がうまくいけば、俺もZANメンバーになれるのか？

「保証しよう」

「よしっ！」

「二人とも、何かしら貰ってるのに、僕には無しかい？」

テンクーが、会長相手にさらりと言った。

「君は既に、十分貰っているはずだがね」

「ふふ、冗談ですよ」

「私はこれで失礼する。今日中に<サルブラーディン>に舞い戻らねばならん。

・・・次はZANメンバーとして会うことにしよう」

会長は踵を返し、部屋から出て行った。

寝てる間の世界変化

「サルブラーディンって、あの世界五大秘境の？」

「凄い所に行ってるなあ・・・」

「いや、そんな事よりさ、ヤンバ、シャドーでもしてみろよ」

「何で？ あ、強化体の实力を知りたいと。よかろう」

ヤンバは飛び起き、シャドーボクシングの真似事をした。

「・・・全っ然、変わった感じしないけど」

「リハビリしないとダメなのか？」

「もしかすると、リミッターでも掛かってる？ おいテンクー、

さっきから黙りこくっているけど・・・」

腕組みをして何かを考えていたテンクーは、軽くため息をついた。

「いや、会長が入ってきた時、びっくりしたよね？」

「ああ、ノックしなかったもんな」

「その時、僕もびっくりしたんだ。この意味わかるかな」

「・・・あ！ 空覚で感じられなかったのか？」

「当たり前。絶対、僕に感じ取られないまま近づくななんて不可能だと思ってた・・・

しかし、会長はそれをやってのけた。まるで空気のように・・・」

「むう、もしかして会長も、なんらかの能力があるってこと？」

「何者にも”知覚”されない力・・・これほど恐ろしい力はないね」

「マルクにしろテンクーにしろ会長にしろ・・・ついでにヤンバも”アヤシゲなチカラ”を

とうとう手に入れたって事だな」

「・・・ハトバ、その言い方はねーだろ」

「ま、会長に認められるハトバの頭脳も、かなり怪しいことに変わらないよ。

僕たちから見ればね」

「ぬっ、テンクー、言うねえ」

ハトバの端末からメロディが流れてくる。

「あっ、このメロディはマーレイだな」

ハトバはすぐに電話に出た。

「もしもし、ハトバに一さん、おに一ちゃんの容態はどう？」

「ついさっき目を覚ましたところさ。変わるよ」

「・・・マーレイ、心配かけてゴメンな」

「・・・元気になったんなら、ま、いいでしょ。私、心配しすぎて疲れちゃった。

怒る気もわかないわ」

「すまん、俺が弱いばかりに・・・でもマーレイ、お兄ちゃん強くなったんだ！

今後は怪我なんてしねーぞ！そしてZANメンバーになったも同然だ」

「んー・・・よくわかんないけど、もう大丈夫ってことね」

「これからは心配無用さ！」

「はいはい。あ、おに一ちゃん、家の家計はもう心配ないからね。

サガスに一ちゃんが、トクベツタイグーとかで<リープ>に入社してね。

おとうさんのおきゅうりょうをこえちゃった」

「はぁー！？まだ学生なのに！？・・・ま、まあ、家計は心配なくなりそうだな・・・」

「おに一ちゃん、もしかしてマルクに一さんの事も何も知らないでしょ。

弟子になったから、ダイじいの。あっ、ハンターズTV始まっちゃう！切るねー」

マーレイの電話は唐突に切られた。

「ううー・・・俺が寝てる間に世界が変わっている・・・」

「俺、リアルタイムでマルクが弟子になるのを見てたぜ！ すごい難題だったし、

最後にギャザル様まで登場してさー」

「わー！聞きたくないね！後でネットで見るからいいよ」

「マルクの格好いい登場シーンを、事細かに語ってやろうとおもったのに・・・」

「余計なお世話だ」

その時、ヤンバの端末が着信を告げた。

マルクの報告

ヤンバが端末を見ると、見たことも無い番号だった。

「誰だ・・・？ さて、出るべきか否か・・・」

「出てくれ！ それは多分、君の親友からだ！」

テンクーがはっきりと言った。

「わかったわかった・・・もしもーし、ヤンバだが、そちらは？」

「やったあ！！ 八回目にしてやっと繋がった・・・ヤンバ、僕だよ。」

マルクだよ。・・・おーい」

ヤンバはテンクーを見ながら絶句していた。

何でわかったんだ・・・？

「あ、ゴメンゴメン、こっちも色々あってさ。で、何の用だ？」

「僕もやっと端末を手に入れてね。ヤンバの端末番号がうろ覚えだったから、

かけ続けてたんだ」

「なるほど。あ、弟子になったんだってな。おめでとう」

「えっ！？ ヤンバは絶対リアルタイムで見てると思ったんだけど・・・」

「ああー、ちょっと色々あってさ・・・」

ハトバが、ひょいと端末を奪い取る。

「よお、マルク。ヤンバはねえー、その頃死んで生き返ってた最中だったんだ」

「ハトバ、てめえっ！」

ヤンバは一瞬でハトバを叩き伏せ、端末を奪い返した。

「まあー、お陰で最強の俺になれたからな。死なんて安いもんさ」

「・・・何やら凄い台詞だねえ」

「そうだ、お前と同じような力を持つ友達がいるんだ。紹介しよう、テンクー」

端末をテンクーに投げてよこす。

「えーっと、初めまして、僕はテンクーだ。以後よろしく」

「僕はマルクだ。テンクーはどんな力を持ってるの？」

「僕はその力のことを”空覚”と呼んでるけど、要するに空間を認識する力さ」

「驚いた・・・モリトの言ってた”空識”と同じ力か・・・」

「ふーん、空識って呼んでるんだ。僕の呼び方の方が格好いいや」

「確かにね。あ、今そこにはヤンバとハトバとテンクーだけ？」

「そうだよ・・・あ、会長がいたら、僕、感じ取れないしなあ」

「会長ってまさか・・・ザン・イバーラ」

「今までこの部屋にいたんだ。まあ、もういないとは思うけど。」

「会長は”隠者”と呼ぶ力があるらしい。それで空覚でも感じ取れないんだね」

「隠者・・・」

「そう。姿を隠す力らしい。今から話す話を、みんなで聞けるようにできる？」

「ヤンバなら知ってるかな」

テンクーはヤンバに端末を渡す。

「三人みんな聞こえるようにして欲しいって」

「じゃあ、そこのテーブルを持ってきてくれ。内蔵のスピーカーよりいい音で聞けるぜ」

「その端末、振動スピーカーの機能が入ってるのか」

「そういう事」

端末をテーブルの上に載せると、テーブルから大きな声が響き渡る。

「テンクー、周りに人はいないな？」

「そもそも、この病室から音は漏れ出さないよ。まあ、人はいないけどさ。

・・・多分ね」

「会長来てから弱腰だなー」

「では、今から話すことは、他の人には内緒だからねー・・・」

こうしてマルクの話は始まった。

その内容に三人は衝撃を受ける事になる。

テンクー 迫真のアピール

マルクの話は三人、特にテンクーには強い衝撃となった。

二人が持っている力の正体、それは目に見えない小さな、

そして偉大な生命体のお陰で生まれていること。

その彼らと友達になる事で力はより強くなること。

そして、彼らを動かすものはイメージであり、

彼らの居心地を良くすることで生息数が上がり、

より力が強化されること。

「でもよー、力を持たない俺たちには関係ないような・・・」

「いや、今話したように、彼らの居心地をよくすれば、力が無くても

健康や知能に効果があるそうだよ」

「ほう・・・」

「マルク先生！次は力の種類を教えてください！」

「うおっ、テンクーが、先生とか言い出したぞ・・・」

「うーん、僕が知っている限り、体を硬くする”硬化”、身体能力を上昇させる”強化”

思うままに動作できる”心速”、空間を認識する”空覚”、後は・・・カルサーの

百発百中の力とか、会長の”隠者”くらいかな・・・」

「いいなあ・・・僕ももっと色々知りたい・・・」

「あ、テンクー、無い物ねだりだぜ？」

「・・・わかってる。わかってるけどね・・・本当だったら、今すぐにもマルクに会っ
て

話がしたいよ」

「だったら、行けばいいじゃん」

「は？」

テンクーは、何を言われているのかわからずにキョトンとした。

「だーから、テンクーはもうAクラスだろ？ 少くらしい学校を出たって

何の影響があるんだよ。あ、そーだ！ マルク、ダイじいに言って、

弟子を増やしてもらえよ」

「えええーっ！ 無理でしょ・・・いや、まてよ？ ダイじいは確か・・・」

「おや、まだ喋っておったのか。もう出発じゃぞ」

電話の向こうにダイじいがある・・・

一瞬の出来事に三人は凍り付く。

「ダイじい、弟子をもう一人増やすことはできませんか？」

「ふむ？ 事と次第によるのう」

「実は紹介したい人がいるんですけど・・・」

ダイじいはマルクの端末を奪い取った。

「そっちに弟子希望者がいるらしいのう。

だれじゃ？ わしの弟子を誑かしておるのは？」

「僕はテンクーといいます。無理は承知していますし、

マルクさんを誑かす事はしていません」

「あー、ダイマールさん、申し訳ない。親友を誑かしたのは俺です。

テンクーは何も悪くないんで、その・・・話だけでも聞いてもらえないですか？」

「お主が噂に聞くヤンバじゃな？ 誑かしたのがお主なら話は別じゃ。

さてテンクーよ、話してみい」

テンクーは緊張しながら話し始めた。

「えー、僕、いや、私には生まれつき空間を認識する力があります。

私はそれを”空覚”と呼んでます。先ほどマルクさんから聞いた話に

衝撃を受けてまして・・・出来れば私も色々な事を知りたい！

そして学びたい！それが出来るチャンスは今しか無いんです。

無いものはねだりません。今、そこにあるチャンスならねだってみても

良いはずです。弟子が無理ならかまいません。せめて一度あって

話がしたい。ダイマールさん、僕にチャンスを下さい！」

ヤンバもハトバもマルクも、固唾をのんで結果を待つ。

「一年じゃ」

「はい！？」

「学校を一年休学し、わしの元で教えを受けて貰おう。

それが無理なら、この話は無かったことにする」

「もちろん行かせてもらいます！」

「決まりじゃな。では、＜シュットバーン＞で待っておるぞ」

「はいっ！すぐに参ります！」

テンクーは慌てて部屋から出て行った。

四人の未来

「俺たち、スゲーもん見ちゃったな」

「ああ、テンクーの言葉も凄いけど、即決したダイじいも凄い……」

「じゃあ、僕たちもグリントゾーンから出発だから、切るねー」

「おう、がんばれよ」

「ヤンバもね」

「俺はもうZANメンバー入り確定さ」

「ああ、それは何より。じゃあねー」

そして電話は切れた。

その途端に部屋がしんと静まりかえった。

「会長の登場といい、マーレイの報告といい、マルクの電話といい、

さっきのテンクーとダイじいの会話といい……今日は大変な一日だった……」

「ヤンバはいいよなー。俺はこれからが大変な日々だよ」

「ふふふ。さあ、希望ある未来に向かって進もうではないか！」

「俺にはまだキボーなんて見えねーけどな」

その頃、マルクとダイじいは電車で揺られていた。

窓にはマイトが張り付き、流れるライトの光を物珍しそうに見ている。

「マイトにとっては大冒険だな」

「ふふ、マイトはチャレンジャーじゃのう」

「これから向かうシュットバーンには何しに？」

「例のキノコを依頼者に渡すのじゃ。きっと大喜びするじゃろうな。

そしてテンクーと合流してから、地下都市の<キリスタ>へと向かう。

そこで君たちの防具を買い、とりあえずは弟子のための修行の地、

<トゥーリモ>に行くことにしよう。シンドもエンドゥもカルサーも、ここで修行したんじゃよ」

「ふーん・・・」

「トゥーリモはのう、ライセンス無しで入れる、最も危険度が高い地区なのじゃ。

覚悟しておくがよい」

「さっき防具がどうか言ってましたよね。この為ですか・・・」

「一応、君らの命を預かる身じゃ。防具は最強にして超高額の、

国が運営しておるスペクティで購入する。

一着一億は下らないシールドスーツじゃ。

このくらいの値段をかけておけば、死ぬことはまずないじゃろ」

「いっ、いちお、むぐっ！」

ダイじいは慌ててマルクの口を塞いだ。

「・・・静かに話せんのか？」

「だって・・・途方も無い金額だったから・・・」

「わしにとっては些細な額じゃ」

「どれだけ貯金してるんです？」

「貯金しているつもりはない。ただ、まだ使っていないだけじゃよ」

「まあ・・・些細なら問題ないかな・・・ありがたく頂きます」

「どうせ、わしの元から旅立つ時には、ボロボロで使い物にならなくなっておるじゃろ。

その時は好きな防具を使うと良い」

ダイじいは不敵な笑みを浮かべた。

・・・一体、何が待ってるのやら。

マルクの不安をよそに、電車は黙々とシュットバーンに向けて走り続けている。

マルク、ヤンバ、ハトバ、テンクー・・・それぞれの未来に線路が敷かれているわけではない。

それぞれが自分の進むべき道へレールを敷いていくしかないのだ。

その道は平らでは無いし、凸凹だったり、ぬかるんでいたりするだろう。

しかし彼らは進み続ける。望み通りの未来に向かって・・・

第一部 完

第1部 ～完～

第一部のあとがきだったり

ここまで、長々とおつきあい頂き、誠にありがとうございます。

三部構成（予定）の第一部が、やっとこさ終了しました。

私は以前から小説を書いてきましたが、一度も完結まで至っておりません。

それは何故かと申しますと、頭の中で生まれた素晴らしい物語が、

頭の中で完結してしまうから。

そう、アウトプットする前に物語が終わってしまうため、書き写す、という

行程だけが残ります。

なおかつ、困ったことに、脳内では次なる物語が始動し、

「こっちも書き写さねば」と、繰り返しているうちに、前の物語の展開が

わからなくなってしまう有様でした。

今回は、パブーという素晴らしいシステムを使うという事で、

なんとか完結まで書き続けようと考えています。

その為、結末のことは考えていません。

後はキャラクター達が勝手に動き、何とかしてくれる事でしょう。（笑）

第二部は、第一部から五年後のお話。

第一部で少しだけ登場したカルサーや、名前だけだったエンドゥが活躍します。

物語は、カルサー、エンドゥ、マルク&ダイじい、ヤンバ&ZANの面々の、

四つの視点で進んでいきます。

原作（下書き）は第二章まで進んでいますが、デジタル化するのに手間取っており、

時間も少ないので、中々思うようには進みませんが、

長一．．．．い目で見えて下さい。

では、第二部をお楽しみに。

第2部 プロローグ

森の中の二人

森の中に二人の男が立っている。

一人はたくましく、がっしりとした体型だが、

にこやかな顔つきの為か、あまり威圧感はない。

防具がシールドスーツの為、より筋肉が強調されている。

背中には、ごつい剣がぶら下がっており、

一目で接近戦闘を得意とする事がわかる。

もう一人は標準体型で、精悍な顔つきをしている。

防具はパワーアーマーにブーストブーツと、

ハンターとしてよく目にするスタイル。

背中には大きめのリュックを背負い、

手に持ったバーニングガンをブラブラと揺らしている。

「久しぶりだな。別れてから何年になるんだ？」

たくましい方の男が聞いた。

「五年以上だな。エンドウ、君の噂はあちこちで耳にしていたよ」

「あー、そうかい？ 嬉しいじゃねえか。カルサー、

君の噂はあまり聞かなかったな」

「そりゃそうだろう。俺はあちこちで、ちまちま稼いでいただけだしな」

「だぁー、金稼いでただけかよ。金の亡者か、お前は」

「・・・お互い、スタイルが違うって事さ。お前は別れてから、あっという間に

A級を取りやがったからな。・・・もう”硬化”は、実用レベルなんだろう？」

「おー、鋭いねえ。俺は接近戦に特化した力を重点的に磨いたからな。

お得意の”強化”、必須の”硬化”と”心速”、重量負けしない<不動>、

後は剣を強力な武器にする<尖鋭>だったかな」

「さすがだな。俺の場合は得意の<必中>、遠くを認識するための”空識”、

もちろん、”硬化”、”強化”、”心速”、もだし、自分で編み出した<突破>も強化しなきゃな」

「おー、たくさんあるなぁ。しかし、”突破”って何？」

「”尖鋭”と似てるけど、バーニングガンの弾丸に、偉大な彼らを纏わせて

爆発力を強化するんだ」

「彼らをそんな事に使っていいのかよ」

「彼らには死が存在しないって話だろ？ 要するに、ある程度の塊になって、

四方八方に飛び散ってもらうだけだしな」

「まー、俺には関係なさそうだ。・・・で、話ってのはな、ダイじいの最終試練に

関係する事だよ」

「まさか・・・シールドワールドに入るのか。早いな・・・」

「まあな。お前はいつ頃来る気だ？」

「俺にはまだ先の話だ。ようやく装備が整ったんだ。近々行われる、

A級ライセンス試験に、万全な体制で臨める」

「そうか・・・がんばれよ。さて、俺は行くぜ。シェルドワールまでは、

おそらく半年はかかるしな」

「はあ？ まさかお前・・・このまま地上を走って行こうとか思ってる訳？

やめとけ、やめとけ！ 陸はいいが、海はどうするつもりだよ・・・

それにお前、方向音痴だろう」

エンドゥは余裕の表情で答えた。

「はっはっは。方向音痴は卒業した。やっと地図アプリの使い方をマスターしたからな！」

「・・・そういえば、とんでもない機械音痴でもあったな」

「海はイカダでも作るとしよう。全てが修行。楽しまなきゃな」

「その考えには、ついて行けそうに無いわ。」

「おー、言ってくれるねえ。でもよ、こうでもしないかぎり、ダイじいに近づけないぜ」

「それは認めるけどな。・・・よし、俺も試験会場まで地上を使うか」

「そうこなくちゃよ！」

「俺も、できるだけ早く行くからな。待ってろよ」

「お前が来る頃には、俺がシェルドワールの王者になってるさ」

「ほう、そいつは楽しみだな」

「じゃあな！ マルクって奴に抜かれないようにな！」

エンドウは、その言葉を残して、森の奥へと消えた。

「・・・抜かれる訳無いだろ。いや、マルクの得意分野は硬化だよな・・・」

うかうかしてると、本当に抜かれるな」

カルサーも勢いよく走り出し、森の奥へと消えた。

試験会場めざして・・・

第1章 A級ライセンス

サガスとの出会い

一ヶ月後・・・カルサーは試験会場の近くにいた。

「ふう、強化の仕上がりは、まずまずだな」

カルサーは腕を見る。

そこには、絡みついた蔓のような物があり、その上に端末が乗っていた。

「お、試験まで、後十日か。しかし・・・この端末ホルダー〈ぐるぐる君〉は当たりだな。

手に持つ必要も無いし、リュックに入れておいて必要なときにすぐ確認できない、

なんてこともない」

腕を振っても落ちないように、きつく巻き付いてくる。

「これで端末の煩わしさは解消された、と」

カルサーの空識は、大きな動く物体を感じ取った。

「この大きさはサンガンだな？ 武器無しで戦ってみるか・・・」

武器を置き、サンガンの目の前に姿を現す。

サンガンは咆哮し、口を開けて襲いかかってきた。

「・・・とは言っても、こいつの噛む力って、3トン超えてたはずだよな。

ま、噛まれる訳にはいかないね」

強化と硬化で固めた拳で、サンガンの下あごを思いっきりぶん殴る。

そして、少しぐらついた所で、左前足を持ち上げてひっくり返した。

するとサンガンは尻尾でカルサーを攻撃すると見せて、

そのまま体制を立て直す。

一人と一匹がにらみ合う。

ほう、少しは考えて行動してるんだな・・・ん、こいつ・・・ラプトサンガンか。

通りで突進一辺倒じゃないわけだ。

その時、近くで破裂音が聞こえたかと思うと、

サンガンは悲鳴を上げて逃げていった。

カルサーは心の中で舌打ちをした。

戦いに夢中になり、空識を疎かにしていた事に。

「だ、大丈夫ですか！？ お怪我は！？」

茂みから現れたのは少年だった。

「ああ、心配無用だよ。どこも怪我してない」

「はあ・・・よかった。武器も無しに地上をうろつくなんて非常識過ぎますよ」

「武器なら、そこにあるよ」

カルサーが指さす先には、リュックやバーニングガンが無造作に転がっている。

「・・・武器を手放して何を・・・？」

「いや、サンガンと相撲でもとってみようかなと思ってね」

「ずいぶんとチャレンジャーですね」

「ああ。自分がどのくらいできるのか試してみたくってね・・・」

「そうだ、まだ名前を言ってなかったね。俺はカルサーだ」

「僕はサガスといいます」

「サンガンを撃退したのは、そのパチンコかな？」

「ええ、兄が使わなくなったものを、よく送ってくるんです。

これは、サイレントスリングショットと言うらしくて、無音で玉を発射できるんです」

「ほほー、おもしろい武器もあったもんだ・・・」

探索する力

カルサーはサガスを見る。

特徴的なシールドスーツが目につくが、それより驚くのは

サイレントスリングショット以外、武器を持ってなさそうだという事。

「そのシールドスーツ、リープ社のものだね？ 見た感じ、

学生のようにけど・・・」

サガスは苦笑する。

「僕、結構若く、と言うか、幼く見られるんです。

でも、学校は最近卒業しましたよ。で、今はリープの社員です」

「あっ、申し訳ない・・・しかしサガス、ずいぶん軽装だねえ。

強化銃とかナイフすら持ってないのかい？」

「まあ・・・この地区なら、これ一つで十分でしょう。

本当は強化銃が欲しいんですけどね」

「・・・そうだ、旧モデルでいいならやるよ。最近新しいモデルを

買ったんだが、旧モデルを売り忘れてたからな」

リュックに手を突っ込み、抜くとそこには使い古された強化銃が握られていた。

「ありがとうございます！！」

「お礼はいいよ、どーせ使い古しだし」

「いえ、そんな・・・大事に使います」

「まあ、可愛がってくれ。所で、この森には仕事で来たのかい？」

「ええ、そうです。と言っても、地元なんで庭みたいなものですよ。

あ、ほら、捜し物もすぐに見つかります」

サガスは近くのタカイセの木をよじ登り目当ての物を採取した。

「これは・・・グルイム茸！？ 生息地はB級ライセンスが必要な、

グルイム渓谷にしかないはずでは？」

「いや、キカザル地区にもあるんです。僕が発見したんですけど、

このお陰で学生ながらリープに入社したっていうのが、

僕の、唯一の自慢なんです」

「すごい・・・よく分かったなあ・・・何でまた、この木に登ろうと思ったかな・・・」

「ああ、僕って捜し物の場所が、何となくわかるんです。

この辺りはグルイム渓谷に似た環境ですし、似たような木もあるでしょ？

それで、もしかしてって思ったんです」

カルサーは愕然とした。

そんな偶然が重なって発見できるなんて、あり得ない。

もしや、彼は進化人なのでは・・・

しかし、物を探す力なんて、聞いたことが無いがな。

「運なのか実力なのか・・・とにかく君は凄いな」

「はは、多分運がいいだけです。カルサーさん、あなたはここに何しに？」

「俺はA級ライセンスを取りに来たのさ。今回の会場がイワザル地区と

聞いたときには、びっくりしたよ」

「イワザル地区・・・あの、柵が張り巡らされてる所ですか。

って、カルサーさん、凄いですね！ だったらサンガンに武器無しでも

余裕な訳ですよ！」

「ま、俺は接近戦が得意なわけじゃないけどな。

本来は遠距離で攻撃するのが俺のスタイルさ」

サガスの端末が着信を告げた。

「あっ、メール・・・うわ、会社から呼び出しだ。もう帰りますね！」

「ちょい待ち！ 俺の番号を教えといてやるよ」

カルサーは端末を操作し、番号とメールアドレスを送信した。

「何かあったら連絡くれよ」

「ありがとうございます。では！」

そう言うと、サガスは背負っていた機器を背中から下ろし、それに乗って勢いよく出発した。

「・・・何だありゃ。携帯できる乗り物かよ。あんな物が開発されるとは・・・」

普通に歩く時代じゃ無いって事かな・・・」

試験会場

試験の日まで修行し、会場へとやってきたカルサー。

「ほっほっほ。ようこそA級ライセンス試験会場へ。

今回は三人が試験を受けることになっておる」

「他の二人は？」

「まだですねえ。カルサー殿、お会いできて光栄じゃ。

ダイマール氏の弟子に会うのは初めてでのお」

「すると・・・全ての試験に関係している訳ではないのですか？」

「私は、ここ、キカザル地区の管理をしているのでねえ」

「地区管理者でしたか。ではあなたが試験官を？」

「試験官？ いや、わしは地区の出口で生存を確認するだけのこと。

この中で起こったことは、全て自己責任なのじゃ」

「なるほど、生きるも死ぬも腕次第、ですか」

「腕と、後は運じゃな。おや・・・もう一人がいらっしまったようだ」

こちらに向かって歩いてくる男は、見るからに太っていた。

最新の武器、防具は装備しているものの、明らかに試験に通りそうも無い。

「ようこそ、A級ライセンス試験会場へ。あなたは猛獣学者の

ベント・フリッガー様でよろしいかね？」

「そうだ。次の研究対象がA級危険区域に生息しててな。」

「・・・所で、他に人を見ませんでしたか？」

「うーむ、森に入ってから、誰も見ていないが」

管理人は端末を確認する。

「では、ここで締め切らせてもらいましょう。今回の試験は、

あなた方二人で行って貰います。内容は、生きで出口から

出てくる事。何か質問はあるかね？」

「出口の座標は？」

「それは入るときに渡します」

二人は柵で覆われた入り口へと進む。

「こんな柵で中の猛獣は外にでないのですか？」

「この柵はA級地区用でしてね。近づいただけで丸焦げですよ」

「しかし・・・こんな低ければ、簡単に飛び越えられるでしょう？」

「ここには飛び跳ねる猛獣はいないのです。まさか、何の情報も持たずに来たので？」

「まあな、どんな状況でも切り抜けるために、あえて情報をシャットアウトしてるんだ」

「ほほー、さすがですな・・・」

「フン、要するに無知って事だろ。どれだけ自信があっても、情報は必須だ」

ベントが自信たっぷりに言った。

「ほっほっほ。人それぞれで良いではありませんか。

では、スタートですぞ」

扉が開け放たれ、最初にカルサーが、続いてベントが中へと入っていった。

情報こそ全て

入り口から下り坂が続く。

そして徐々に暗くなってゆく。

「ほとんど何も見えないな。確かライトがあったはずだが・・・」

リュックの横に手を伸ばした、その時、カルサーの空識が、

あり得ない行動を捕らえた。

何！？

バーニングガンに向けたときには、そいつは目の前にいた。

カルサーは迷わず引き金を引く。

そいつは弾丸の爆発によって吹き飛ばされ、

ピクリとも動かなくなった。

「ちっ、手加減は無理だったか・・・」

ライトで照らした先には、腹が弾け、

内蔵がはじけ飛んだベントが転がっている。

しかし・・・あの速さは一体何だったんだ？

その時、死んだはずのベントが動いた。

「何！？ 内蔵は消し飛んでるはずだ！ 何故動ける！？」

ベントは上体を起こし、こう言った。

「お見事・・・さすがはダイじいの弟子だ。

そう易々と殺せないか」

「なぜ俺を狙う！ 何が目的だ」

ベントの胸からナイフが飛び出す。

そのナイフはザクザクと体を切っていく・・・

中から別の男が現れた。

「お前は・・・ギャザル！」

「やっと出会えたな。奴の弟子に」

「俺を探してたっていうのか？」

「あー？ 別に弟子なら誰でもいいしな。伝説のハッカー、＜カスラギ＞に

大金をはたいて情報を集めてたらな、A級ライセンス試験の名簿に、

お前が載ってたって訳だ」

「そこまでして弟子を殺したいのか・・・」

ギャザルは頭をボリボリとかいた。

「カルサー、君には申し訳ないが、誰か殺さんと腹の虫が治まらねー。

まー、そーいう事だから、全力で行くからよ。じゃあな」

そう言うと、森の暗闇へと姿を消す。

「あんたの腹の虫に付き合う気は無いさ。

俺も全力で行かせて貰う・・・」

視界から消えたって、俺には筒抜けなんだからな。

ギャザルを空識で追いながら、出口に向かって足を進める。

覚悟

しかし・・・この地形は何だ？ 中心に進めば進むほど、

より深くなっていく・・・

「隕石でも落ちたのか？ それとも・・・

核爆弾でも使われた場所なのかもな」

猛獣との戦いもそうだが、植物との戦いも熾烈を極めたらしいからな・・・

カルサーが木と木の間を通り過ぎると、どこからともなく

蔓が体に巻き付いてきた。

「む・・・」

強化銃を引き抜き、細い蔓を打ち落とす。

「こんな所にハズラーはいないよな。そもそも、この蔓は細い。

こんなのじゃあ、猛獣は捕まえられないぜ・・・」

高をくくっていたカルサーだったが、元いた場所から

急いで逃げ出した。

何故なら、まるで雨のように、大量の蔓が上から降ってきたからだ。

「ちっ、考えが甘かった・・・A級危険地区に、

そんな柔な植物がいるはずないわな」

突然、足下が抜ける。

カルサーは慌てずに、中にいた猛獣を駆除した。

普通の人間では死んでいるだろう高さから落ちたが、

強化した体で、難なく着地した。

「ずいぶん落ちたな・・・さて、どうやって上がるか」

俺の強化では、地上まで跳べない。

やはり壁を蹴って上るしかないか……

そう考えている間にも、穴の入り口が塞がっていく。

しかも、穴の至る所から突起が飛び出してきた！

「こいつは……ヘルプラント！ ええい、ノープランで行くかっ！」

カルサーは強化を使って地上へと上り始めた。

地上ではギャザルがニヤニヤと笑っている。

「解ってないねえ、カルサー君よ。情報こそ全てだ……

闇雲に突っ込んでも、罠にはまるだけさ」

ギャザルは双眼鏡も無しにカルサーの行動を観察している。

「この目も、もーちょっと感度と解像度を上げてえな。

おっ、抜けたか。ははあ、バーニングガンで足場を無理矢理作ったか。

やるねえ」

当の本人は苦々しい顔をしていた。

「くそ、ギャザルめ、停止しているな……これじゃあ、猛獣や植物と

区別が付かん……とりあえず前に進むか」

カルサーは気づかない。

出口への直線コースは、地獄に続いている事に……

企み

・・・一体、どういう事だ？

強化銃を片手に、上から伸びてくる蔓を打ち落としながら進む。

カルサーの空識では、蔓がどこから伸びているのか感じ取れない。

俺の空識だと、距離が足りない・・・

何か、嫌な感じがする。

そして・・・カルサーの空識に何かが引っかかる。

それはとても巨大な・・・

「これは木か！？ とんでもなくデカイぞ・・・」

その時、今までとは比べものにならない量の蔓が降ってきた！

「強化銃連射モード・・・喰らえ！」

銃の打ち出す弾丸は、一つ一つの確に蔓に当たり、

さながら蔓が雨のように降り続ける。

「そうか！ この蔓の正体は、あの巨大な木だ！

だから猛獣は中心に近寄らないんだ・・・」

蔓は次々と伸びてくる。

もはや雨というよりは豪雨だ。

カルサーは弾倉を入れ替えつつ打ち続けるが、

とうとう強化銃が悲鳴を上げる。

「ん、銃が熱くなってきたぞ・・・ちっ、冷却が追いつかないんだ！

あ、そうか。中心から離れればよかったんだ。何やってんだか・・・」

強化銃とバーニングガンを併用しながら、

巨大な木から離れようとするカルサー。

「おっと、そうはいかねえんだな」

その声にぎくりとした。ギャザルだ！

バーニングガンを声のする方へ向けると、

そこには・・・

「何！？」

それは・・・ギャザルによって投げ飛ばされた猛獣だった。

カルサーは覚悟を決めた。

飛んでくる猛獣とは別の方向にバーニングガンを向け、

必殺の一撃を打ち込む。

「何だとお！」

ギャザルは慌てて避けるが、

弾丸は吸い込まれるように激突した。

「ぐあっ！！」

ギャザルは吹っ飛ばされ、森の奥へと消えた。

カルサーは飛ばされてきた猛獣に当たり、

そして・・・一緒に蔓に巻き付かれた。

これで命運は尽きたか・・・

蔓が幾重にも巻き付き、動きを止める。

ついにはカルサーも猛獣も蔓で見えなくなった。

樹王

巨大な木へと運ばれていく・・・

もうろうとしながら、空識で現状把握するカルサー。

これから一体、どうなるんだ？

かろうじて息は出来るが、いつ窒息してもおかしくない。

しばらくすると、巨大な木の方から、メキメキと音がし始めた。

何だ、何の音だ？

カルサーの鼓動が高まる。

落ち着け！ 酸素を無駄に消費しないように・・・

不安な心を落ち着かせ、機をうかがう。

遠くから何かが近づいてくる。

その何かが、巨大な木に近づき、何かをしている。

そして・・・爆音が響いた。

カルサーを縛り付けていた蔓が、だらりと力を緩める。

強化銃を無理矢理動かし、蔓を全て打ち抜くと、

猛獣と一緒に地面に落下する。

無事着地したカルサーを待っていたのはギャザルだった。

「よお」

「よお、じゃ、ねーだろ」

バーニングガンを向けるカルサー。

「結果的には助けたじゃねーか」

「お前が攻撃してこなけりゃ、切り抜けられたがね」

「・・・それはだな、仕様が無いんだよ。」

お前には捕まって貰う必要があったからな」

「一体、どういう事だよ」・・・

「お前、この木の事、本当に知らねーの？」

「・・・何となくわかってきたよ。こいつがああ、〈樹王〉なんだな？」

「知ってるじゃねーか。だったら、この木が何の役に立つかも知ってるはずだ」

「ああ。延命薬の材料だろう？」

「キロ、百万ラースだ。俺はこれを手に入れるために、

管理者まで買収したんだぜ？俺はこの地区に入っちゃなんねー

事になってる」

「・・・別に餌は俺じゃなくても良かっただろうが！」

「ついでだよついで！ お前が弱けりゃ、本当に殺すつもりだったしな・・・」

カルサーは背筋が凍り付く。

・・・何なんだ、この男。

「俺じゃ無かったら、アーマーも、そんな事にはならなかつただろうに・・・よ」

ギャザルのアーマーはボロボロになっていた。

「なあ、何の弾丸を使ったんだ？ バーニングガン程度じゃあ、

このアーマーは破れないはずなんだがな」

「・・・秘密」

「けっ、ダイマールも、その弟子も秘密主義者かよ」

開発中の、突破を使ったなんて言えないしな。

「まあいいや、物は手に入れたしな。お前が餌になってくれなきゃ、

口を開けなかつたし」

「口？」

「口の中なら、小型爆弾で吹っ飛ばせる。口を閉じちまったら、

それこそ軍用に作られた爆弾を使うしか無くなるからな」

ライセンス獲得

カルサーは改めて樹王を見る。

爆弾で吹っ飛ばされたものの、まだ大半は無事で、

巨大な枝を支えている。

「ここが窪地になってるのは、こいつの為に核爆弾でも

使われたからだな？」

「ああ。成長した樹王に、通常の攻撃は効かなかったからな。

話じゃあ、核ミサイル十発以上ぶち込んで、根こそぎに

完膚無きまでに破壊し尽くしたんだ。ただし、種は

破壊できなかつたみて一だがな」

「その時の種から、ここまで生長したのか・・・」

「そういうこと。おっと、おしゃべりはここまでだぜ。

早くここを離れないと、目を覚ましちまう」

そう言ってる間に、上から蔓が降り始めた。

「回復早ええなコイツ・・・」

「種がわかったら対処法は、たいしたことないね」

カルサーはそう言い放つと、バーニングガンの照準を合わせ、

巨大な幹に向けて打ち放った。

激しい爆音と共に、降ってきた蔓は力なく垂れ下がる。

「よし、急ぐぞ！」

「木の表面にヒビが入ってやがる！ 一体、どんな弾丸を

使ってやがるんだ！？」

二人して脱兎のごとく逃げだし、ようやく出口から脱出した。

「おつかれさまですな」

出口には管理人が待っていた。

「首尾は上々だぜ」

「そのようですね。カルサー様は死んでいらっしゃらないようですが」

「・・・さすが、ダイマールジーさんの弟子だったって事だよ」

「・・・」

さっきと全く違う対応に戸惑うカルサー。

「では、お前の始末をしておかねーとな」

カルサーは再びバーニングガンをギャザルに向ける。

「おいおい、勘違いするな。始末つっても、体をロープで

縛っておくだけだって！」

「そうなのか？」

「ええ、ギャザル様に無理矢理押し入られたように

偽装するだけですよ」

「ああ、なるほど・・・」

「あ、そうそう、縛られる前にこれを渡しておきましょう」

管理人は一枚のカードを手渡す。

「これは、もしかして・・・」

「ライセンス発行カードです。A級ライセンス獲得、

おめでとうございます」

「B級取った時と、大して変わらないな」

「ですが、中身のセキュリティは大きく違いますよ。

絶対にコピー不可のカードになってます」

「へえ・・・」

「さっさと縛っちまうぞ。ハンターポリスはもう向かってるはずだ」

「何でこの事を知ってるんだ？」

「子分が予告状を送ったはずだからな。ついさっき」

「・・・それ、予告状と違う・・・」

「うっせえなあ、貫うモン貫ったら、とっとと去れ」

「はいはい・・・」

その後、ギャザルの計画通りいった事を、

ニュースサイトの記事で知ったカルサーだった。

第2章 武者修行

グルベゾン

森に不気味な音が響く。

肉を千切る音、骨を砕く音……

その音の先には、一人の男がいた。

その男は猛獣の皮をはぎ、肉を喰らい、骨を折って

中の骨髓をすすっている。

「ふうー……っ、さすが<グルベゾン>、旨いぜ……」

男が余韻に浸っていると、端末がうなる。

「ん、カルサーじゃねーか。あーもし？」

「おう、エンドウ。今、海の上か？」

「……まだだよ。海まで後、数キロってトコだ」

「ほう、以外と時間食ってるじゃないか」

「そりゃ、そーだろ。グルゼの森を通過してるんだぜ？」

「味あわなきゃ勿体ねーだろ」

「グルベゾンか！ いいねえ」

「旨いぜえ？ ま、それはそうと、何の用だよ？」

「ああ、A級ライセンスを手に入れたぞ」

「おー、やったじゃねーか」

「まあ・・・色々苦労はあったがな。俺からは以上だよ」

「・・・お前、今キリスタだろ？ 後でメール送るから、その地図の場所に行ってみな。

俺にはカンケー無え場所なんだがよ」

「どういう意味だ？」

「いいから！ お前にはピッタリだと思うぜ？ じゃーな」

エンドゥは電話を切ると、端末でメールを送信した。

「あいつなら、多分奴に気に入られるだろ・・・」

しばらくして、エンドゥは歩き始めた。

背中には大量の肉がぶら下がっている。

「これだけあれば、当分海の上でも暮らせるだろ。

無くなったら＜海獣＞でも食えばいいしな」

しばらく歩っていると、お目当ての海が見えてきた。

「おお！！ すげえ広さだな！ 先がどうなってるのか、全く見えん・・・」

そう言やあ、海を見るのは初めてだったな。

湖は見たことあるが、海と比べりゃ小さな水たまりだな。

エンドゥは荷物を下ろすと、剣を引き抜き、何度か振るうと

あっという間にイカダの材料が手に入った。

手近にあった鉄の棒程の強度がある蔓を難なく解き、

イカダを組み上げてしまう。

「さて、あと必要なのはオールかな？ しかしなあ、ここにある

木だと、すぐに折れちまうぞ・・・あ、折れたら、この剣で漕げばいいな」

あまり深く考えずに、イカダを海まで引きずっていき、

イカダと同じ木を削ってオールを作る。

そして・・・大海原へと漕ぎ出した。

海上での戦い

イカダは勢いよく波を切って進む。

エンドウは、凄まじい速さでオールを漕ぐ。

「あー、この程度が限界か。これ以上速く漕ぐと柄が折れちまう・・・

ん、待てよ？ 確かダイじいがよく使ってた技があったな」

目を閉じ、最強の生命体をオールに纏わせる。

「オールを硬化させる・・・こんな簡単な事を忘れてたとは・・・

あ、イカダも硬化しておけばいいじゃねーか」

そう言やあ、硬化するのはいつも自分の体だけだったからな。

俺の唯一の武器であるこの剣は、それ自体が最近作られた

世界最強金属だから、硬化する必要も無いし・・・

彼が持つ剣の金属は<Z-9>と呼ばれ、通常は液体のようだが、

ある特殊な処理をすると強固な金属へと変わる。

固体になった後では、切断等の加工は不可能であるため、

形を作るには型を使う。その為、剣には刃が付いていない。

”尖鋭”はその為に生み出された技術なのだ。

理屈は簡単。刃の形に硬化しているだけ。

だがそこには、通常の硬化と違って、かなりの技術を要する。

「尖鋭の最終目的。それは、何でも切る事が出来る刃を作る事・・・

ま、簡単じゃねーわな」

しばらく漕ぎ進むと、イカダの下に巨大な魚影が通り過ぎる。

次の瞬間、そいつは水面から飛び上がり、口を大きく開け、

落下しながらイカダもろとも飲み込もうとしていた。

「・・・弱ええなコイツ」

エンドウの鞘に剣が戻される。

魚に似た海獣は、真っ二つに切り裂かれ、海へと落ちていく。

「飛ばした刃で切れちまうなんてな。ちょっと拍子抜けだな・・・」

と、辺りが暗闇に包まれる。

上を見ると、巨大な牙が並んでいる。

「ほう？ 下から一口ってワケかい・・・まあ、無駄だけどな」

そう言い終わる頃には、水面ぎりぎりの所で口がバツサリと切られ、

口を無くした海獣は海深くへと沈んでいった。

「あーあ、もっと骨のある奴は、いねえーのかね」

前方から水のはねる音が聞こえる。

海から出てきた、そいつらは・・・羽ばたいていた。

「おー、空飛ぶ魚か。しかも数で攻めてきたな」

その数、数百・・・

「こりゃあー、斬り甲斐があるってもんだ。

・・・む、俺の<戦闘領域>に無断で入ってきた奴がいるな」

エンドウの背後から、異形の怪物が、音も無く浮かんできた。

踏んだり蹴ったり

「タイミングばっちり」

エンドウが海に飛び込むと同時に、怪物と飛ぶ魚が激突した！

怪物は血まみれになりながら、飛ぶ魚を全てはたき落とす。

その様子を、イカダに上ったエンドウが面白そうに眺めている。

こいつ、水陸両用の猛獣、<シュランダー>だな。

前に会った時は湖だったか？

シュランダーの右腕がエンドゥを襲う！

だが、その右腕は軽々と受け止められた。

「あー、残念。あんた、弱すぎだ」

怒り狂ったシュランダーは左腕も繰り出す。

「・・・引き下がった方がよかったな」

エンドゥは指を軽くはじく。

すると、シュランダーの頭から血が噴き出し、

硬直したまま海へと沈んでいった。

「＜指刀・・・一本指、スピア＞。ま、こんなもんか。

・・・あ！海獣を食べようと思ってたのに、全て海に沈めちまった・・・」

その後、あれほど激しかった海獣の襲撃がピタリと止んだ。

ちっ、俺の怖さが伝播されちまったか・・・

まあいい、イカダを漕ぐのに専念するだけだ。

エンドゥは再び、オールを激しい速度で動かし始めた。

夕暮れ、エンドゥは釣りをしている。

無敵の生命体を、イメージで糸と釣り針の形に硬化し、

そこにグルベゾンの肉を千切って刺し、オールに糸を取り付けた。

「さーて、何か釣れてくれよ？」

糸を垂らしてすぐに手応えがあり、オールを引き上げる。

釣れたのは極彩色の小さな魚。

「うわ、小っちゃええ……」

魚を針から外した途端、そいつは指に噛みついた！

「うおっ！？ 痛えーだろ、てめー！」

イカダに強烈に叩き付けられた魚は息絶えた。

「何て強靱な顎だ……硬化が破られるとは……」

まあ、大した傷じゃなくて良かったが」

糸は何で噛み千切られなかったんだ？

あ、細すぎるからだな。

エンドウは、端末で魚を確認する。

「これか、〈ピラグルー〉……あー！？ これ食べねえのかよ……」

猛毒って書いてあるけど。食わなきゃ平気なんだろうな……」

踏んだり蹴ったりってのはこれのことだな。

あ、そうだ。海獣が襲ってこないなら、こっちから行けばいいじゃねーか。

海って最悪！

数秒後、エンドウは海の中にいた。

なんだ？ 海獣なんて、どこにもいねえぞ……

前方から見慣れた奴が集団で姿を現した。

ビラグルーの集団かよ。

お前らに用は無い。

指刀、〈十本指、レイン〉！

無数の刃がビラグルーを襲う。

そして・・・彼らは海の藻屑となった。

ん？ 何だ、あの細長い魚は・・・

うねうねと進む、まるで一本のロープが動いているみてーだ。

エンドゥは捕まえようとするが、ぬるぬると滑ってつかめない。

だったら仕留めるまでだ。〈五本指、クロウ〉！

細長い魚は六つに分断された。

が、なんと、それぞれが別行動をして逃げ去った。

な、なんじゃこりゃ！？ あんなのありかよ・・・

仕方が無いので、より深く潜っていくと、そこは海藻の宝庫だった。

腹の足しにはなるだろ。何種類か持って行ってみるか。

エンドゥは手当たり次第に種類が違いそうな海藻を刈り取ってイカダに戻ってきた。

「ふう・・・大量だが、全てが食えるわけじゃないよなあ」

端末で、今度は海藻を調べる。

「おっ、これこれ。この食べ応えがありそうな、

分厚い緑色の海藻は・・・猛毒だ」

エンドウは間髪入れず海藻をたたき落とす。

「次の海藻は・・・おっ、毒はなさそうだな。

しかし・・・この”激不味”ってのは？」

毒の無い海藻を無造作に口に放り込む。

そして、次の瞬間には吐き出していた。

・・・なるほど！一秒たりとも口に入れておけない不味さだな・・・

エンドウはイカダに倒れ込んだ。

「何も無い・・・海って最悪だ！」

もう、こうなったら、今日中に対岸に着いてやる・・・

決意を新たに、限界ぎりぎりのスピードでオールをこぎ続ける・・・

戦闘領域を脅かす者

な、何なんだ、この海は・・・

残すところ三分の一という所で、イカダが前に進まなくなった。

「おかしい・・・イカダを何かに掴まれているみてーだ。

しかし、俺の戦闘領域には何も進入してないしな」

これが潮の流れって奴か？しかし、このイカダの推進力は、
そんなもん物ともしないはずだが・・・

「・・・もう夜も近い。今日はこのまま休むしかねえ。
きて、グルベゾンでも食うか。・・・何いい!？」

ついさっきまであった場所に、肉の姿は無い。

馬鹿な！ 俺の戦闘領域に入らず、肉を持ち出せるはずが無い！

エンドウの言う、”戦闘領域”とは、空識の範囲を限定し、
精度を高め、心速と連携できる領域の事を差す。
その領域に入ったものは、埃だろうが水しぶきだろうが、
エンドウに感じ取られてしまう。

まさに、接近戦闘に特化した空識なのだ。

「くそ、どーいう事だぁー？ 空識に認識されない海獣がいるだと？
それはヤバイじゃねえーか・・・」

・・・指刀、＜二本指、ブレイド＞！！

振り向きざまに指刀が敵を一刀両断に・・・
したと思ったが、敵の姿が見えない。

「手応えはあったんだがな・・・空識を使えても、
自分の目で見るとを怠ってはいかん、ってことかね・・・」

すると、おもむろに海へと飛び込む。
直感が心速で体へと伝わったのだ。
飛び込んだ目の前に、奴はいた。

昔の映像で見たことあるなあ。そうそう、こいつ、ロケットにそっくりだ・・・

海獣の体は円柱のようで、頭だと思われる所は
上に向かって尖っている。そして足は、ロケットから
吐き出された煙のように広がり、足の先は透けている。

む！！

剣を抜こうとした矢先、体が動かなくなった。
何かに縛られてるみてえーだな。

恐らく、奴の足だ・・・

<無刀、刃現>!

剣も指も使わず、体の周りをズタズタに切り裂く!

終わりだ!

エンドゥが剣を振り下ろすと同時に、海獣は黒い液体を吐いた。

黒いもやが無くなる頃には、海獣は姿を消していた。

ちっ、逃げたか。まあ、痛めつけといたから、戻ってくる事はなさそうだが・・・

イカダに上がり、そのまま横になっていると、いつの間にか眠っていた。

地図に無い島

エンドゥは飛び起きた。

「ちっ、寝てたのか・・・ん、何だ？」

戦闘領域に入ってきたものは・・・島だった。

「こんな所に島が・・・？」

マップを確認するが、島は確認できない。

「なんだっていい、とにかく食料を手に入れないとな」

イカダを島に引き上げ、うっそうと茂った森の奥へと分け入る。

・・・しかし、この森、何か変だぜ。

どの植物も、光り輝いてやがる。

どーなってんだ？

近場にあった木を調べると、表面が堅い結晶に覆われている。

「この結晶のお陰で、外の光が反射してるんだ・・・」

しかし、この結晶、ガラスみてえだな」

周囲を見渡してみると、どの植物も同じように

結晶に包まれている。

まるで、結晶に閉じ込められてる森だな。

生物は、いないかもしれん・・・

そう思い、あきらめてイカダに戻ろうとした時、

戦闘領域に何者かが反応した。

目をこらすと、後方から光り輝いた猛獣が姿を現す。

「せ、生物もピカピカ！？」

その猛獣は、頭の前から伸びた毛が、尻尾の先まで繋がっている。

まるで表面がコーティングされたように光りを反射していた。

「・・・食えれば何だっていいがね」

エンドゥはニヤリと笑うと、全力で輝く猛獣を追い始める。

輝く猛獣は、慌てて逃げるが、速度はエンドゥの方が勝っていた。

あっという間に追いつき、手で掴もうとした、その時！

体が吹っ飛ばされた。

「なっ！？」

捕まえようとしていた猛獣の親と思しき巨体が、

丸まってぶつかったのだ。

・・・追うのに夢中になりすぎだ。戦闘領域を解除しちゃってたか・・・

俺の悪い癖だな。

輝く巨体の猛獣は、もう一度襲ってくるかと思いきや、

子供を連れて逃げていった。

食料確保

「やれやれ、久しぶりに距離の限定を解除してみるか・・・」

エンドゥは集中し、空識の距離を引き延ばす。

すると、感覚が拡大し、島の全容がわかるまでになった。

「さっきの猛獣の他に、いくつか動き回っている奴がいるな。

だが、大きさが変わらないところを見ると、同じ生物か。

ん？ これは何だ・・・くそ、ここまで範囲を広げると、

物体の特定は不可能だな」

特定をあきらめ、自らの足で確認することにした。

きらきら輝く森を抜けると、海が見え、

そこには・・・海獣が横たわっている。

「お、食料ゲット。まずは食えるかどうか調べて・・・

おっ、オーケーだ。頂くぜ！」

生のままかぶりつく。

「あー、ダメだこりゃ。皮がゴムみてえーだ」

五本指を、ついっ、と動かすと、海獣は輪切りにされた。

・・・何でこいつ、切っても血が出ねーんだ？

疑問を抱えつつ、肉にかぶりつく。

「おっ！ 意外といける・・・これで何とか飢えをしのげるぜ・・・

しかし、こいつは・・・」

エンドゥは海獣をひっくり返す。

すると、腹に穴が空いており、中は空洞になっていた。

「内蔵と血液だけ食っちゃった奴がいるな。何でだ？」

海獣の頭に指を当て、パツクリと切り開く。

「唯一残った内蔵・・・か」

無造作に脳を掴み、口に入れる。

「んなっ！！ メチャメチャコクのあるプリンみてーだぜ・・・

こいつ、内蔵が旨すぎる！ しかしだな、なぜ脳みそを食わなかったんだ？

・・・そうか、こいつを襲った奴は、切るという行為ができないんだ。

腹の穴も、無理矢理ぶち抜いたっぼいな」

エンドゥはふと、周りの景色がおかしいことに気づいた。

「あれ！？ どこだここ？」

慌てて端末のマップを確認すると・・・たどり着いた時の場所から

大分離れていた。

「・・・するってーと、この島、動いてるのかよ!？」

浮島って奴か？ しかし、結構な大きさだぞ、この島・・・

「おもしれえーじゃんか。しばらく乗っかって行ってみよう。

食料も確保したしな」

こうしてエンドゥは、のんびりと島という船に乗り、

クルーズを楽しむことにした。

謎の猛獣

夕暮れの太陽が島を照らし、島自体が赤々と輝きだした。

この島にたどり着いてから五日目の夕日を眺め、

ディナーを満喫する。

「ふうー、この島とも、明日でお別れだな。

何しろ、海獣の肉も、あと一日分程度しか無えーしな」

近くの木には、海獣の干し肉がゆらゆらと揺れている。

「今までの動きからすると、明日の昼頃が一番岸に近づく。

まあ、つくづく丁度いい島だったな。食料と移動手段を

提供してくれるなんてな」

その日の夜、島の先端で寝転び、星を眺めていたエンドゥは、

対岸にうごめく何かを見つけた。

・・・ん、何か猛獣がいるのか？

起き上がって目をこらすが、暗くてよく見えない。

と、雲から月が顔を出すと、その明るさで猛獣の全体像が見えた。

全身毛むくじゃらで・・・そいつは二本の足で立っている。

・・・猿の進化タイプか？

面白そうな相手がいるな。

その時、猛獣は振り返り、目と目が合った。

エンドゥの体から汗がにじみ出る。

こいつ、ただもんじゃねえ！！ 殺される・・・

しばらく見つめ合っていたが、猛獣の方は飽きたのか、

目をそらし、森の奥へと消えた。

極度の緊張が解けたエンドゥは、そのままバツタリと倒れた。

何て・・・奴だ！ くそ、くそつたれが！ 弱い、弱すぎるぞ俺は！

俺は過信していたかもしれん。自分の強さに自惚れていた・・・

俺なんて、まだまだだ。もっと、もっと強くならねば！

過信していた自分を戒め、より強くなる事を自らに誓うエンドウだった。

その頃、対岸の森の中では、先ほどの猛獣が数匹集まり、会話していた。

会話と言っても、人には理解不能な言語である。

強いて人間の言葉でたとえるなら、こんな感じだろう。

「向こうの島に、ヒトがいた。食っていいか？」

「やめておけ、お前もタダでは済まんぞ」

「えっ、そんな強そうではなかったけど」

「ん、来たようだ」

森の奥から同じ種類の猛獣が姿を現した。

だが、この場にいた猛獣と違い、体が光り輝いている。

「＜森の意思＞よ、われわれはもう我慢できない。

このままでは昔の二の舞だ」

光り輝く猛獣が答える。

「争いは争いしか生まない。我々が進むべき道は、ヒトとの和合、

共生である」

「ヒトは日々進歩する。これ以上は待てぬ。ヒトはまた森を切り裂き、

空を汚すだろう。今ならば駆除も可能」

「・・・そうやってヒトと自然は長きにわたり滅ぼし、滅ぼされてきた。

もう、これ以上、繰り返すのはやめよう」

「ふん、またそれか。今度は一匹たりとも残らず、ヒトという種を絶滅させる。

「・・・お前はお前で行動したらよかろう」

「・・・もう、とどまってはくれんのか」

「ああ。俺たちは行動を起こす。止めたかったら、お前が先に

念願を成就させるんだな」

そう言うと、仲間と共に猛獣は去って行った。

残された光る猛獣は、悲しい顔をしながら呟いた。

「まだ・・・欠けている。意思と通じる者が・・・」

第3章 ZAN第二部隊

グランビープ

「さあ、皆さんお待ちかねの、ZAN活動報告のコーナーです。

今回は<サガン地区>にいる、第二部隊のヤンバ兄さんに

登場してもらいましょー！」

「テレビの前のみんなー！ ZAN第二部隊のヤンバ兄さんだぞー」

「では、今回の任務について、説明お願いしまーす」

「えー、今回の任務は、<グランビープ>の捕獲です。

今年八月に開催される、<料理人選手権>の指定食材

として<料理人協会>に納入されます」

「以上、サガン地区からお送りしましたー！」

「・・・はい、オーケーです！」

「・・・ふうー、中継は疲れるぜ・・・」

「ヤンバさん、お疲れ様」

「やっぱりさあ、あのキャラは失敗だったかなー・・・」

「ふふふ、第一部隊の時と同じノリだと大変ですか？」

「最初はさ、あんな緊張するとは思わなかったけど・・・」

その時作ったキャラのまんまだからねー」

後ろから軽快な足音が響く。

見ると、骨組だけのロボットに乗ったハトバが手を振る。

「ハトバ、捕獲状況はどうだい？」

「あと数匹捕まえれば、任務完了さ」

「時にハトバ、その骨格だけのロボットはどうしたんだ？」

「ああ、奴を捕まえるために軽量化したんだ。

お陰で二匹捕まえられたぜ」

「ほー、さすがは＜HAS＞、グランビープを捕まえる程の脚力とはねえ」

「まあね。ま、HAS無しで奴を五匹も捕まえた

ヤンバの駆動力の方が凄いけど？」

ギャアアアアアアアアッ！！

「きゃっ！ 何の音よ、これえーっ！」

「おっと、忘れてた。この多機能イヤホンをしておいた方がいいぜ」

「何？ さっきの音は」

「あれか？ グランビープの鳴き声さ」

「我らがリーダー、テンクーが捕まえたかな？」

「あいつ、何匹捕まえるんだよ・・・」

前の茂みからテンクーが現れた。

「今ので九匹目さ。後は他の人に任せよう」

「あと四匹か」

「いや、さっきマイルズが一匹捕まえたから、三匹」

「ほう、H A S無しで一匹捕まえたか。やるねえ」

「おいおい、あいつの装備は最新モデルの最高級品だぜ？」

「一匹ぐらい捕まえて当然だろ」

「まあ、それはそうだが・・・あ、〈居残り組〉は何やってんだ？」

「彼らは運搬用のトラックを市場から借りてるよ。」

「もうこっちに向ってる時間だね」

「あの、居残り組って何ですか？」

「あれ、ミリィさんは知らなかった？ Z A Nの部隊って一年ごとに

人が変わるでしょ？ その時に次の部隊に行かず、残った人を

居残り組って呼ぶらしいです」

「へえー、何で次の部隊に行かないんですか？」

「隊数が上がれば、より危険な任務になってくるからさ。」

「だから力量が足りないと思ったり、楽したいって思ってる人は残るんだ」

「なるほどねえー、メモしておかなきゃ」

その時、遠くからエンジン音が聞こえてきた。

ファンクラブ

「あ、ご苦労さん。あと少しで捕獲完了だ。

捕獲済みのグランビープを積み込むから手伝ってくれ。」

「了解」

「おいおい、俺は捕まえる側に戻るぜ。

まだ一匹も捕まえてねーんだから」

「ちょっと、バラス。君はいつもそれだ」

「あん？ 言われることをホイホイ聞く、よい子のプラントン君よう。

そんなだから使っぱになるんだよ」

「そんな事はないよ。僕は皆の役に立つのが楽しくてやってるんだ」

「俺はそんなのヤなんだ。自由にさせてもらうぜ」

「おいおい、また喧嘩かよ？ 子供じゃ無いんだから・・・」

「ふん、後輩に言われる筋合いはねーな。さて、狩に行くか」

バラスは意見を無視し、さっさと捕獲に行ってしまった。

「おいおい・・・リーダー、何とかしろよ」

「僕も年下だからね。同じ事を言われると思うよ」

「弱いな・・・」

「まあ、彼の好きにさせよう。さあ、皆で積み込みだ」

一時間後、二十体のグランビープはトラックに積み込まれた。

結局バラスは一体も捕まえられず、マイルズがもう一体捕らえ、

グラモトとトーキが一体ずつ分け合った形になった。

「さて、市場に届けてもらう役を誰にするかな」

テンクーの端末が着信を告げる。

「はい、第二部隊」

「テンクー！ 話したかったわぁー！ なかなか第二部隊への

連絡が回ってこなかったのよー！」

「・・・エリーさん？ 久しぶりに話しますね」

「あらら、私、白い目で見られてる・・・大声上げ過ぎちゃった・・・

ええと、次の依頼が来たわよ。本当は第三部隊の仕事なんだけど、

仕事が遅れてるみたいで」

「了解です。詳しい内容は、またメールで送ってください」

「またね、テンクー」

「エリーさんもね」

「うん・・・また」

電話を切ると、ヤンバとハトバがニヤニヤしていた。

「もてるねえテンクー」

「だよなー、ファンクラブまで出来てるしな」

「・・・さて、次の依頼は・・・っと」

テンクーは端末でメールを確認する。

「さすがエリーさん、仕事が速いね。えーと、＜リディバル＞に行って

猛獣退治・・・か」

「リディバルか・・・＜オシギス＞を遺伝子組み換えで作った、

＜美味肉＞シリーズが有名な企業だよな」

「あれ？ リディバルって言えば、ハンターを自前で雇っているはずだろ？

なんでZANに依頼が来るんだ？」

「どーせケチって、ライセンス無しのハンターでも雇ってんじゃねーのか？」

「一流の企業が、そんな事やってないと思いますけど・・・」

「まあまあ、行ってみればわかることさ。さあさあ、市場にグランビープを

持って行く役を決めなきゃ」

メガネをかけた男がつぶやく。

「その役、わたしが引き受けよう。あの市場には＜ロジェット＞が入ってるはず。

強化銃の最新モデルを買いに行く予定だったんでね」

「あ、グラモトずるいねえ。それなら、オレっちも同行しようかな」

「・・・トーキ、君はいつも私の後をついて回る気かい」

「嫌だなあ、オレっちも買いたいものがあるんだ」

「それじゃ、決定ですね。では、僕たちは先に行ってますので」

「了解した」

「合点！」

こうして一行は二手に分かれ、リディバルへと向かった。

リディバルに向けて

先行のテンクー・ヤンバ・ハトバ・マイルズ・バラス・プラントンは

電車で揺られていた。

時折、サインや握手を求められたり、端末で写真を勝手に撮られたりしながら、

リディバルに近い〈ホボク〉へと移動している。

「しかしよお、相変わらずトーキの言葉は訳分からんな」

「彼はマンガが大好きだからね」

「一人称が、度々変わるの勘弁してほしいけどな！」

「バラスの喋り方も好き嫌いがあるだろうなあ」

「プラントンは、言ってくれるなあ、この青二才が」

「・・・僕と歳は一つしか変わらないと思うけど？」

「何だよ、またケンカ？ 仲良いねえ」

「歳が二才も違う奴は引っ込んでろ」

「またあ・・・歳がどうのって、いいじゃないですか」

「よくねえーよ！ 俺が威張れる、唯一の点を消すんじゃねえ」

「ふふっ、わかってるじゃないですか、自分の事」

無口なマイルズが、ぼそりと言った。

出たー！ マイルズの毒舌！

まったく、言わなくていい事を言うなよ……

ヤンバは思わず額に手を当てた。

「マイルズ、てめえ……”お坊ちやま”は黙ってるや……」

「ふふ、お坊ちやまが発言するのはいけないかな」

「フン、ここまで来られたのは全て、有り余る金で買った

武器と防具のお陰だろ？」

「ええ。その通りですけど何か？」

「……否定しねえーのかよ」

「全て真実だったからね。私は道具に頼りきってここまで来た。

もちろん、H A Sが製品化された暁には、誰よりも早く手に入れるつもりさ」

「けっ、えげつねえなあ……」

そうつぶやくと、バラスは黙りこくった。

「そーいえば、H A Sの製品化っていつだっけ？」

「まだ決めてないけど、おそらく来年には出るだろ」

「ふーん……ま、俺には必要ないわけだが」

「言わなくてもわかるっての」

「あ、そろそろ着きますよ」

電車はゆっくりと速度を下げ、やがてホボクへと到着した。

「じゃ、町には寄らないで、直接地上へと繋がるエレベーターに乗るよ」

「地上に出てから何時間で到着するんだ？」

「心配無用。リディバルから送迎車が出るらしいよ」

「ほう、楽だねえ」

「ま、走っていても俺は疲れないけどな」

「・・・そのHAS、移動するときに邪魔なんだけど・・・」

「ん？ ロボットだと思うからだろ。大男が隣に座ってると思っていれば、

何の違和感も感じないはずさ」

・・・逆に暑苦しいな、それは。

エレベーターから外へ出ると、一台の車が止まっていた。

送迎車

「なっ、何だこの車！？」

「こりゃあ、送迎って雰囲気じゃないぜ・・・」

「・・・地上仕様、だね」

その車には、昔に軍用で使われたような武器が搭載され、

外側を覆うように回転する刃が付いている。

「お待ちしておりました。おや、人数が足りないようですが？」

車から降りてきた、制服をピシッと着こなす老人が言った。

「私は第二部隊のリーダー、テンクーと申します。

残り二人は後から合流予定です」

「そうでしたか。では私が二往復いたしましょう」

「助かります・・・む」

テンクーが見据えた先に、猛獣が現れた。

「心配無用でございます」

老人が端末を操作すると、車に取り付けられた銃が向きを変えた。

「見たこと無い型ですね」

「マシンガンと言いましてね、強化銃の大型版だと思ってもらえばよいかと」

轟音を響かせながら、猛獣に向かって弾丸を撃ちまくると、

車の上からは大量の薬きょうが滝のように流れだす。

「凄え、こんなの映画でしか見たことないぜ・・・」

驚いた猛獣は、慌てて逃げていった。

「さあ、乗ってください」

「では、行きましょう」

ZAN一行を乗せ、車は森を進む。

車内は金属の強固なフレームで覆われ、

絶え間なく騒音が響き渡っている。

「うるせえ車だな、おい・・・」

「しょうがないよ。枝を切り落としながら進んでるからね」

「申し訳ないですね。＜ツバクの木＞の成長スピードは早いもので、

毎回切断して行かないと、道が無くなってしまいます」

「へえー、これがツバクの木か！ 実は絶品らしいですね」

「収穫が命がけですので、あまり多くは出回らないようです」

しばらくツバクの木と猛獣を切って撃ちながら進むと、

遠くに網に囲まれたリディバルが見えてくる。

「あんな薄そうな網で破られませんか？」

「大丈夫です。近づいただけで雷に打たれますので」

「・・・この車は大丈夫なのか？」

「ご心配なく。入り口は手動で電源の入り切りが出来ますので。

ま、たとえ撃たれても、地面に流れてしまうだけです」

車は入り口から中へと入り、いくつかの網を抜けた後、

会社入口へと横付けされた。

「お待ちしております。私はリディバルの社長をしています、

＜トグラ＞と申します」

トグラはそう言ってテンクーと握手する。

「ZAN第二部隊リーダーのテンクーと申します。今回はZANをご利用いただき、

ありがとうございます」

「テンクーさん、来た早々悪いが、すぐに猛獣駆除をお願いしたい。

あの猛獣のお陰で、出荷が遅れ、他の商品にも影響が出るかもしれません」

「こちらで雇っていたハンターでは手のつけようが無いということですか？」

「はい・・・実は、この場に及んでライセンスを持っていないハンターだと

わかりまして・・・人事の担当が不正を働いていたのです・・・」

「わかりました。お任せください。すぐに取り掛かります」

「助かります」

見えない敵

ZAN一行は、“美味肉飼育所 E” というパネルが張り付いている

扉の前に案内された。

「特殊装甲の扉ですので、奴もこちらまでは入って来られません。」

「・・・？ では、猛獣はどうやってここに進入したんですか？」

「強固なのは内側の管理棟だけでして、外側は電撃網があるだけです」

「つまり・・・その網を破って進入したと？」

「事実、網が破られていたので。まるで引き裂かれたように・・・」

「電撃が通用しない猛獣なんて、存在しているのでしょうか？」

「おそらく、作業のために電撃を切っていたんだろうと思われます。

ブレーカーも落ちていましたし……」

……落としていたのか、落ちたのか。

「猛獣は、まだ中に？」

「外側の網は塞ぎましたし、それに、この音を聞けば、

奴がまだ中にいることが分かるでしょう」

社長は扉の横にある計器を操作した。

画面に映し出されたのは、あたり一面の血の海。

そして、どこからか聞こえてくる、骨を砕く音……

「……わが社の商品が食われている音だよ」

「……了解しました。猛獣を特定し、駆除します」

各人は、おのおの装備を確認し、扉を開け、中に入っていく。

「で、リーダーさんよお、作戦とか無えーのかい？」

バラスが嫌味ったらしくテンクーに詰め寄る。

「まず、戦う相手を特定しないとね。対策も立てられないよ」

「よっしゃ、俺がひとつ走り行って来るか」

ヤンバが意気揚々と提案する。

「……見てくるだけだぞ。自分で仕留めようとは思わないようにね」

「……わかってるって」

そう言うと、音のする方へ向かって走ってゆく。

「はっ、あいつは自信過剰なんだよ」

「でも、自信の裏づけは、ちゃんとありますよね」

「ああ、強化体なんだから。ちっ、俺もA2Cが高けりゃ、

こんな所にいるはずないんだがなー」

音のする方に、音を立てないように進むヤンバ。

すると、不意に音が止む。

・・・気づかれたか？

茂みに隠れて様子を伺うと、血まみれになった地面に寝そべる猛獣がいた。

白と灰色の混ざった毛を全身に纏っている・・・

こいつは犬の進化タイプか？

まあ、丁度いい。写真を撮っちまおう。

端末をカメラモードにし、画面を覗き込む。

あれ？ どこに行った？

まさか、一瞬目を離した隙に、俺の視界から消えるなんて・・・

その時、ヤンバは強い衝動を感じ、

その通りに行動した。

ウルヴァル

間一髪・・・

口をバクンと閉じる音が、すぐ側で聞こえた。

「あっぶねえ！ 久々に感じたぜ。

ガルベリア・サダーの時みたいによ・・・」

ここから、一刻も早く立ち去りたい・・・

その衝動の通りに動いたことで、ヤンバの命は救われた。

「・・・ってえー事は、こいつ、そうとう強いってことか」

一人と一匹がにらみ合う。

ヤンバは、カメラモードにしたままの端末を猛獣に向け、

シャッターを切る。

そして、慣れた手つきでテンクーへと送信した。

その頃、テンクーの端末が着信を告げる。

「ヤンバからかな？ ・・・おっと、これはヤンバの危機だね」

「あの野郎、単独行動しやがって」

「こいつが敵なら仕方ないよ。狼の進化タイプ、

<ウルヴァル>だ・・・こいつはずる賢い」

「そいつはA級の危険度だぞ。こんな所にいないはずだよなあ」

「ええ、ウルヴァルは、ここから百キロ程離れた〈エピダルク山脈〉に

棲んでいるはずですよね」

「一々、知識をひけらかしているんじゃないよ」

「まあまあ君たち、ケンカは後にして、ヤンバの救出に行こうじゃないか」

「入ってくんな、マイルズ！ しかも何で上から目線なんだよ！」

「あーもう！ そんな事どーでもいいよ！ 俺は先に行くからな」

ハトバはHASを駆ってヤンバの元へと急ぐ。

「・・・ヤンバとハトバで片は付くんじゃねーか？」

「まあまあ、そう言わずに行こうよ」

一方、ヤンバはウルヴァルに苦戦していた。

次々と襲い掛かってくる攻撃で、防戦一方。

ちっ、振動ナイフは奴の毛に阻まれて効果無しか・・・

バーニングガンクラスじゃないとダメージも与えられないな。

テンカー達が到着するまで、一分程度。

できれば、”あれ”は使いたくないが・・・な。

一瞬の隙を突いてウルヴァルはヤンバの足を引き裂く。

だが、足を引いたお陰で皮膚が裂けただけで済んだ。

「あつぶねえ！ この野郎！」

ヤンバの拳がウルヴァルの頭に叩きこまれる！

が、何事も無く再び距離を取る。

「サンガンを一撃で倒した、このパンチも効果無しか。

・・・ふん、直撃するときには頭を反らしたな？」

ウルヴァルの耳がピクリと動く。

「ん？ あいつが来たか」

やや重量感のある足音が、こちらに向かってくる。

H A S の実力

「助けに来たぜ、ヤンバ！」

「ハトバ！ 注意しろ！」

ウルヴァルはハトバに向かって爪を振り下ろしていた。

「心配すんなよ」

H A S はとっさに腕でガードする。

金属が擦れ合う音が聞こえ、着地したウルヴァルの足からは

血が滲み出していた。

「軽量だが強固な金属、〈L-25〉で作られてるんだぜ？

しかもセンサーによる自動防御システムのお陰で、

スピード重視の敵にも対処可能！」

「ええい、御託はいから、そいつを捕まえろ！」

「りょーかいっ！」

HASでウルヴァルを捕まえようとするが、一瞬で姿を消した。

「あ、まずい、逃げ出した！」

「レーダーか何か付いてないのか？」

「ハトバの空覚を真似た、空間認識システムがあるぜ」

「説明はいいから、それで追え！」

「よっしゃ、ついてこい！」

二人はレーダーを頼りにウルヴァルを追う。

テンクーの方とは言うど、やっとヤンバ救出に向けて動き出した所だった。

む、ウルヴァルが逃走したね・・・

こっちに向かってくる。

テンクーは空覚によって事の次第を確認し、強化銃を構える。

「ん、どうした？」

「ウルヴァルが、こっちに来そうな気がしてね」

「ふーん、テンクーの勘は当たるからね。俺も準備するでしょう」

「はは、何だお前ら、ビビってるのか？ 男ならドンと構えてろ」

「リーダーの勘はよく当たるんですよ。バラスも準備したほうがいいよ」

「お前が命令すんな、お前が！」

テンクーの端末が唸る。

「わかってるよ」

「ああ、そうだったな。注意しろよ。あいつに強化銃は効かなそうだけ」

「おっと、それは困ったね。まあ大丈夫でしょ。マイルズはサンダーショット持ってるし、

バラスはバーニングガンだ。」

「じゃあ、先に仕留めておいてくれ。俺達も合流する」

「了解した」

電話を切ると同時にテクターは、強化銃を連射モードに切り替え、

まだ見えない敵に向かって撃ちまくった。

「無駄に撃ちまくってるなあ。奴を見つけた途端に、

俺のバーニングガンが火を噴くぜ」

・・・ウルヴァルには、弾丸が丸見えみたいだね。

急所に当てようとしているのに、逸らされてしまう。

やれやれ、皆の見てる前で倒しちゃう訳にもいかないしねえ・・・

「来るぞ！」

テクターは大声を張り上げた。

ボール・タクティクス

「オラァ！」

バラスのバーニングガンが唸りをあげる。

が、弾丸は空を切った。

「んなっ！ 半端なく速ええぞ！」

「俺に任せておけよ」

マイルズのサンダーショットから放たれた電撃が、

ウルヴァルを襲う！

次の瞬間、ウルヴァルが光り輝いた！

やがて光は消え、何事もなかったように動き回る。

・・・そういう事か！

道理で電撃網が効かないはずだ。

「雷を・・・空中に放電しやがった！」

「バラス！ 僕にバーニングガンを貸してくれ！」

「やなこった！ お得意の強化銃で戦ったらどうだい！」

「君じゃウルヴァルのスピードについていけないだろう？」

あっ、注意しろ！」

「何をだ・・・ぐわっ！」

バラスは悶絶して倒れた。

見ると、足首が切断され、血が流れ出している。

ウルヴァルは悠然とバラスに近づき、持っていたバーニングガンを噛み潰した。

「やられた・・・」

テנקーは、慌ててナイフを引き抜き、バラス救出に向かう。

どこからか、バラスに向かって赤いボールが投げつけられた。

爆発音と共に巨大化したボールは、ウルヴァルを弾き飛ばす！

「プラントン・・・遅えーよ！」

「ごめんねバラス。どんなプランで行こうか迷っててさ」

「お前の悪い癖だぜ、それ」

「プラントン！ 奴が戻ってきたぞ！」

「では、僕の<ボール・タクティクス>で、捕まえてやる！」

そう言うと、マジシャンさながら、一瞬で指の間にボールを出現させた。

「やっちまえ、プラントン！」

プラントンは銃を抜き、ウルヴァルに向けて撃ち放つ！

ボールは次々と地面に着弾し、次々と破裂して膨らみだす。

わずかに残されたボールの隙間を縫ってウルヴァルが近づく。

「よしっ！」

次に打ち出されたボールは、ウルヴァルの前方に着弾し、

進行を妨害した。

が、巨大化したボールを軽々と飛び越える。

しかし、それこそプラントンの思う壺だ。

「やっ和高く跳んだね？ 跳んだってって事は、もう加速ができないって事だよ。

これで、ジ・エンド」

打ち出されたボールは、ウルヴァルに当たると同時に、

巨大な網を広げた。

「よっしゃ！ 捕ったな！」

誰もがそう思った矢先、ウルヴァルは網を切り裂いて地面に着地した。

「なーにが、ボール・タクティクスだ！」

「さっき、喜んでなかった？」

「そりゃそうだろう、お前が捕まえ損ねる事なんて、今まで無かったんだからよ」

「まあ、僕も予想外さ。＜L-1＞で出来た網を、簡単に切るなんて・・・」

ウルヴァルの耳がヒクヒクと動く。

すると、扉の方へと走り去った。

シャッターチャンス

「何だ？ 俺たちから逃げ出したのか？」

「いや・・・後発隊が到着したのさ」

彼らが心配だ・・・扉を突破されたら、被害は甚大だ。

テンクーは軽くため息をついた。

ウルヴァルは考えていた。

あの中には、もっと旨い獲物がいる。

獲物の匂いが強くなったということは、

中へと通じる道が再び開いたということ。

二度目の失敗は許されない。

中への道には、ヒトが三体。

奴等をかみ殺して先に進もう。

トーキが気づいた時、ウルヴァルは目の前だった。

口を大きく開けて飛び込んでくる猛獣に、トーキは思う。

あ、丁度いいや。

手に持っていた、あるものをウルヴァルの口目掛けて投げ込む！

刹那、ウルヴァルはトーキの頭を丸ごと噛み付き、

そのまま中へと突っ込んだ。

グラモトが駆け寄ると、そばに社長がへたり込み、

ウルヴァルはトーキに噛み付いたままグッタリしている。

「グラモト！ グラモト！」

「ああ・・・今助ける」

「ちーがーうー！！ シャッターチャンスだよ！」

噛み付かれ、血が滴っているのに、凄い笑顔でポーズをとる。

グラモトは仕方なく、端末を使って写真を撮った。

「危なかったねー！ 噛み潰されるかと思った！」

「・・・そのまま、嘔み潰されれば良かったのだ」

「・・・グラモト、ひどい」

「新しい武器を、自慢してたのが幸いしたな。

手に持っていなかったら即死だっただろう」

「にひひひひ。運がいいんだ、俺様は」

「その、妙な笑い方は何とかできんのかね・・・」

こうして、依頼は無事終了した。

スパイスフィア

帰りの車の中、ウルヴァルの結末が語られた。

「で、結局、手に持っていた毒針で止めか・・・

結局俺は活躍できなかったな」

「これ、毒針じゃないよ？ <ギガスパークス>って名の通り、

一瞬だけ大電流が流れる武器だよ。<デルグラファントム>をも

一撃で仕留める性能なんだなー」

「ウルヴァルにはサンダーショットが効かなかったが・・・」

「いや、体内にダイレクト放電だからさ。どんな生物だって、たまったもんじゃない」

「む、そうか」

「あー！ あれあれ、何か落ちてくる！」

見ると、空からゆっくりと丸いものが落ちてきている。

あれ、どこかで見たような・・・

テンクーは記憶を探り、ある人物に思い当たった。

「あの物体を回収したいんですけど、行けます？」

「お安い御用で」

杖を、ぶった切りながら落下地点に急ぐ。

「やっぱり！ カルカラーさんの、”スパイスフィア”だ！」

「え？ カルカラーって、あの？」

テンクーは急いで車から降り、スパイスフィアを回収する。

カルカラーさんに、何かあったのだろうか・・・

不安そうにスパイスフィアを抱えて戻る。

「なーに暗い顔してるんだよ。ちょっと俺に貸してみろよ。」

「何が撮れてるか見てみようぜ」

と、ハトバが元気付けた。

「んー、どれどれ？ おっ、やっぱり<MLB>付いてるじゃんか。」

「これなら、俺のプレート端末に繋いで・・・よし、接続完了」

皆でプレート端末を覗き込む。

ハトバは、立ち上がった操作ソフトを操り、動画を表示させた。

「何だよ、風景しか映ってねーぞ？」

「ああ、もっと時間を遡って・・・お、出てきたぞ」

「・・・これは<トガルカの木>だ。どうやら実の採取らしいね」

「もう少し早送りするべきだがね」

「待て待て、もう少し確認しながら進もうよ。」

「・・・あ、あれ？」

場面が急に入れ替わり、今度は戦闘している。

そして・・・次の瞬間には、全員が倒されていた。

血まみれになりながら、カルカラーは最後の力を振り絞り、

端末を操作した後、力尽きた・・・

「何、何があったんだよ！ みんな・・・血を吹いて倒れてるぞ！」

やがて、映像はゆっくりとカルカラー達から外れ、森をさまよい始める。

「カルカラーさんは、自動追跡をオフにしたんだ・・・

この映像を守るために・・・」

「待てよ？ カルカラーがいる隊のリーダーって、オーゾラじゃなかったか？」

「・・・それは心配無用。兄さんは今、本部で療養中だからね。

でも・・・このことを知ったら悔しがるだろうな。」

「いや、お前ら、そんな事より医療班を向かわせなきゃよ！」

「それは無理だよ、バラス。映像には日時も表示されてただろ？」

この殺戮が行われたのは、一週間も前だ・・・」

「そうか・・・くそっ！」

「とりあえず本部に戻ろう。何が起こったのか、検証してもらわなきゃ。」

それに、バラスの足も治療してもらわないと・・・」

こうして、ZAN第二部隊は本部へと向かった。

第4章 民と意志と秘めたる力

ミスフィア

パチパチと薪の爆ぜる音が聞こえる。

日はまだ高く、周りに生えている植物には、

光がさんさんと降り注いでいる。

薪の回りには、妙な形の食物が、串刺しにされ炙られていた。

「本当に食べられるんですか？ これ・・・」

少し幼さの残る青年がつぶやく。

「心配無用じゃ。本来は観賞用じゃがのう、

直火で炙れば固い皮が弾けて美味しく食べられるのじゃ。

ほれ、食べ頃じゃぞ」

老人がせつつくと、青年は仕方なく食べ始める。

「わっ！ 何、このサクサク感！ 匂いは青臭いけど、

ほのかに甘いし、何よりもこの食感は楽しいですね」

「マルク、いつから評論家になったんじゃ？」

「・・・いや、あまりの美味しさに、つい。

そんな事より、ダイじいも食べましょうよ！ あ、マイトもどうぞ」

「キュ！」

全身針だらけの生物が答える。

「＜ミスフィア＞は、わしの大好物じゃ。言われなくても食べるわい」

ダイじいは、8の字になったミスフィアを手に取り、

美味しそうに食べ始めた。

「次は・・・指の長い手の形を食べようか。おっと」

指の一本が折れ、落下するが、地面に付く前にピタリと静止する。

マルクは空中で止まっているミスフィアをヒョいと摘まみ、

口の中へと放り込む。

「ほほう、彼らを操るスピードは、弟子随一じゃな」

「それはそうでしょう。テンクーと別れて以来、

こればかりやってるんですから・・・」

「まず基本、じゃからのう」

「でも・・・硬化もあまり変わってないし、強化や空識も・・・」

「不満がある、という事かのう？」

「・・・そう、かもしれない。本当はダイじいと一緒にいられるだけでも

世界一幸せなはずなのに・・・なんでだろう」

「ふふふ、それは皆同じ事じゃ。もっと、もっと、そう言いながら

人間は欲することをやめない。地球の環境が悪化しても、

進化した自然に逆襲され、地上を追われても、変わる事無く

欲し続けておる。本当は足るを知るべきなんじゃがのう」

緊急度” Z ” の依頼

マルクは無意識に腕をさする。

その腕には、一筋の傷跡が残っていた。

「ん、その傷はどうした？」

「先ほど、ミスフィア畑を荒らしてた、〈ザッフル〉を

追い払った時に付いた傷です」

「ほほう、ザッフルの爪に引っかかれて、その程度かね。

マルク、気がつかなくとも、硬化の堅さは強くなっておるよ」

「そうですか？」

「そうじゃとも。ザッフルはB級危険度区域の中で、もっとも腕の力が強い。

パワーアーマーを着けていても、腕を持って行かれるほどじゃ」

「ふーん、そんなに強いようには見えなかったけど・・・」

「そりゃそうじゃろう、動きが少々鈍いからのう。おや？」

ダイじいの端末が着信を告げた。

「なんじゃ、面倒じゃのう」

後ろのポケットから端末を引き抜き、電話に出る。

「お主、運が良いのう。着信拒否が、いつの間にか解除されていたとは」

「ダイマールさん、お久しぶりです。覚えておいでですか？」

「その声は・・・＜マスカド＞じゃな？ 久しぶりじゃのう」

「実は仕事を依頼したいのです。それも緊急の仕事でして」

「こっちも予定が詰まっててのう、他を当たって貰えんか？」

「いや・・・この仕事は、あなたにしか頼めない」

「お主は、国のハンター組織＜イーグルウイング＞に、依頼ができるはずじゃろ？」

「彼らは別件で動いているんでね。ダイマールさん、人命がかかっているんだ」

「ふう、仕方ないのう・・・で、緊急度はいくつじゃ？」

「・・・”Z”だ」

「場所は？」

「キリスタの＜空気製造所＞A-102だ。待ってるよ」

「すぐ行く」

ダイじいは通話を切ると、いくつかの場所に電話し、

それが終わると、マルクを抱きかかえた。

「えっ、何!？」

「マイトを離すでないぞ」

「は？ うわっ！」

ダイじいはマルクを抱えたまま走り始めた。

それも凄いスピードで。

マルクは慌ててマイトを抱きかかえ、

イメージでダイじいと会話をする。

「このまま走ってキリスタに行くつもりですか？」

「いや、まずはダクトへ向かう」

「ダクト？」

「地下への空気取り入れ口じゃよ」

「空気って作ってるんですよね？」

「昔は外気を直接取り込んでいたのじゃ」

「で、そのダクトに何しに？」

「着いてからのお楽しみじゃ」

マルクは薄目を開け、風景が飛ぶように過ぎてゆく光景を眺める。

・・・一体、何キロで走ってるんだろ。

そう思っていると、ダイじいからイメージで答えが返ってきた。

音速は、超えてない程度じゃよ。

ダクト

しばらくして、ダクトに到着した二人。

それは直径十メートルはあろう巨大な縦穴だった。

その穴の上には、金網で塞がれている。

「キリスタに通じるダクトが近くにあって良かったのう」

「いや・・・近くはなかったような」

ダイじいは網の隅にある箱を開け、

中の物をマルクに見せた。

「これは・・・南京錠・・・でしたっけ？」

「ただの南京錠ではないぞ。＜X-1＞という金属で出来ておる」

「何だか凄そうな名前の金属ですね」

「わしにとっては、壊す必要も無いがの」

南京錠は音を立てて勝手に解錠された。

「ええ！？ 何をしたんですか？」

「彼らに解錠させただけじゃよ」

「そんな事まで・・・」

「以前、どうしても解錠しなきゃならん仕事があつてのう、

鍵の仕組みを勉強したもんじゃ。さて、行くかのう」

ダイじいは金網を持ち上げ、側にいたマルクの背中を押す。

「えっ、何、うわああああ・・・」

マルクはどうすることも出来ず、穴に落ちていく。

「甘いのう。”不動”を常日頃使っておれば、この程度で

落ちることはなかったんじゃがの」

そう言うと、自らも金網を閉めつつ、穴へと飛び込んだ。

すると、すぐに壁にしがみつくとマルクを発見し、

負ぶさるようにしがみついた。

「ほっほっほ、やりおるのう」

「・・・これも、修行の内の一つですか？」

「常に油断するな、そういうことじゃ」

「・・・気をつけます」

「では手を離せ。底へと向かうぞ」

マルクが手を離すと、二人は徐々にスピード増して落下する。

入り口が、やがて光の点となり、辺りは闇に包まれた。

・・・これ、着地地点が見えないぞ。

しかも、こんなスピードで落ちてたら、

僕の強化程度じゃ、役に立たないな。

そう考えていると、ダイじいからイメージが伝わってきた。

マルクは空識が苦手じゃからのう。まあ、着地は任せておれ。

苦手な空識により、やっと底を探し当てる。

あと三十メートル程度・・・

その時、体に受ける風が消える。

そして、まるでエレベーターが階に到着したときのような

感覚を味わった。

一気に減速した！？

足が硬い床に触れ、底に到着したことを知った。

ヨーナ

「どうやって減速したんですか？」

「彼らにクッションを作ってもらったんじゃよ」

「なるほど・・・ところで、これからどうするんですか？」

「ダクト管理用の扉がある。探してみい」

マルクは言われたとおり、空識で探ると、

他の壁とは違う突起を感じ取った。

・・・これは取っ手？

試しに取っ手を回してみるが、ウンともスンとも動かない。

「マルク、取っ手を引っ張りながら、右へ三回転、左に二回転じゃ」

「ええ！？ 何とも開けづらいですね・・・」

「外敵に入られた際の、最終防壁じゃからのう」

言われたとおりに回すと、扉が開き、明かりが漏れる。

その扉の向こうには・・・ヘッドホンを付け、

机に突っ伏している老人がいた。

ダイじいは躊躇なくヘッドホンを外し、老人を揺さぶる。

すると、老人はゆっくりと目を開けた。

「ほえ？」

「ヨーナ、わしじゃよ。また会いに来たよ」

「・・・ああ、あんたか。私を叩き起こすのは、あんたしか居らんがのう」

「至急、A-102に行かねばならんのじゃ。

最短コースを教えてくださいか？」

「・・・ああ、わかったよ。ほいさっと・・・」

ヨーナは、写真のように飾っていたプレート端末を凄まじい速さで操作し、

人が通れるギリギリの通路で、最適なコースを割り出した。

「早っ！」

「ふふ、操作に関しては、まだまだ若いもんには負けんわい。

見てみい、このコースが最短じゃろ？」

「さすがじゃな。礼を言うぞ」

「また何か、旨いもんでも送って欲しいのう」

「勿論じゃよ。さて、行くぞマルク」

「さよなら、ヨーナさん。あ・・・ヘッドホンで何を聴いてたんです？」

「おお、これか。＜ミツキ・サムヨ＞の曲じゃよ。

死んで生き返る程の、素晴らしい曲を作るんじゃ」

「かなり表現がオーバーですね・・・」

「そうかね？ ま、いっぺん聴いてみい」

「わかりました」

そう話している間にも、ダイじいは天井の換気扇を外し、入り口を確保している。

そして二人は、ダクトに飛び込み、コースをたどり始めた。

しばらく進んだとき、ダクトの外で破裂音が響く。

・・・バーニングガンの音に似てるな。でもちょっとだけ違う・・・

ダクトの外は一体、どこなんだろう。

そう思いながらも、先行するダイじいに遅れまいと追従する。

エアダクトから、管理用の通路へ、次から次へとボルトが外され、

通り抜けた後から蓋がされ、締めなおされる。

その一連の動作を、彼らを操り、自動で行っていた。

目的地には、十分もかからず到着。

だが、A-102の扉の前には、人がバラバラにされ、

無造作に転がっていた。

ニガミの木

「・・・手遅れ、じゃったのう」

「まさか・・・あのマスカドさんがバラバラに・・・」

「そんな訳なからう。気づかんか？」

「・・・あ、血が流れてないですね」

「ロボットじゃよ。彼は自ら危険な場所には行かん」

頭上から声が響く。

「遅かったね、奴らは一分前に到着した。

すぐに奴を止めないと、多数の犠牲者が出る」

見ると、カメラを装備したロボットが、天井にへばり付いている。

「詳しく聞きたいところじゃが、そんな猶予は無さそうじゃな」

「その通りだ」

「・・・では行くぞ」

「はい！」

意を決し、扉を開けると、青々と茂った森林が、そこにはあった。

「地下に森が・・・」

「驚いてないで、急ぐぞ」

そう言うと、ダイじいは一直線に走り始める。

・・・敵は二体、一体は四足歩行する猛獣。

もう一体は、人型かのう。恐らくは森の民・・・

人工的に作られた森は、形の違う物体がよくわかる。

その頃・・・森に入り込んだ人型の生物は、持ち込んだ植物を燃やそうと、

周囲に生えている木々を切り倒していた。

その切り倒した木を井形に組み上げ、一番下の木に手を当てる。

すると、生の木が勢いよく燃え始めた。

手を当てただけ・・・のように見えるが、実際は超高速で手をすり合わせ、

火を起こしたに過ぎない。

・・・<ニガミの木>は高温でなければ燃えることはない。

だがここは空気が良いし、この木も燃えやすいようだ。

すぐにニガミが燃える温度になるな・・・む？ 何者かが入ってきたな。

人型の生物は、連れてきた猛獣に指示し、邪魔者の排除を命じる。

猛獣は、あっという間にダイじい達を発見し、攻撃を仕掛けた。

「マルク、この猛獣は任せた。わしは元凶を断たねばならん」

「了解しました」

「・・・強いぞ。油断なく、全力で当たれ」

「はい！」

跳んで噛み付いてきた猛獣に右ストレートをお見舞いする。

が、猛獣は体をひねり、後方に着地した。

こうして、マルク対猛獣の、火蓋は切って落とされた。

ダイガリア

対峙するマルクと猛獣・・・

金色に赤が混じった毛色、そして縞々・・・

A級危険度の猛獣、〈ダイガリア〉に間違いない。

こいつは確か、パワー重視だったはず。

ダイガリアがマルクに向かって飛び出す！

元いた地面が、爆発したように弾け跳ぶ！

は、速っ！！

一瞬たじろいだマルクだったが、心速と強化の力で

すばやく回避する。

危ない・・・瞬発力が伊達じゃない・・・

掴まれたら最後だな。

その後、幾度もダイガリアは飛び掛ってきたが、

その度にマルクは飛び退くしかなかった。

力の圧倒的な差・・・

うかつに近づけない、ならば・・・

マルクはイメージで作った”手”を、ダイガリアに向かって飛ばす。

勝負は一瞬。

ダイガリアの前足を捕まえると同時に飛び出し、

先鋭で鋭くした手刀を心臓へ叩き込む！

が、異変に気づいたダイガリアは、なんと、後ろ足を蹴り上げ、

前方へと倒れこむ。

「予定変更、背骨をへし折る！！」

硬化と強化を、体の動きを意識しながら、ピンポイントに集中させ、

現時点で最大のパンチ繰り出した！

かくして、マルクの渾身のパンチは背骨をへし折った・・・

と思われたが、様子がおかしい。

まさか・・・自ら背骨を反らせて、ショックを吸収した！？

そう思った刹那、マルクの肩に強烈な一撃が襲う。

そのままひっくり返ったダイガリアの後ろ足に蹴られたのだ。

マルクは数十メートル吹っ飛ばされ、何とか体勢を立て直し、

立ったままの姿勢で凌いだ。

以前なら・・・確実に肩は跡形なく吹っ飛ばされていた。

しかし・・・左肩はもう、使い物にならない。

ダイガリアはすぐさま起き上がり、マルクが完全に意識を

取り戻す前に接近し、太ももにかじりつく！

「うっ！ ああああっ！ こいつ！」

太ももからは、おびただしい血が噴出し、

ミシミシと骨が軋んでいる。

マルクはダイガリアの目に指を突き刺す！

「ゴアァァ！」

悲鳴にも似た雄たけびを上げ、いったんマルクから離れる。

・・・ぐぐ、目は、つぶれたはず・・・

だが、ダイガリアの攻撃は、止む事がなかった。

森の民

「ほほう、ニガミの木か。お主らは、そう呼んでおるんじゃろ？ 森の民よ。

燃やせば猛毒な煙が出る・・・なるほどのう」

森の民と呼ばれた、毛むくじらの生物が睨む。

「エア・ツリーを燃やしただけでは、こんな高い温度にはならん。

<ヒノミ>を入れたな・・・準備完了と、言うわけじゃ」

炎の色を見れば、大体の温度はわかる。

ニガミの木が燃え始める温度に達したことは間違いない。

森の民は、手に持っていた残りのヒノミを炎に投げ込み、

背負っていたニガミの木を放り込んだ！！

が、ニガミの木は炎に入る瞬間に弾き飛ばされた。

森の民はニガミの木を取りに行こうとしたが、目前に迫っている

ダイじいを先に始末することにした。

それは何とすることも無い、指をそろえ、敵に向かって

突き出すだけの手刀でしかない。

が、森の民ともなれば、それはミサイルに匹敵する。

そう・・・どんな獲物も、俺の手刀を受ければ、血肉がはじけ飛ぶ。

勝利を確信し、がら空きな胸元に手刀を突き立てる！！

なに！？ どういう事だ！

確かに手刀は、ダイじいの胸元に突き立てられた。

しかし、血肉が吹き飛ぶどころか、傷一つ付いていない。

「・・・お主、若いのう」

ダイじいは、突き出されている腕を引っ張りながら、

もう片方の腕で森の民の頭を強打した。

いままで味わったことが無い程の衝撃で

意識を吹っ飛ばされ、仰向けに転がる。

すかさずダイじいは馬乗りになり、首を押さえつけた。

「この程度で死ぬ、お主らでは無かろう」

森の民は意識を取り戻し、ダイじいを睨みつける。

「負けを認めろ。わしの質問に答えるんじゃ」

ダイじいの手は、徐々に首を締め上げてゆく。

負けて、なるものか・・・！

森の民は様々な方法でもがきまくった。

だが、いくら最大の力を込めても、形勢を逆転することも無く、

首だけが、じわじわと締め上げられていく。

ぐがっ・・・重い・・・これ以上は・・・

お許し下さい、バズアル・・・

ダイじいの意識に、森の民から送られたイメージが響き渡る。

負けだ！ 俺の負けだ！

原因と結果

首を離された森の民は、ゼエゼエと肩で息をした。

そしてイメージによってダイじいの質問に答えてゆく。

言葉にすれば、こんな会話になる。

「名は？」

「アバルだ」

「森の意思に反する者は何人いる？」

「わからない。だが、全世界の森の民にイメージが

伝えられている。少なくともバズアルを支持する者は

反することになる」

バズアルか・・・奴は、反森の意思筆頭じゃったのう・・・

ダイじいは以前、森の民の集落を訪れたことがある。

その時に、森の意思に従う〈アクセス〉と、反対するバズアルに

出会っていた。

「・・・アクセスは元気か？」

「彼は死んだ」

「何？ 彼は群を抜いて強かったはずじゃぞ？」

「彼は寝込みを襲われた。誰がやったかはわからない。

複数の民が、寄って集って彼をバラバラにした」

「愚かな・・・森の民ともあろう者が・・・誇りを無くしたのか！」

「私も残念に思う。しかし、事は切迫している。

先にけしかけたのはヒトの方だ。我々の聖域を侵した。

そして〈ウマミ〉をほとんど持ち去った」

「噂は聞いておるが・・・まさかガセネタではなかったのか・・・

ヒトの世界では、三大美味の一つと言われているのう、

一粒で億単位の金が動く。じゃが・・・その時、

アクセスは何をしておったのじゃ？」

「彼は、何もするな、と言ったそうだ」

「彼らしいのう。じゃが、ヒトの目から隠す事など、

容易にできたじゃろうに……」

「無論、常に目くらましされている。だが、聖域を荒らしたヒトの中に、

目くらましは通用しない奴がいたようだ」

ダイじいは思い当たる節がある。

ザン・イバーラ……彼ならば目くらましの効果は無いじゃろうな。

「申し訳ない事をしたのう。非は我々にある。

今更謝っても、何の解決にもならないだろう。

それは解っておる。ヒトは、自らの過ちで犠牲を

払うことになるじゃろう……」

「俺はどうすればいい？」

「アバルよ、お主は森の意志に従い、正しき森の民として生きよ」

「……わかった。あんたが誰かに命を奪われるまで、

俺は森の意思と共に歩もう。精々気をつける事だ」

「心配無用じゃよ。わしは誰にも殺されん」

「それは過信ではないか？」

「いや、わしの最後は決められておってのう。それが何時になるかは

わからんが、少なくとも誰かに殺される事は無い」

「そうか、では俺は行く」

「達者でろう」

アバルはニガミの木を背負うと、空気製造所を後にした。

「さて・・・弟子の方が気がかりじゃの」

ダイじいはマルクの元へと歩き始めた。

執拗な攻撃

マルクはボロボロになっていた。

目を潰されたダイガリアは、匂いを頼りに

執拗にマルクを攻撃し続けていた。

辺り一面、血の色で染まってはいたが、

まだ何とか意識は保っている。

だが・・・これ以上は無理だ・・・

すでに立ち上がれないマルクには、防御で精一杯だった。

再びダイガリアは近づき、顔の近くに自らの顔を寄せる。

頭に嘔みつくつもりか？

いや、こいつは・・・

ダイガリアの頭が引っ込められたその時、

首に激しい衝撃を受けた。

ぐぐぐ、こいつ、僕の喉を噛みちぎろうとしている！

そんな事はさせない！

「ああああっ！！」

マルクの胸から血が噴き出す。

ダイガリアは首に噛みつきながら、爪で胸を掻きむしっていた。

た、たったこれだけの戦いで・・・僕の弱点を見抜いたのか。

首をより硬くすれば、胸ががら空きになる・・・

喉を食いちぎられるのが先か、

心臓をえぐり出されるのが先か。

どちらを選択しても、死ぬことに変わらない。

マルクは余分な力を抜き、精神を集中させる。

・・・まだ、可能性は残されているはず。

残された時間は少ない。

彼らを操って吹き飛ばす・・・尖鋭で切り刻む・・・

いずれにしても急場しのぎだ。

それに、今、硬化が緩んでしまえば、一瞬であの世行き。

一瞬の時間で様々なことを考えていたら、

目から一筋の涙が流れた。

「・・・”力”が、欲しいかい？」

「はい。もちろん・・・」

「君は、もう力を持っているはずだけどね」

「えっ？」

・・・誰と話しているんだ、僕は・・・

声がした方に視線をずらすと、木により掛かるようにして、

こちらを見つめる少年の姿があった。

光る巨人

「やあ、会うのは二回目だね」

「僕は君に会ったことなんて無いよ」

「子供の頃だったからね。忘れても仕方ないか」

「いや、僕が子供だったら、君は生まれてないんじゃない？」

「僕は、生まれることも無ければ、死ぬことも無い。

”森そのもの”だからね・・・」

「えーと・・・何言ってるのかさっぱり・・・」

「あまり時間は無いんだろ？ だったら手短かに話そう。

君が子供の頃に付けた”枷”を外そう。

今の君にはもう、必要ない・・・」

すると、マルクの体は光り輝き、力が満ちあふれてきた。

はっと気がつくと、少年の姿はどこにもなかった。

夢・・・？

体は光っていない。

だが、力は満ちあふれている・・・

首に噛みついてたダイガリアに、焦りの色が浮かぶ。

何だ？ 首が硬くなって・・・噛めない・・・

何度も噛む位置を変えても、まるで岩をかじっているようだ・・・

マルクはというと、ぼんやりとしたまま、

驚きのあまり、何も出来ずにいた。

”光る巨人”をイメージしてごらん。

と、誰かがささやく。

その直後、マルクの側に、巨大な人形の光が現れ、

あきらめずに噛みつこうとしていたダイガリアを、

いとも簡単に吹っ飛ばした！

何だろう、これ・・・

ダイガリアは、全身ぼろぼろになりながら、

再びマルクに近づいてきた。

「君はもう、僕を殺せないよ・・・」

光る巨人に叩き伏せられ、身動きが取れなくなった

ダイガリアに対して、ぼつりと呟く。

彼の命運は、僕の思い一つで決まる。

さて、どうしようかな・・・

解けた謎

ダイじいは空識によって、小さな動物を確認する。

「おや、これはマイトじゃな」

すぐに必死に走ってくるマイトをつかみ上げ、

イメージを受け取る。

「なるほどのう、これはまずい事になった。

全速力で向かうぞ」

「キュ！」

こうしてダイじいは、マルクの元へと向かい、

巨人を目撃する事となる。

「何じゃ、あれは・・・」

驚いたダイじいだったが、すぐに納得した。

「これで、ようやく謎が解けたわい」

ダイじいは微笑みながらマルクへと近づく。

マルクはと言うと、ダイガリアをどうするか考えていた。

このまま、ひねり潰してしまおうか。

殺されそうになった、お返しに。

だが、ふと気付いた。

今のダイガリアは、さっきまでの僕みたいだ。

強大な力にねじ伏せられ、何も出来ずに死を待つだけ……

そうか、わかった。なぜ今まで、枷を付けられていたのか。

”弱さ”を知るためだったんだ。

背後から肩を叩かれ、振り返るマルク。

「成長したのう」

「ダイじい……」

「ダイガリアは離してやれ。もう、ろくに動くこともできん。

後はマスカドが何とかするじゃろ」

「殺されるんですかね……」

「そうなるじゃろうな。自業自得じゃよ」

「……少し、かわいそうですね」

「ほう、殺されそうになったのに、優しいのう。

どれ、傷を見せてみい」

ダイじいはマルクの傷を診察する。

ほとんど、すでに血は止まり、かさぶたが出来ている。

「・・・わしはのう、以前から不思議じゃった。

カルサーからの報告があった通り、お主は傷の治りが早い」

「そうですね・・・子供の頃からそうでした」

「わしも傷の治りは早いんじゃ。この意味、わかるかのう？」

「・・・エネルギー生命体の生息数が多いから、ですかね」

「そうじゃ。このことからしても、お主とわしは同規模の

生息数だとも言えるのう。じゃが・・・」

「ああ、僕の力が何故弱かったか、ずっと謎だった、と」

「じゃがもう、謎は解けた。何らかの制約があり、

お主が操れる数が制限されとったのじゃ」

「彼は” 枷 ” だと言っていましたね」

「彼？」

「僕に枷を付け、そしてさっき取り外してくれた少年です。

彼は自分のことを” 森そのもの ” と言っていましたけど」

「ふうむ・・・」

ダイじいは、あご髭をさする。

「おそらくは、森の民の言う、” 森の意思 ” という存在かもしれんのう」

「森の意思？ それに森の民って・・・？」

「森の民とは、先ほどわしが戦った相手じゃ。おそらくは

猿の進化した姿なんじゃろう。昔は森の意思に従って

生活しておったが、今は反乱が起きてのう。

ま、その原因は我々にあるんじゃが……」

「森の民……」

「で、森の意思じゃが……何とも形容しがたい。

実際に話したわけでもないし……だがまあ、一つ言うなれば、

全世界の森は、一つの意味によって方向付けられておる」

「何とも難しい話ですね」

「より詳しい話は後じゃ。お主を医者に連れて行かねば」

マルクは、ぎくりとした。

また、あの中に入るのか……

「仕方なかろう。お主は体の構造をちゃんと理解しておらんのじゃろ？」

そのままじゃと、折れた骨が変にくっついたりしてしまう。

その早い治癒力が、あだになってしまうぞ」

「えっ？ じゃあ、体の仕組みを知れば、ちゃんと元に戻るんですか？」

「それには、体の中を知る方法と、医学書が必要じゃの。

課題が増えたのう」

「……何とも、大変な」

こうして大量殺人を防いだダイじいとマルクだったが、

これはまだ……序章に過ぎなかった。

第5章 サガスの力

グツクル

「ここか・・・えーっと、何て書いてあるんだ？ これ・・・」

カルサーは、エンドウが送ってきた地図を頼りに

ここまでたどり着いた。

本当にここで合ってるのか？

あ、確か翻訳ソフトがあったはずだな・・・

端末のカメラで、謎の文字を写す。

すると、訳が隣に表示された。

「これ日本語か。イ・ザ・カ・ヤ？ 意味は酒と料理の店か」

意を決して扉を開ける。

薄暗い店内には、一人の店員と思しき男性が

カウンターの向こうに立っている。

「イラッシャイマセ！」

おそらく日本語であろう言葉で怒鳴られる。

「えっ！？ 何？」

「あー、ようこそって言ったんだ」

「えーっと、こんにちは」

「開店前なんだがな、まーいいだろう。」

今日のオススメは＜エビーカ＞のフライと、＜モショノショ＞の糠漬けだ」

「いや、別に食べに来たわけじゃなくて・・・」

「そうかそうか、＜ジャッフルビール＞なら、すぐに出せるぜ」

「・・・飲みに来たわけでも」

「じゃあ、何しに来た？」

「俺も何しにここへ行かされたのかわからん」

「行かされた？」

「エンドゥって知ってる？ そいつに行けて言われてね」

「エンドゥ？ もちろん知ってるよ！ ウチの常連だったからな。」

するってーと・・・あんたが噂のカルサーか？」

「そうです」

「だったら話が早い、早速腕前を見せて貰おうか」

「腕前？」

「あんた、銃の腕が半端ないって話だろ？ おっと、まだ名乗ってなかったな。」

俺の名は＜グツクル＞だ。よろしく」

グツクルはそう言うと、棚に並べてある瓶の一つを、ぐるっと回す。

すると、カウンターが前にせり出し、今まで隠れていた場所から

階段が出現した。

「驚いたな・・・隠し階段か」

「さあさあ、降りてくれ」

「・・・店はどーするんだ？」

「今日はもう閉店さ」

階段を降りていると、部屋に明かりが点り、

射撃場が姿を現す。

「へえー、本格的だな。でも、この程度じゃあ、

俺の腕は試せないと思うがね」

「そりゃそうだ！ カルサーにやってもらいたいものは、隣の部屋にある。

難易度 S 級の射撃ゲームさ」

グツクルが側にあったレバーを上げると、

カウンターが再び動き出し、入り口を封じた。

「これで音は漏れないぜ。何の気兼ねも無く撃ちまくれる」

カルサーが案内された先には、標的が一つだけある、

だだっ広い部屋だった。

「ほほう、これが・・・」

「超高速、ランダム移動マシーン。名付けて〈ハンター・クラッシャー〉・・・

今まで何人ものハンターを涙の海に沈めたことか・・・」

ハンター・クラッシャー

ルールは極めて簡単。動く標的の下にぶら下がっている、

ボールを五つ割ること。

「こんな、旧式の銃なんて、初めて扱うよ」

「強化銃と違って、多少反動はあるがな。

扱いは一緒さ。引き金を引けば弾が出る」

「ようし、起動させてくれ」

「では・・・スタート！！」

グツクルがボタンを押すと標的は、けたたましい音を立て、

目にも止まらぬスピードで動き始めた！

すごい動きだ。

標的自体は天井のマス目に沿って動いているだけだが、

的は回転したり左右に揺れたりと、安定しない。

そもそも、こんな超高速、普通の人間には全く見えないはず・・・

だがまあ、俺には関係ないけど。

カルサーは、無造作に銃を構え、引き金を五回引く。

俺の得意分野である”必中”・・・

この仕組みを自分なりに解き明かそうとした事がある。

空識によって、対象の位置を知り、心速によって

体や腕、撃つタイミングを微妙にずらす事により、確実に当てる。

ただ、それは相手が止まっていればの話。

射撃場にボールが破裂する音が五回響いた。

動く対象にまで百発百中に当てる場合、相手の行動を予測するか、

弾道を変えるか、或いは予知でも出来ない限り不可能・・・

グツクルが嘩然としている中、カルサーはゆっくりと銃を下ろした。

ハンター・クラッシャーは動きを止め、破裂したボールを

白日の下にさらす。

「・・・いや、恐れ入った！ やっと、俺の武器を渡せる奴に出会えた・・・」

「武器？」

「そうだ。こっちに来てみる、俺の作った

最新最強のバーニングガンを見せてやる」

射撃場の隣にあった部屋の中には机があり、

たくさんの工具や部品が並べられている中、

中央には見慣れた武器が置かれている。

「見た感じ、普通のバーニングガンだが・・・」

「バーニングガンは、俺が<ストヴィダ>にいた頃生み出した武器でね。

本来はもっと強力な武器だったが、上層部が毎年金を生み出したいが為に

性能の悪いバーニングガン売り出しやがった。しかもロケットと手を組んで、

お互い棲み分けを図ったのさ。そのことを知った俺は、資料を燃やし、

プロトタイプをぶっ壊して会社を辞めた」

「そんな事があったとは・・・この武器は、俺を夢に導いてくれた。

この武器が無かったら、俺はハンターになっていなかったかもしれん・・・」

「そう言ってくれると、あの駄作も世に出た意味があるってもんだな。

さあ、触ってみな」

カルサーは、初めてバーニングガンを持った時のことを思い出しながら手に取った。

新兵器

「電源を入れてみな。粗悪品みたいに、変な音はしないぜ」

言われたとおりにスイッチを入れる。

一瞬振動した程度で、いつもの異音は聞こえない。

「静かだ・・・今までの異音は何だったんだ？」

「あの粗悪品はな、射出する動力に圧縮空気を使ってるのさ。

つまり、空気を圧縮してる音が聞こえてたってこと。

それに引き替え、このバーニングガンは、強化銃の技術を利用している。

僅かなエネルギーで一瞬に伸びる、爆伸材を使ってるのさ」

「すごいねえ・・・是非とも一度、試してみたいね」

「では、標的を用意するよ」

用意されたのは、ただの金属板。

「何だい、この板は」

「＜X-5＞っていう金属さ。試しに今まで使ってたバーニングガンで撃ってみな」

取り付けられた金属目がけて、今までのバーニングガンで撃ち放つ。

すると、耳元でシンバルでも鳴らされたかのような、強烈な音が響き渡った。

「驚いた・・・傷一つ付かない。いや、少しへこんでいる程度だ」

「次はこいつで撃ってみろ」

渡されたバーニングガンで再び撃ち放つ。

今度は強烈な音はせず、穴が空いた。

「すごい・・・同じ弾丸を使ってるのに・・・」

「スピードが段違いだからだよ。当社比二倍の速度、なんてな」

「これ、売って下さい！いくらです!？」

「君にくれるよ」

「えっ、本当にいいんですか？」

「もちろん。君に使ってもらえれば、そいつも幸せだろう」

「・・・わかりました。使わせてもらいますよ」

「それに、俺が作った武器を、ダイマール氏の弟子が使ってるなんて、

俺の誇りになるだろ？」

「・・・ありがとうございます。大事に使います」

「おいおい、大事になんて使わないでくれよ。」

そいつをぶっ壊す気で使ってくれなきゃ困るぜ」

グツクルは親指を立て、ニヤッと笑った。

サガスの依頼

カルサーの端末が着信を告げる。

「おや、サガスから電話だな。もしもし？」

「ああ、良かった。今、大丈夫ですか？」

「ん、何だか慌ててるな。今？ 問題ないよ」

「出会って間もないのに、こんな話をするのもおこがましいんですけど・・・」

「水くさいなあー！ 今のところ予定無いし。何でも言ってくれよ」

「ええっと、その・・・実は今、B級危険地区に、ある山菜を

採取に生きたいんですが、リーブ社のライセンス持ちが出払っちゃってて・・・」

「ああ、そうか、俺と一緒に行けば、ライセンス無しでも入れる、と」

「ええ、カルサーさんはA級取ったんでしたよね。」

「だったら全く問題なく自分も入れます」

「場所は目星付いてるんだろ？」

「まあ、有名な山菜ですからね、バッチリです」

「よーし、詳しい場所はメールしといてくれ」

「わかりました。助かります」

「お礼はいいよ、君のことをもう少し知りたいとも思ってたしね」

「はい？」

「あ、いや、こっちの話」

「では、お待ちしております！」

電話を切り、しばらくして詳細な地図が送られてきた。

「どれどれ、場所は・・・＜サンザイ地区＞の＜ヤノコノ山＞か」

「ヤノコノって言やあ、通称”キノコ山”だろ。

だとすると、狙いはアレしか無えな」

「”延命薬”の材料か・・・確か＜ナガル茸＞だったな」

「探すのは難しいぜ？ 噂じゃあ、奇跡でも起こらない限り、まず手に入らん」

「まあ、頑張ってみるさ」

「そいつを思う存分使う、良いチャンスだな」

「どうだかな。じゃあグツクルさん、行ってくる」

「おう。他に、良い食材があったら頼むよ」

「了解！」

カルサーは店を出ると、最短コースを通過して駅へと行き、

二時間後、ヤノコノ山のゲートへとたどり着いた。

「待たせたね」

「いえ、とんでもない！ では、行きましょうか」

ライセンスを見せ、ゲートを通り過ぎる。

ヤノコノ山は、木の間隔がまばらであるが、

森の中はとても薄暗い。

「これが・・・＜ツナグモ＞の巣か」

太いロープのような糸が、森の木々を縦横無尽に覆っている。

「この辺りは強い風が吹くので、折れないように

ツナグモと共存してるんですね」

「風から守る代わりに樹液を提供しているわけだな・・・

で、肝心のキノコはどの辺りだ？」

「あ、探している山菜がキノコだって、わかっちゃいました？

えーっと、今の時期からすると、中腹辺りでしょうね」

「ようし、ナガル茸、待ってるよ！ あ、後、美味しそうな山菜も探してくれる？」

「わかりました！ そういう事ならお任せ下さい」

山菜の宝庫

一時間後・・・カルサーが用意していたバッグには、

山菜が山のように積まれていた。

「まさか、採れ過ぎだろ！」

「・・・カルサーさん、採り過ぎですよ」

「・・・すまん、ついはいやいってしまった。今まで何度も森には入っているが、

ここまで大量に採れた事は無かったぞ・・・」

「それはカルサーさんが、よく見てないだけでしょ」

「さすがだなあ、サガス！」

「いえ、それほどでも・・・あ、もしかして」

サガスが目の前にあった植物の葉をどけると、

その下には一本のキノコが生えていた。

「＜アロヨ茸＞ですね。別名”ほろ酔い茸”

酒飲みにはたまらない、絶品らしいです」

「アルコールでも生産してるのか？」

「いや、一種の毒ですけど、アルコールを摂取した時と同じ症状が出ます。

酒に酔わない人でも、一口で良い感じに酔えるそうです」

「こりゃあいい、頂こう」

「・・・もう入らないのでは？」

「心配無用さ。予備にもう一つ持ってきてある」

親指大の塊を地面に転がすと、辺りの湿気を吸って徐々に膨らみ、

今、カルサーが持っているのと同じ大きさバッグに姿を変えた。

「へえ、持ち運びが楽ですね」

「多分、リーブ社仕様でもあるはずだぞ」

「今度支給してもらおうっと」

二人は山菜を採りながら、さらに上を目指す。

そしてさらに一時間・・・

「ふうー・・・休み休み登ってますけど、藪が邪魔過ぎて

さうとう体力使いますね・・・」

「ん、そうか？」

カルサーは採ったばかりの<サイテンベリー>を頬張りながら答える。

「そもそも・・・そんなに荷物を担ぎながら、よく歩けますね。

さすが、ダイマール氏の弟子ですね」

「ん、俺の素性がわかったんだ」

「ええ、リーブ社で名前を出したら、すぐに食いついてきまして・・・

何が何でも縁を切るなよ！ と、脅されました」

「ははは、なんだそりゃ」

「何とかつなぎ止めておけば、何かの時に役に立つとでも思ったんでしょう」

「ま、そうだろうな。こっちとしては君の才能に興味があるだけなんだけどな」

「え？ 今何て？」

丁度上空に、けたたましく鳴く鳥が通り過ぎた為、

話の後半部分は聞き取れなかった。

「・・・いや、何でも無いさ。それより、例のキノコはまだなのか？」

「えーと、あと三十分もあれば、到着するでしょう」

「よーし、後一踏ん張りだな」

カルサーは、パンパンに膨れ上がった、極上の荷物を二つ背負い、

軽快に歩き始めた。

・・・さっき、何て言ったんだろう。

しかし、カルサーさんは凄いなあ・・・同じ人間とは思えないよ。

これがA級ライセンスを持つハンターなんだろうか。

サガスは、羨望の眼差しでカルサーを見ていた。

ナガルモドキ

三十分後、ナガル茸があるであろう場所までたどり着いた。

「こ、これは・・・」

「何なの!？」

二人の見渡す限り、大量のナガル茸が生い茂っていた。

「逆の奇跡でも起こったのか!? 難易度が高いはずなんだがな……」

「こんな事は今まで無いですよ! これって凄い発見なんじゃあ……」

「こりゃあー……大もうけ。って、本当にアリ?」

「し、しかし……どこからどう見ても……あ、もしかすると」

サガスは足下にあったキノコをちぎり、裂いて匂いを確認し、

片割れを口の中に入れる。

「……やられた。〈ナガルモドキ〉だ、これ」

「もどき?」

「ええ。シュラブ湿原名産の甘いキノコですよ。」

通称〈シュラブ茸〉とも、ナガルモドキとも呼ばれています」

カルサーも手近にあったキノコを口に放り込んでみる。

「驚いた……なかなか旨いキノコだな」

「熱を通すと、もっと甘くなりますよ」

「ま、これはこれでいいけど……肝心のナガル茸はどこだ?」

「この分じゃあ、ナガルモドキに圧倒されちゃって

出てない可能性も……」

「ふーむ……サガス、データーではなく、君自身の直感ではどう思う?」

「……あると思います。でも、でもですよ? あったとしてもどうやって

探すつもりです？ 全てを採取して味を比べるわけにもいかないでしょう」

「簡単だよ。全体を見ているからいけないのさ。いくつかのエリアに

区切って探すんだ」

「・・・直感で、ですか？」

「うーん、どうするかなー・・・」

カルサーは迷っていた。

真実を教えるべきか、否か。

・・・いや、まだ早い。

見極めてからでも遅くは無い。

「そうだな、こんなのはどうだ？」

端末を取り出すと、地図を表示させ、

そこにラインツールを使ってマス目を描く。

「まずは適当に分割して・・・よし、AからDの中で、

どれにナガル茸があると思う？」

「結局、僕の直感ですか・・・責任重いなあ」

「気楽に行けよ、これはゲームさ。ほら、目を閉じてみろ」

「わかりましたよ・・・」

サガスは目を閉じ、直感を呼び覚ます。

・・・何だか久々だな。子供の頃はよく、

目を閉じて色々想像していたな。

しばらくすると、目を閉じているのにもかかわらず、

目の前に大量のキノコが広がっていた。

そこには、無造作に線が引かれ、四つに分割されている。

こ、これは・・・

進化人、確定

まるで地図の中に入ったみたいだ・・・

辺りを見渡すと、Bの枠の中に、一際輝くキノコがいくつか生えている。

あれか。

サガスは光るキノコの方へと歩き出す。

「ん、どこに行くんだ？」

カルサーの問いに返事もせず、キノコを踏みつけながら、どんどん進む。

何だろう、この感じは・・・

目を開いて歩いているみたいだ。

光るキノコは目の前にある。

そこに手を差し出し、その全てを刈り取った。

目を開けると・・・手の中には五つのキノコがあった。

もちろん光ってないが、これは・・・

キノコの傘を一部切り取り、口に含む。

「うわ！ 苦ー！！！！ でも、当たりだー！」

キノコの中で歓喜の踊りをしているサガスをよそに、

カルサーは微笑んでいた。

確かにイメージを生み出す手伝いはしたが、ここまでとは・・・

おそらく情報の詰め込みすぎで、それに頼り過ぎていた。

探す力が衰えていたのはそのためだったんだ。

「ふふっ、進化人確定だな」

「へっ？ 何ですか、それは」

「君の、”対象物を探す力”や、俺の”必中”など、

今までの人間には無い力を持った人のことだ」

「僕が・・・進化人だと？」

「サガス、君は・・・無くした物は無いんじゃないかな？」

「・・・あ、弟の<キザム>が、よくなくし物をしてました。

僕がすぐに探し出してたけど」

「そうだ。普通の人では、無くした物を探すのは、非常に困難だ。

すぐに出てくる事なんて、希な事だよ」

「・・・僕はずっと、なくし物をする人を不思議がってた。

何ですぐに見つけれられないのかと思って・・・

そうか、探す力が、僕にはあったんだ」

「進化人全てに共通するところは、その力の源に、

ある生命体が係わっているって事だ」

カルサーは、包み隠さずに秘密を打ち明けた。

サガスは最初、疑い深く聴いていたが、話が終わる頃には

すっかりのめり込んでいた。

「すごい！なぜ学校で教えてくれないんですか、そんな大事なことを」

「一般には知られていないんだ。これは、進化人のみに教えられてきた

秘伝なんだよ」

「そうか・・・勿体ないですね」

「リープ社は、長期休暇ができるのか？できるんだったら、

ダイじいの元で色々教えて貰うといい」

「えっ！？ダイじいって・・・ダイマール氏ですか！？ええーっと・・・

どうだろうなー、結構忙しいですからね」

「あ、ダイじいの名前は出すなよ？ そうだな、基礎をみっちり学ぶなら、

最低一年は必要だ」

「いい一年！？とてもそんな休暇は無理だぁー・・・」

「じゃあ、いっそのこと、リープ辞めちゃう？」

「えええー！！それはちょっと・・・」

・・・まー、辞めるって言っても、手放さないとは思うがな。

「だったら、休みの度に会いに行ったらどうだ？」

「電車賃は馬鹿にならないが……」

「そうですね、それなら何とか……」

「よし、決まりだな。俺からダイじいには連絡しておく。」

後は……マルクが端末持っていれば何とかなるんだがなあ」

「それなら兄に聞いてみます。マルクさんとは友達のはずだから」

「えっ！？ サガス、マルクと知り合いか？」

「知り合いも何も、同じ町に住んでるんですから。」

「家族ぐるみでおつきあいしてますよ」

「やれやれ……驚いたね、こりゃ。同じ町から二人も進化人が出たか」

カルサーは、疑問に思いながら、サガスは期待を胸に、山を下りていった……

サルマルコーン

外の風景が夕焼けに染まる頃、

カルサーはグツクルの店へと到着した。

「お土産だよ」

カウンターに二つのバッグをドサッと置く。

「驚いたねえ、こんなに採れたか……どれどれ？」

グツクルはバッグを広げ、食材の整理を始めた。

「ほう、ほろ酔い茸か、こりゃあいい。おっ、＜ネグリング草＞じゃねえか！

こいつは油で炒めると、ビールに合うんだ」

「こんなに大量にあると、消費しきれないかな」

「いや、ウチは＜食材保管庫＞完備だからな。一週間程度なら、

新鮮なままで保管できるぜ」

「そりゃ、凄いな」

「まあ、今日はおごりだ。じゃんじゃん食って飲んでいってくれや」

「おっ、ありがとう。じゃ、遠慮無く」

しばらくして店の扉が、ガラガラっと開かれる。

「イラッシャイマセ！！ あ、何だよ、あんたか」

「何だって事は無いだろ？ ちょっと食材を探しててさ」

「ほう、今なら色々揃ってるぜ」

「そうかな？ 私が探してるのは、＜サルマルコーン＞だぞ？」

「・・・おいおい、先週までならあったぞ」

「タッチの差か。今、市場に行ってきたんだが、入ってなかったよ」

「まあ、そうだろう。唯一の生産地で、長雨によって病気が発生したらしい。

ほぼ壊滅じゃないか？」

「そうか・・・困ったなー・・・」

「どうしても必要なのか？ だったら、コイツに頼みな」

エビーカと＜パラキス＞の Pasta を食べていたカルサーは、

思わず咳き込んだ。

「・・・食事に夢中で、話なんて聞いてなかったぞ・・・」

「サルマルコーンが欲しいんだってよ」

「＜サルマル＞・・・三大秘境の一つかよ！」

「あんたなら余裕だろ？」

「うーん、秘境の中では、もっとも優しいが・・・」

「ただし、値は張るぜ。なんつってコイツは、ダイじいさんの弟子だからな」

「へえ、あのダイマール氏のね・・・よし、いくら欲しい？」

「んーっと、どうするかな・・・」

サルマルか・・・キリスタの高速鉄道を使っても二日はかかるな。

「ちなみに、何日までに欲しいんだ？」

「そうですね、一週間以内」

「うわ、ギリギリだな。本当なら半月ほど欲しい所だが・・・

値が張るぞ？」

「今回ばかりは赤字覚悟さ。それほど大事な客でね」

「なら・・・百は欲しい所だな」

「ひ、百！？サルマルコーンの価格は一本五万程度ですよ・・・」

「何も一本だけとは言ってないし、全てコミコミなら安い方だぜ？」

「・・・他にも食材を頼めます？」

「まあ、難易度が低ければいいけど。多分コーンだけで手一杯だろうし」

「・・・よし、契約成立。荷物はここに持ってきてくれ」

渡された名刺には、〈料亭・可憐〉と書かれていた。

「うわ、高級料理屋かよ。一度行ったきりだな」

「仕事が済んだら寄って下さい。サービスしますよ」

「・・・タダ、ではないのね」

「それはそれ、ですよ」

そう言うと、男は店を後にした。

「ふう、大変な仕事だ。ま、俺もスキルアップしなきゃならんしな」

「頑張れよ。あ、紹介料はしっかり頂くぜ」

「あー、はいはい、何かしらの食材は持ってくるよ。」

ま、偶然見つけられたら、だけどね」

そう言うと、パスタをかき込み、店を後にした。

第6章 魔境ダイナル

デメオン

「ふうー、ふうー・・・」

荒い息をしながら、エンドゥは一週間もの間、寝ずに食べずに走り続けていた。

あの日、森で見た謎の生物に圧倒されてから、過酷な修行が日夜続いている。

端末から軽快なメロディーが流れ始めた。

「ふうー・・・やっと到着したか・・・」

エンドゥが覗き込む画面には、マップが表示され、

そこにバルーンが浮かんでいる。

「ここまで到着するのに、一週間ちょいか・・・あー、まだまだだぜ・・・」

手近にある木を手刀でバツサリと切り倒す。

幹からは、おびただしい量の液体が噴き出し、

その液体を美味しそうに飲み干した。

「くうー、腹にしみわたるぜ・・・通称〈ウォーターツリー〉とは

よく言ったもんだ。この木の群生地を目標にして良かったぜ」

不思議だな、さっきまで飢えの限界だったってえのに・・・

ただの水じゃねえって事か。

「さてー・・・」

エンドゥは再びマップを確認する。

あと十キロ程度で、A級危険度地区か・・・

ちょいとここで食事をしておかないとな。

さっそく空識を戦闘領域外まで広げる。

動いている猛獣は二体か。

気配を消し、猛獣に歩み寄る。

木陰から覗くと、キノコをモソモソと食べているようだ。

草食獣か。

耳がやたらとでかい。ウサギか何かの進化タイプか？

不意に猛獣がこちらを向く。

やべえ！！

すぐに目を逸らしたが、酔ったように頭がもうろうとした。

ぐ・・・一つ目、そして巨大な耳・・・間違いねえ、＜デメオン＞か！

一瞬見ただけでこれじゃあ、マジで目を合わせたら永眠確定だぜ・・・

デメオンは大きな一つ目をキラキラと輝かせ、

ピョンピョンと飛びながら近づいてくる。

「だがよ、残念だったな」

目まいから脱したエンドゥは、目を閉じながら手を横に振る。

目を開けると、輪切りにされたデメオンが転がっていた。

キノコが生えている場所に目をやると、いたる所に骨が転がっている。

「あのキノコは・・・動物の死骸を栄養に育ててやがるのか。」

そのキノコをデメオンが食す、と。うまくできてるな」

エンドゥは、もう一体も同様に輪切りにし、焼いて食事でありついた。

魔境へようこそ

「やあ、こんにちは。私は地区管理者の<イルギス>です。
あなたはもしかして・・・」

「名はエンドゥだ。ここを通り抜けたいのだが」

「やはり。噂はかねがね聞いていますよ。<魔境><ダイナル>へようこそ」

イルギスの目は輝いていた。

無理もない、有名人が訪れる事など、滅多に無いのだから。

「魔境？ 秘境なら聞いたことはあるんだがな」

「そうですね、そうですね。ここは噂にもならないですし、

大した食材ありません。大抵のハンターはやってこないでしょうね」

「ほほー、それは興味ある話じゃねえか」

「今まで通りぬけられた方は、確認しているだけで約5名。

入ったまま行方不明の方は、230名に及びます」

「おー、怖い怖い・・・所で、ダイじいは来たのか？」

「ダイじい・・・あ、ダイマール氏は通り抜けていますね」

「ま、そういう事なら、避けて通れないな・・・よし、通させてもらうぜ

「十分、お気を付けて・・・」

イルギスは鍵を開け、エンドゥを通す。

「ん・・・これってただの金網か？」

「いえ、一応X-1を使用してますが・・・」

「ふーん、電撃なんかはやってないのか」

「ええ、猛獣はいませんのでね」

猛獣はいない、か・・・

食獣植物じゃあ、俺の相手にならねーぜ？

奴ら、スピードが遅いからなあ。

しばらく歩いていると、どこからともなく甘い匂いが漂い始める。

「おっ、いい匂いだな」

エンドゥは匂いがする方向へと足を進める。

すると、前方に自分の背丈ほどもある草が生い茂っていた。

だが、気に留めず草をかき分けながらズンズンと進む。

次の瞬間、腕に激痛が走る！

「つうっ！？」

見ると、腕が血だらけになっている。

傷は皮膚を裂き、肉まで達していた。

「どういう事だ！？ 硬化が破られたってのか？ そんなまさか……」

手近の草をちぎり、指を鋭い先端に当ててみると、

手を動かすこともなく、皮膚は簡単に切り裂かれた。

「よう、わからんが……要は触らなけりゃいいんだろ？」

エンドウは剣を引き抜くと、辺り一面の草を全て切り払った。

「恐ろしい草もあったもんだな……油断しないで行かないとな」

それからというもの、触れそうな草という草を切り刻んでいくエンドウだった。

落下、そして空へ

「んん？ 何だここ……穴だらけだけぞ」

甘い匂いを辿っていくと、少し開けた草原が現れた。

見た目では穴が空いているようには見えないが、

エンドウは空識によって穴を認識している。

「まあ、俺には無意味だけど、うおお！？」

エンドウは予期せず、落ちるはずのない穴へ落ちていった。

「ちいっ！ さっきから何かがおかしいぜ……そらよ！」

剣を穴の壁へと深々と突き刺し、落下を止める。

ゴオオオオオオオオー！！

「ん、何だ、何の音だ」

エンドウがあっけにとられていると、奈落の底が開く。

「あー、なるほど。こいつは穴じゃなくて、”口の中”だ」

底からヌルリと舌が出てきて、邪魔者を排除しようとする。

「あの粘液はやっかいだな・・・指刀、二本指、”ブレイド”！」

迫ってきた舌の先端だけをゾリッ、と切断する。

ゴオオオオー！！

「お怒りの所、悪いーんだがよ、お別れだ」

切断された、舌の粘液の無い部分に飛び乗り、

そのまま地上へとジャンプ！！

穴を塞いでいた草を切り払い、無事に地上へと着地した。

「やれやれだぜ・・・しかしよお、空識が役に立たないって、

どういう事だ？」

不思議に思いながらも、あまり考えない。

それがエンドウの長所であり、短所でもあった。

「全ての草を刈るのも面倒だ。強化の最大出力で飛び越える！」

言うやいなや、高々と飛び上がり、数秒後には着地する。

「跳び越えたことは跳び越えたが・・・あー？ やけに距離が短いような・・・

疲れが溜まってるのか？・・・まあいいか。先に進むぜ」

しばらく歩いていると前方に、こんどは巨大な葉が

地面一面に広がっていた。

「・・・こんなに平べったい葉なら、切られる心配もねえな。
穴も無さそうだしよ」

警戒も無しに葉の上をサクサクと歩いていると、

突然葉がせり上がり、エンドウを上空に吹っ飛ばした！

「なあっ！？ 落下の次は上昇かよ！？

・・・しかし、この程度のスピードなら、避けられたはずなんだがな。
”心速”が解けてたのか？」

下を見ると、生い茂った葉とは別に、中心部に口を開けた

真っ赤な花が鎮座している。

「さーて・・・どう料理してやろうかな」

不敵な笑みを浮かべ、両腕を振り下ろした。

抜刀！

「そらそらそらあ！」

見えない刃が植物を遅う。

葉は次々の切り刻まれるが、中心の花はびくともしない。

「ちっ、堅えなあ。・・・それとも、俺の力が弱くなってんのか？

だったらこれだ。＜抜刀＞三番手、「乱」！」

剣を引き抜くと同時に、強烈な斬撃が花を襲う！

たまたら花はバラバラに切り裂かれ、花びらが宙を舞う。

「・・・ちっ、「乱」を使っちゃったじゃねーか。

仕込むのに、どれだけ手間掛かっていると思ってやがる。

まあ、これではっきりした。この地区には

力を半減させる何かがある・・・」

エンドウの使用した”抜刀”は、ダイじいが開発した、

エネルギー生命体の応用法。

何らかのトリガーにより、イメージによって仕込まれた

エネルギー生命体を解放し、仕事をして貰う技法である。

もちろんリスクもある。仕込まれたエネルギー生命体は

トリガーが無ければ動かない。つまり、いつも操れる数が

制限される。しかし、それを差し引いても、思考を除外した

自動起動は危機的な状態を脱するのに有効なのだ。

ただし、エンドウの場合は動的に使っているが。

「＜エネルギーマクロ＞を作りすぎたか？ ダイじいは、一つか二つに

しておけ、と言ってたが、五つも作ったしな。

それと・・・この地区の特性か何かで、無敵の生命体が減っているか、

動かせる数が少なくなっているか・・・だよな」

考えながらしばらく歩いていると、前方に沼が見えてきた。

「おいおい、こりゃまた・・・渡ってくれと言わんばかりだぜ」

沼の所々に蔓状の植物が生えており、お互い絡まりながら

対岸まで伸びている。

「さて・・・どーする？ いつもの俺なら、”不動”で楽勝だが、

硬化の一種に違いがないからな、弱くなってるに違いねえ・・・

あー、考えんの面倒くせえ！ 行くぜ！」

エンドウは蔓に飛び乗ると、バランスを取りながらスイスイと進んでいく。

「そういえば、俺は綱渡りができるほど、バランスは得意だった。

なんだ、問題クリアだぜ」

沼の中央付近まで無事に歩き続けていると、

沼から細長い蔓がみるみる生長し、エンドウの背を通り越した。

「・・・そーら、お出ましになったぜ」

周りを見渡すと、同じような蔓があちこちから生えてくる。

「あれだろ、俺を縛って沼の底まで引きずり込もうとかしてるんだろ？」

次の瞬間、生長した蔓という蔓がエンドウ目がけて

絡みつこうと唸りを上げる！

甘い誘い

「させねえ、けどな！」

剣を引き抜きつつ、その場で一回転する。

すると、剣の延長線上にある蔓の先端は、

いとも簡単に切断され、沼へと落ちてゆく。

「けっ、大したことねーな。さて、今のうちに渡りきって・・・

うおっ！」

エンドウは慌てて剣を足下の蔓に突き刺す。

「あぶねーな・・・いつの間に足下に巻き付いてやがった？」

見ると、太い蔓の至る所から新しい蔓が芽吹いている。

沼からも新しい蔓が、再び伸びてきた。

「よくよく考えたらよお、わざわざ上を歩く必要もねえーわ」

そう言うやいなや、足下の太い蔓をブツた切る。

支えを失った蔓は、エンドウの重さで沼へと落ちていく。

すると、垂れ下がった後方の蔓を切り離し、

沼へと着地する。

「やっぱりだな。接触する面積が多ければ、そう簡単に沈まない」

太い蔓は少しずつ、ズブズブと沈んでいく。

エンドウは、沼の先まで続いている太い蔓をバッサバッサと切り落とし、

それを足がかりに沼を渡っていった。

「よし、到着！ 最初からこうすりゃ良かった。

さて、良い匂いはこっちか？」

匂いを頼りに歩を進める。

草という草、木という木を切断しながら、

匂いに向かって一直線にすすんでいると、

少し開けた場所に出た。

「ん？ ここから草一本生えてないぜ・・・」

周りを見渡すと、あちこちに骨が転がっている。

そして、開けた場所の中央には、一本の木が生えていた。

「ほう、凄い幹の太さだ。こんなデカイ木は見たこと無えー・・・

いや、規格外の巨木は<ディルギス>で見たことがあったが」

しかし、何で骨が大量に転がってんだ？

巨大な木をユサユサと揺らしてみると、

あの良い香りが漂ってくる。

「実でもあるのかと思えば・・・葉っぱから香ってるのか。

良い匂いだが、これじゃあ食べねーな。

ふう、ここで少し休んでくか」

エンドウは木にもたれかかり、携帯食をモサモサと食べる。

「・・・一袋だけ持ってきて、正解だったな。

この地区を出れば、何かしら狩って食えるだろ。

ふうー・・・一眠りするか」

軽く眠るつもりで目を閉じる。

が、あっという間に深い眠りへと落ちていった。

無力

エンドウは目を開け、飛び起きる。

「ちっ、寝過ぎたか・・・今何時だよ・・・」

ポケットから端末を引っこ抜く。

が、画面は真っ黒のまま、ピクリともしない。

「おいおい、最強硬度の端末を選んではるんだぜ？

まだ二年足らずしか使ってねーのに・・・」

空は曇っていて太陽が何処にあるのかわからない。

だが、そんなに暗いわけでもない。

「まあいいや、さっさとこの地区から出ねーとな」

その時、空から何かが振ってきて、エンドウの視界を塞ぐ。

「本性を現しやがったな、この巨木・・・まあ、ムダだけどな」

巨木の枝が、まるで萎びたように垂れ下がってくる。

「指刀、五本指”クロウ”！！」

エンドゥな思いっきり腕を振るう！

「何っ！？ どーいう事だ、こりゃ！！」

切断されるどころか、傷一つ付かない。

それどころじゃねえ・・・最強の生命体が、まるで動いていない・・・

「ぐっ、やばい・・・ここから速く逃げねーと！」

立ち上がろうとするが、身動きが取れない。

「なっ！ 根っこが足に絡みついてやがる！

これでも喰らいやがれ！」

剣を鞘から引き抜き、根っこに切りつける！

エンドゥは目を疑った。

綺麗な音色を立て、剣は二つに折れて転がった。

「ぜ、Z-9が折れた！！ 何かの冗談だろ！」

残った部分で更に切りつけていると、剣はポロポロと崩れ、

もはや原型をとどめないほどに粉々になった。

「・・・万策尽きたか。俺はここで死ぬのか？」

何だかな・・・死というのがぴんとこない。

強敵と戦って、と言うならわかるんだが、

身動きが取れなくなっただけだしな。

俺が餓死するまで待つ気か？ ずいぶんと気長な奴だ・・・

日が落ち、夜が訪れる。

エンドゥは眠ることなく、葉の隙間から月を見ていた。

永久の眠り

・・・何日経っただろう。

一週間かそこらか？

イルギスはまだ待っているだろうか。

「あー・・・何なんだ、目が冴えて一度も眠れねえ・・・」

身動きが取れなくなってからというもの、

ずっと原因を考えている。

なぜ無敵の生命体が言うとおりに動かなくなったのか。

なぜ端末は壊れたのか。

そしてこれが一番疑問に感じていることだが、なぜ剣は折れたのか。

ありえねえ・・・強度の確認に、何度も岩をぶった切って見たが、

折れるどころか曲がることもなかった。

それが、大して力を込めてもいなかったのに、いとも簡単に割れた。

剣を分解させるような物質があったとしても、

剣がポオポロに崩れるならわかる。

「・・・剣が折れたのは、あり得ねえ。何かがおかしい」

それに端末もだ。

外側はX-1で覆われている。

液晶部分も、強硬度の＜メタクリア樹脂＞で出来ている。

そーだな、カイダルマンバスクラスの猛獣だったら

不可能じゃねーけどな。

「端末が壊れたのもあり得ねえ」

後は無敵の生命体か。

確かに、この森に入ってからおかしかった。

しかし、全く役に立たなくなったのは、一眠りした後だ。

「・・・あり得ねえ事ばかりだぜ。そーいや、ずっと眠れないのもおかしい。

そんなに気が張ってるとは、とても思えねー・・・」

そうか、言い方を変えりゃーいいんだ。

「剣は折れていない。端末も動いている。無敵の生命体は、

俺のために動いてくれる。そして・・・俺は眠っている！」

そう、全ては夢だ。

エンドウの顔に笑みがこぼれる。

「だったら寝ればいいんだ。とは言っても、寝られるはずはねえ。

ここは夢の中なんだからな」

ならどうする？

足下に転がっていた剣の片割れを、

なんとか腕を曲げて手に入れた。

「このままでも、餓死して死ぬわけだしな。

やるだけやってみるさ」

エンドウは、躊躇無く自分の心臓に剣を突き刺した！

夢から覚めたら

気がつくと巨木にもたれかかり、

手には携帯食の入っていた袋を握りしめていた。

「・・・夢か。何とも嫌な夢を見たもんだぜ」

剣や端末を確認する。

両方とも無事だ。

「・・・ただの夢とも思えねーな」

辺りには甘い匂いが立ちこめている。

「そうか、この匂い・・・この地区に入った辺りから臭ってたな。

もしこれが毒だとすると、今までの疑問は全て解決するな」

言うなれば、意思を奪い、永遠の眠りに誘う・・・

「ここに転がっている骨は、目覚めること無く餓死した奴らか。

だとすれば、やることは一つだ」

エンドウは巨木と向き合う。

「敬意と、感謝を込めて、俺のとおきで倒してやる。

・・・抜刀、一番手<一矢>！」

剣を引き抜くと同時に、巨木は真っ二つに切り裂かれ、

枝の重さによって左右へと倒れていく。

「あー、眠っ！ ま、念のため、この地区を出てから寝ねえとな。

・・・自殺なんて、こりごりだぜ」

巨木は轟音を上げて地面へと激突した。

一時間後、エンドウはゲートへと到着。

イルギスと再会した。

「早かったですね！ 大抵早くても一週間はかかるんですよ？」

「あー、そうか？ 大したことなかったぜ。あの巨木を除いてな・・・」

「<永眠樹>の呪縛をクリアしましたか！ さすがです・・・」

「おいおい、知ってたんなら何で教えてくれなかったんだよ」

「いやー・・・私も噂に聞いた話ですしね」

「そう言やあ、その木、切っちゃったけど・・・よかったのか？」

「あ、ご心配なく。再生能力が半端ないので」

「・・・あっそう。さて、ちょっと一眠りするか」

「あ、そうそう、この地区を制覇した方に、私からのプレゼントです」

そう言って手渡されたのは、小さな布袋だ。

「中身はなんだ？」

「デメオンの目玉・・・の、乾燥したものです」

「・・・何でそんな不気味なもんを・・・」

「私の趣味でして・・・あ、多分ダイジイも持ってるはずですよ」

「ほう・・・」

「生前の力ほどじゃないですけど、相手を眠らせる程度の力があります」

「効果は無くならないのか？」

「目玉の形を崩さなければね」

「少しは使えるか・・・貰っておくぜ」

「では、ごきげんよう」

一眠りしたエンドゥは、再び目的地を目指し、出発した。

第7章 つかの間の休息

緊急会議

少し広めな部屋の中央には長いテーブルが置かれ、

数人が壁に設置されたディスプレイを見ている。

「・・・で、何者かの特定はできたのかね？」

「残念ながら、性能のよいカメラではありませんので、

特定は不可能かと思われます」

「第十部隊以降を向かわせて原因の特定急ぎましょうか？」

「いや・・・更なる犠牲者を増やすわけにもいかん。急遽部隊を編成し直し、

通常の業務に戻るように。編成は君に頼むよ」

「・・・はい、すぐに」

「では失礼する。こっちも気が抜けないものでね・・・」

通信が切られ、ディスプレイには「NO CONNECT」の文字が点滅する。

「・・・では、これにて会議を終了する」

「社長、彼らの遺体は回収できないのですか？」

「安全が確認できない以上、更なる犠牲者を生むかもしれん・・・

今は無理だ」

「・・・そうですか。ではAプランのまま処理いたします」

「頼んだぞ」

会議室の外では、第二部隊のメンバーが、今かと待ち構えている。

「あー、遅い・・・」

「仕方ないだろ、こんな事態は初めてだろうしさ」

「まあまあ、気長に待とうよ」

「・・・テンクーは待つのが得意だろうけどな。」

所でさ、バラスとプラントンは、どこ行ったんだ」

「彼らなら、ショッピングモールに買い物さ」

「相変わらず勝手な・・・」

「どうせ、いても口うるさいだけだしな」

「・・・おいハトバ、さっきからプレート端末とにらめっこして、

何やってんだよ」

「ん？ HASのプログラムを、ちょっと修正中。専用のAIチップが出来てれば

こんな手間は無いんだけど」

「へえ、まだ強化されるのか」

「経験を元に、自分で最適化ができるようになるのさ。」

人によって戦い方のスタイルがあるだろ？」

「まー、テクノロジーは日々進化するしな。そのうち生身の人間は

地上に全くいなくなるかも・・・だな」

「それは見方が少々変わるだけだがね」

グラモトが横やりを入れる。

「どういう事だ？」

「パワーアーマーやブーストブーツ等は、人を主体としているだけ。

今後は装置が主体となる、そういう事だが？」

「ああ、なるほど」

「ひどいなグラモト。H A Sと、そんなものを比べるなんて。

全く別次元の性能だってのに」

「うしししし、でも今までの補助装置を全部組み合わせて

ロボットにただけって感じでもあるよなあー」

「うるせーぞ、トーキ！」

「あ、出てきましたよ」

扉が開け放たれ、社長が姿を現す。

それぞれの休暇

「社長、支持を」

「君が第二部隊のリーダーかな？ 結果から言うと現状維持だ。

もちろん部隊の編成はするが」

「彼らの遺体回収も出来ませんか・・・」

「残念ながらな」

「ちっ、どうせ会長の指示が優先されてるんだろ」

ヤンバが皮肉たっぷりに言う。

「否定はしないが。さて、私は部隊編成を任されている。

君たちは、その間に英気を養ってくれ」

「・・・了解しました」

社長と、その部下達は、その場を後にした。

「と、言うわけで、自由行動だ。僕は兄さんの様子を見てくる」

「ま、仕方ないか・・・んー、どーすっかなー、あ、もうアレが出来てる頃かな」

「俺はH A Sの整備でもするか」

「私は自分の部屋に戻って、音楽でも聴くかね」

「私めはグラモトの部屋で漫画を嗜もうかと」

「・・・もう、二人で結婚でもすればいいさっ」

「マ・イ・ル・ズー！！ それは聞き捨てならないがね！」

「ふふっ。さて、私は久しぶりにパパに会いに行くか」

「私を無視かね！ そもそも君は未だにパパかね！」

「何と呼ぼうが勝手だろ？ この呼び方はパパのお気に入りだね」

「ああ、もう・・・面倒くせーから俺は行くぜ」

そう言うとヤンバは、突風を残して消えた。

「・・・あいつめ、こんな所で無駄に力を使いやがって」

「凄いスピードだね。僕でも目で追えるギリギリだ」

「ふん、あれが＜Aクラス＞かね。ウルヴァルの時に使っていたら

簡単に済んだものを・・・」

「でもさー、あれって一分程度しか保たないでしょ？ うかつに使えないよ、ねえ？」

「使うべき時に使うべきなのだよ。・・・ふん、そう言っている間にも

マイルズも消えているがね」

「彼は影が薄いからね。それが長所でもあるし」

もちろんテンクーにはバレバレなのだが、

あえて気付かない振りをした。

ま、あの最新のブーツに付いてる＜サイレント・ウォーク＞は、

マイルズにとって鬼に金棒だね。

秘密兵器と再会

ドアはロックされ、無造作に開け放たれた。

「あら、ヤンバ君。丁度届ける準備をしていた所よ」

「＜リオ＞・・・君はいつ見てもかわいいね」

「あら、褒めても何も出ないわよ？」

白衣を着、眼鏡をかけ、髪を結わえた女性が

顔を赤らめながら微笑する。

「そう言えば、あの時の答えをまだ聞いてなかったような」

「あら、ちゃんと言わなかった？ ハンターは恋愛対象に

ならないわって」

「・・・まだ、”あの事”を気にしてるんだ。

はぁー・・・もういい加減に・・・」

「はいはい、その話はやめやめ！ 考えを変えるつもりは無いもの。

じゃあ、＜エネルギー・ドーピング＞について説明するわね」

「これじゃあ先に進まないだろうに・・・いつまで待てばいいわけ？」

「強化体に最適なバランスで栄養を濃縮したわ。

微細化プロセスを修正したお陰で、吸収力も良くなったため、

フルパワーでも大丈夫よ」

「あ、完全に無視ですか・・・」

「ざっと計算すると、1粒で10分が限界ね。

体の負荷を考慮するなら、連続使用は3粒まで。

あと、ノーマルモードに戻ってから飲めば、

体が動かなくなる症状を予防できるわね」

「30分もあれば上等だよ。で・・・もしそれを超えたらどうなるんだ？」

「強化体の細胞が崩れるわよ？ 最低一時間は休憩してね」

「・・・ま、仕方ないか」

「私を彼女にしたいんだったら、せいぜい生き残ることね」

「言われるまでもねえよ。じゃ、またな」

ヤンバはそう言うと、部屋を後にした。

一方、テンクーは療養中のオーゾラと再会していた。

「はぁ・・・全くもって残念だ・・・俺がいれば、

何人かの命は救えたかもしれないのに・・・」

「兄さんがいても、状況は変わってないよ」

「あー、うるさいうるさい、そんな事はわかってる。

わかってても言いたいだけだよ」

「で、もう大丈夫なの？」

「ああ。バッチリだぜ？ 今じゃ自由にコントロールできるようになった」

「それは良かった。前回会った時なんて、そうとうカリカリしてたから」

「ああ、済まなかったな。この＜強感覚＞が、年を追うごとに

自分をむしばんでいくななんて思ってもみなかったさ」

「まあ、病気みたいなもんだからね」

オーゾラはテンクーの肩を、べしべしと叩く。

「言ってくれるじゃないか！ で、お前の方はどうなんだ？」

「僕？ あれから大分進歩したけどね。

A級が、やっと視野に入ってきた所さ」

「いいねえ！ しかし、ずるいよなー、リスクが無くてリターンばかり多いしょー」

「リスクか・・・まあ、無い事もない」

「ほう？」

「自制しないと自信過剰になる、これくらいかな？」

「何だそりゃあ・・・リスクでも何でもないだろ」

「そう？ 兄さんが言った事じゃない。「自信は無くても有りすぎても良くない」って」

「えー？ そんな事言ったか？ まあいいや。今夜は久しぶりにつきあえよ」

整備と閉じこもり

「よう、<ゲン>ちゃん、久しぶり」

「待ってたよハトちゃん。大分痛めつけてくれたじゃーん」

「そうか？ そんなに酷使はしてないけど」

「じゃあ、これは何なの」

そう言いながら、HASの機体をバシバシ叩く。

「おっ、L-25に擦り傷。ウルヴァルと戦ったときのだな」

「ちよっ！ 肉弾戦は止めてよね！ 私の作った愛しのボディーに

傷付けないでくれる!？」

「擦り傷ぐらい気にするなよ」

「それだけじゃないんですー。人工筋肉〈エレッスル・ファースト〉を調べてみたら、

足の部位に多少の損傷があったの！」

「ああ、グランビープを捕獲する時に、多少無理はしたからな」

「まったくもう・・・信じられない」

「エレッスルの開発は、君の担当だろ? もっと強化すればいい」

「実のところ、〈エレッスル・セカンド〉はできあがってるのよ。

ただ・・・電気食いすぎで、HAS搭載は無理だわね。

それに、機体の劣化が早まるわよ？」

「L-25じゃ、無理って事か」

「〈M3〉が、近々新しい商品をラインナップするらしいから、

それに期待ってトコかも」

「そう言えば、HASの外装に、Z-9を使ったオプションがあるといいかも」

「・・・ずいぶんお金持ち仕様だわね。一式いくらかかると思ってるのよ？」

「ばら売りができれば手が届くだろ？」

「まあねー、でも、外装が壊れる前に、フレームが歪むわね・・・」

「そ、そうだな」

「ハトバ、来たか。HASは順調かね？」

話に割り込んできたのは、ビジネススーツを身に纏った男性。

「あ、ダイちゃん！久しぶり。チップ開発は進んでるかい？」

「・・・ゲンの口調が、うつってるぞ。それに名前は正しく言うもんだ」

「まーまー、そんな堅苦しくなるなって。＜ダイバル＞」

「堅くはない、決して！・・・でだ、チップの方は試作品が完成している、

見に来るか？」

「いいねー、いくいく」

一方、グラモトとトーキ・・・

「やっぱりマンガは専用端末に限るな」

「・・・いつも使ってる端末も、両開きではなかったかね？」

「いつものは小さいしね。この端末は紙の質感まで再現してるんだ。

紙以上の紙と言ってもいいくらいだ」

「ふふん、紙以上の紙なんて存在しないのだよ。

それはもはや紙では無くなっている」

「もー、そういうムズカシイ話はいいよ」

「・・・別に難しくはないがね。さて、私は曲でも聴くか」

グラモトはそう言うと、部屋の隅に座り、ヘッドホンをして

目を閉じ、曲を聴く。

「・・・グラモト、音楽を聴くときは、いつも隅っこなんだよね。

なーんか暗いなあ。ねえ、ねえってば、何聴いてるのー？」

「・・・邪魔！ ミツキ・サムヨの曲に集中できないがね！」

「ん？ 誰それ」

「・・・トーキ、君は本当に、マンガやアニメ以外興味ないのだね・・・」

「まあ、そーだねえ。俺って奴あ、マンガ以外、どーでもいいと思ってるのさあー」

「それでも、一度聴いてみるべきだがね・・・さて私は没頭する。

二度と反応しないから、そのつもりで」

そう言い終わらないうちにヘッドホンをかぶり直し、前にも増して閉じこもった。

「・・・おい、グラモト・・・ちえっ、つまんないの。

うーん、じゃあアニメでも見るか。確か<グラビティ・ハンター>の

新作が出てるはずだもんねー」

物色とパーティ

人々がごった返す中、バラスとプラントンは武器を物色していた。

「ロジェット、ストヴィダも、大した新製品はありませんね」

「全くだ。もっとう・・・簡単に強くなれる武器は出ねーのかな」

「えーっと、後は<パラディンナイフ>と・・・<ハンタープラス>程度ですね。

防具ならディフェンザとスペクティが入ってる」

「ん？ バラディンナイフは振動ナイフ作ってる所だろ。

そのハンタープラスって何なんだよ。聞いたことも無いな」

「やだなあ、新進気鋭の武器メーカーですよ？ 私の使っている

ボールや<シューター>は、ここで作ってもらっているんです」

「お前のお得意さんかよ。じゃあ、試しに行ってみるか」

二人はハンタープラスの扉を開ける。

「あらあら、プラントンさん、お久しぶりねえ。

そちらの方はどなたかしらね」

「彼は同じ隊にいるバラスです」

「あらあら、ハンタープラスへようこそ。お気に召す品があるといいわねえ」

「で、お勧めはあるのか？」

「お勧め！ よくぞ聞いてくれましたわね。例えばこれ！

バーニングガンに装填可能な小型ミサイル。自動追尾装置付き。

1 ダースで20万ラースね」

「・・・他は？」

「そうねえ、これは試作品なんだけど、超高熱弾を撃てる、

その名も<スティグマ>。一丁200万ラース」

「にっ！？・・・うーむ、高い」

「ねえさん・・・相変わらず金額設定が高いですね」

「ねえさん！？」

「あら？何かしらね？何か文句があるのかしら！？」

「い、いや、何も・・・」

ねえさんと呼ばれた女性は、ふてくされたように店の奥へと引っ込んだ。

「明らかに、ねえさんって歳じゃなかりょうに・・・」

「・・・でも、そう呼ばないと店から蹴り出されるからね」

「・・・さーて、もう少し使えて、安い品は無えーのかな・・・」

一方、マイルズは久しぶりに父と再会していた。

「やあパパ、元気だった？」

「おお息子よ。私の健康を気遣ってくれるとは」

「当たり前じゃないですか。パパに何かあったら、

とても仕事どころではないよ」

「はっはっは、心配無用だよ。いざとなったら新しい体に取り換えるだけさ。

それより、お前にプレゼントがあるんだ」

「本当！？うれしいなあ」

マイルズが包みを開けると、そこには真新しいサンダーショット、

それにアーマーが一揃い、それに小さな銃が入っていた。

「わっ、これ新バージョンのサンダーショットだね！？」

「そうとも。もちろん、より強力にカスタマイズしてあるぞ」

「流石パパ、ぬかりない」

「そうだろう、そうだろう」

「このアーマーは、スペクティの〈Xアーマー〉シリーズだ！」

「少々値は張ったがな、息子の命を守るアーマーだ。安いもんさ」

「ありがとうパパ！！ これずっと欲しかったんだよ」

「だろ？ そしてこの銃はスティグマと言って、世界にまだ2丁しかない。

ハンタープラスの発明家、〈ジュンタ〉渾身の作だそうだ」

「流石パパ、最新技術にもぬかりはないね」

「はっはっは、わしはハンタープラスの大口株主だからな。

他にもいくつか投資してるが、全て順調に成長しているよ」

「パパはきっと、未来を見通す目を持ってるんだね」

「はっはっは、言うじゃないか。さあさあ、今夜はパーティだ。

お前の大好物ばかりを集めておいたぞ」

「それは楽しみだ」

マイルズは父と一緒にパーティ会場へと向かった。

隊の編成と別れ

次の日の朝、第二部隊の面々は、再び本部へと集まった。

「休暇を楽しんだかね？ では本題に入ろうか」

「あの一、第六部隊の俺がいてもいいんですかね？」

「オーゾラ、もう復帰できるんだってね。まあ、君も関係ない訳では無い。

では、配置換えを命じる。第五部隊から第三部隊までは上にスライドさせ、

新しい第三部隊にヤンバ、テック、ハトバ、マイルズを当てる。

それにオーゾラも本調子では無いだろうから、同じ隊で勤を取り戻して欲しい。

で、第二部隊はグラモト、トーキ、バラス、プラントンを当てる。以上だ」

「ま、妥当じゃないかな。私としては五月蠅く喚く奴と別れるのは

寂しいところだけどね」

「てめえ、そりゃ誰のことだ？」

「まあまあ、別れるのは寂しいって言ってるじゃないか」

「・・・お前はすっこんでろ」

オーゾラが手を叩いて制止する。

「はいはい、喧嘩しない。それで、各隊のリーダーは誰になるんだ？」

「ナイスな質問だね、オーゾラ。そうだな・・・第三部隊は君で良いとして、

第二部隊は・・・グラモト、君がリーダーだ」

視線がグラモトに注がれる。

「・・・やはり、そうなるのかね。まとめ上げるのは大変そうだが、

やるだけやってみるがね」

「はっ！ また青二才がリーダーかよ。しょうもねえなー」

「でも、バラスには向いてないよ。それに、リーダーって結構面倒なんだよ？」

「あー、うっせえなあ。確かに俺はメンドーが嫌いだよ」

オーゾラがテンクーに耳打ちする。

「・・・なあ、あいつって、いつもあんななのか？」

「まあ」

「お前も大変だったなー」

「そうでもないよ。バラスの場合は行動がわかりやすいし」

「リーダーが板に付いてきたな。暫くおあずけになるが」

「お手並み拝見ですよ」

「やれやれ、気楽に行くつもりだったんだがな」

社長がゴホンと咳払いする。

「では次の仕事だ。第三部隊はグルゼの森にてグルベゾンの捕獲、

第二部隊はドゥエル湖でエビーカの捕獲だ」

「エビーカ？ そんなの養殖場で事足りるだろうが」

「客は天然物を望んでいるようでね。詳細は各自確認のこと。

さあ、出発出発！」

こうして各隊は目的地に向けて出発した。

第8章 始動

水の方

小川がさらさらと流れ、薄曇りから覗く太陽が
暖かな光を送ってくる。

マルクは日だまりで寝転がり、空を見つめていた。
一見気持ちよさそうに見えるが、心の中は穏やかでは無かった。

そんなことはお構いなく、小川の側では
雑草が勝手に引っこ抜かれ、脇にどけられてゆく。

「ほほう、エネルギー・マクロは大分上手くなったのう」

ダイじいが手をヒョイと動かすと、抜かれた雑草は
一箇所へと集まり、箱の中へと放り込まれた。

「何となくコツが掴めた、かな。しかしまあ、根性のある
雑草もいたものですね」

「そうじゃのう、栄養が無い土地に適応した植物じゃな」

「それに引き替え、こっちは食欲に栄養を吸ってますけど」

「ドリーンスルーマはのう、収穫するまでに一山を枯らすほど
大食らいなのじゃ」

「凄いですね。でも、本来は一株で、成長するのに十年も
かかるんですよ。はあー・・・人間の欲望は底なしだ・・・」

「・・・まだ思い悩んでおるのか？ 体に悪いぞ。軽く考えたらよかろう」

「そうは言っても・・・あの状況を生んだのが人のせいだったなんて。

何でもかんでも人が搾取して良いわけでは無いはずなのに」

「そうじゃのう。ウマミはまだまだ謎が多い。見つけようとして

見つかるものでもないんじゃよ。それを乱獲したのは良く無い事じゃ」

「人として恥ずかしい事ですよ。その、ザン・イバーラって人を
即刻捕まえて森の民に引き渡すべきです」

「今更引き渡したところで、森の民は止められんよ」

マルクは拳を握りしめる。

「だからって、人々が虐殺されるのを黙って見てろって言うんですか!？」

「マルク、忘れたかのう？ 怒りや不安は彼らを遠ざける」

「うっ・・・わかっていても、怒らずにはいられないですよ・・・」

「ふーむ、そうじゃのう、川が氾濫し、堤防が決壊し、水が街へと

向かっているとす。それを止められるか？」

「森の民が水だと仰るんですか？ うーん・・・壁を作ってせき止めるしか」

「壁じゃと？ そんなもの、急場しのぎにもならん。

丈夫な壁を作るには、それなりの時間がかかるものじゃ」

「じゃあ、どうしたらいいんですか？」

「一度動き出してしまった強大な力を止めることは出来ぬ。

じゃが、流れる向きを変えられれば被害は最小に押さえることは出来る。

まあそれも、運が良ければの話じゃが」

「なるほど・・・止めるのは不可能なのはわかりました。

けど・・・僕らに何か、出来ることはないんですか？」

ダイじいはマルクの頭を乱暴に撫でた。

「わしが何も考えてないと思うか？ わしだって人の大量虐殺なんて

見たくも無いわい。例え原因が人にあってもな」

「どうすれば向きを変えられるんです!？」

「慌てるでない。ある意味最も簡単で、最も難しい方法じゃと、

人類殲滅を扇動しているバズアルの考えを変える事じゃ」

「アバルの時みたいに負けを認めさせればいいわけだね？」

「簡単に言えばそうじゃが・・・彼は負けを認めずに命を絶つじゃろうな。

それに、バズアルの居場所が分からなければ、そもそも行動を起こすことも不可能じゃ」

カルサーとサガスからの連絡

「うー、やっぱり無理なんじゃ・・・」

「そんな事はない。力では解決しないだけじゃよ。

それ以外にも相手の考えを変える方法はある」

「どうやって変えるんですか」

「そうじゃのう、彼女の力を借りなければならんが・・・ん？」

ダイじいの端末からメロディが流れる。

「おや、メールじゃの。・・・ふむふむ、ほほう」

「何です？」

「カルサーからじゃな、進化人が見つかったらしい。おぬしの知ってる人物じゃよ」

「えっ!？」

「名前はサガス、どうやら探索するのが得意分野らしいのう」

「えええー!? サガス、進化人だったんだ・・・ちっとも気づかなかったよ」

「まあ、無理もなかろう。おやおや、君の親友の弟じゃったか」

「メールにサガスの電話番号を書いておいてくれれば、すぐに連絡つくのに」

「カルサーめ、もう少し頭を使わんか。どのみち、ヤンバから情報は伝わるがのう」

サガスからの電話がかかってきたのは、その日の夜だった。

「マルク兄さん、お久しぶりです」

「サガス、元気だった? まさか君も進化人だったなんてね」

「私も今日知ったんですよ。ところで、そこにダイマール氏はいますか?」

「ああ、いるよ。替わるね」

マルクは端末をダイじいに手渡す。

「お主がサガスじゃな? 詳しくはカルサーから聞いておる」

「ダイマール氏、初めまして。サガス・フローバスといいます」

「なんとも丁寧じゃのう。わしのことはダイじいとでも呼ぶといい」

「ええ!? そ、そんな親しげに・・・」

「まあ、すぐに変えなくても結構じゃがな。ところで休みの方は取れるのかね?」

「はい、会社に戻って確認したところ、近々連休があるので、

それに乗じて四日休暇を出しました」

「ふむ、一週間じゃな。では基礎くらいは教えられそうじゃの。

では、会うのを楽しみにしておるぞ」

「はい! よろしくお願いします!」

「マルク、後は頼んだぞ」

ダイじいはそう言うと、端末を放ってよこした。

「えーっと、じゃあ<レスノー>に来てくれ。そこで待ち合わせをしよう。

時間は・・・早いほうがいいね。朝六時に集合だからね」

「はい、わかりました。じゃあ、また」

「会えるのを楽しみにしてる」

電話を切ると、ダイじいはいつにも増して上機嫌だった。

「天は、我らに味方してくれるようじゃ。サガスを鍛え上げ、

バズアルを探してもらえれば、後は考えを変えてもらうだけじゃ」

「考えを変えるのが難しいんですけどね」

「それは任せておくがよい。さて・・・サガスと会うまではまだ時間があるのう。

マルク、その間にA級ライセンスを取ってくるのじゃ」

「えっ！ 僕がA級を！？」

「何を驚いておる？ 制限を解除されたお主なら、朝飯前じゃろ。

募集が明日までじゃったのう、端末からエントリーできるんじゃ、さっさとやらんかい」

モリトとの再開

三日後、マルクは<ディルギス>と呼ばれるA級危険度区域のゲート前にいた。

今回の参加者は、結構大人数で23人もいる。

開始時間まであと一時間程度。今集まっている人数は十人に満たない。

ディルギスは、比較的優しい部類に入っているが、優しいと言われても、そこはA級危険度区域。

B級とは比べものにならない。

本当に僕はA級ライセンスを取れるのだろうか・・・

そんなことを考えていると、肩をトントンとたたかれた。

「ん？」

振り返っても誰もいない。

「下だよ」

視線を下ろすと、見覚えのある顔が現れた。

「奇遇だねえ、マルク兄さん」

「き、君は・・・モリト！！まさか、モリトもA級を？」

「まーね。やっと母さんの許しが出てさ」

「相変わらず規格外な」

「それはそうと、マルク兄さん。ちゃんと空識を使っていれば、近づいてくることがわかったのに」

「参ったな、久しぶりにダイじいの元から離れたからね。気が緩んでいるな・・・」

「マルク兄さんらしいや。で、A級取れそうなの？」

「ダイじい曰く、朝飯前だってさ」

「ふーん、じゃあどっちが早くミッションクリアするか対決しない？」

「面白そうだね。ライバルがいれば、気を抜かなくて良さそうだ」

二人の会話は、「ガハハハー！」という品のない笑い声に遮られた。

「そんでよォ、スリヴ。俺は言ってやったんだよ。

お前、目がすっぽ抜けて、なくなっじゃねーのかってよォ。

お？ 何だ何だ、誰だガキをこんなところに連れてきやがったのは」

「子守しながらA級ライセンスを取る気だぜ！ 凄えーよなー、ガルデア」

「しかも見てみろ、まともな装備もさせてねえ！」

そこにモリトが突っ込む。

「これ、格好いいだろ。＜ディルジャ＞のシールドスーツだぜ？」

「ディルジャ！！」

ガルデアは、大げさに額に手を当てた。

「あのメーカー、デザインはいいんだがな、安物のシールドスーツより脆いって噂だぜえ」

「そうそう、あのメーカー、ハンター用品に参入したみたいだが、機能は二の次なんだぜ」

・・・何か見たことある顔だなーって思ったけど、あのスリヴ盗賊団の・・・

からかいと悪意

「おやあ、そっちのガキも凄えーもん着てるぜえ」
「ひええ、何そのツギハギだらけのシールドスーツは！
可哀想に、買い換える金もないみてーだ」

ダイじいが買ってくれた、最高級のシールドスーツは、今や継ぎ当てだらけになっていた。

・・・ダイじいの元から卒業するまでは買い換えなつもりだったけど、これ、そんなに酷いか？ それと、僕は大人なんだけど。

「スリヴさん、お久しぶりですね。残りの2人はどうしたんです？」
「何だあ？ どこかで会ったことが・・・あー！！ てめえ、あの時の・・・」
ニヤついていた顔が、みるみるうちに怒りに変わる。

「貴様！ タダじゃ済まねえぞ・・・弟子の座を奪いやがって」
「・・・弟子の座を奪った、と言うより、キノコを奪えなかった、
と言った方が正解かも」
「うるせえ！ おかげで俺は、その後酷い目に・・・おおっと、思い出したくもねえ。
覚悟しな！ てめえの体を吹っ飛ばして、生首をダイマールじいへ送りつけてやる！」

スリヴは背中からバーニングガンを引き抜き、マルクの心臓に銃口を当てる。

「喧嘩かね？ エントリーを取消されたくないければ、銃をしまいがよい」
「んだこの・・・ちっ、運がよかったな。地区内に入ったら覚悟しておけ！ はっはっはあー！」

そう言うと、スリヴはガルデアと一緒にその場を後にした。

「ありがとうございます。助かりました」

「ご謙遜を。あなたなら訳もなく叩き伏せる相手でしょう」
「そうでしょうか？ 甘く見ると痛い目にあいますよ」
「・・・さすがはダイマール氏の弟子ですね。あ、申し遅れました、
私は<デソー>。この地区を管理するものです」
「地区管理者でしたか。今日はよろしく願います」
「こちらこそ。おっと、準備の途中でした、ではまた」
「また会いましょう」

マルクはふと、モリトのことを思い出した。
・・・モリトはどこに行ったんだ？ 僕の空識外に出て行ったのは覚えてるんだけど。

「くそっ！ ああ、忌々しする！」
スリヴは怒りがピークに達していた。
「どうしたんだ、お前らしくもない。すぐに無法地帯に入るんだ。
殺したい放題だぜ？ ま、あんまり殺すとハンターポリスが黙っちゃいないか」
「あの場で殺してやりたいところだがな。忌々しい・・・」
「何があったか知らねえけどよ、気にすんなよ・・・あん？
さっきのガキじゃねーか。今こいつは機嫌悪いぞ。
どっか行かないと、切り刻まれちまうぜえー？」

モリトはニヤリと不敵に微笑む。

「ふーん・・・てっきり死んだと思ってたけど、悪運強いね。
せっかく助かった命だ。無駄にしちゃ駄目だよー？」
そう言うと、すぐに人混みに紛れていなくなった。

「けっ、何だあー？ ってオイ！ 顔が赤から青に変わってるじゃねーか！
何なんだよ一体・・・」
「ああ・・・悪夢だ・・・くそっ、こ、殺してやる・・・
もうライセンスなんてどうでもいい・・・皆殺しだ！ ふひひひひー！！」

試験開始

「さて、端的に言おう。マザー・ツリーにぶらさげてあるカードを持って帰ること。

助けは来ないと思ってくれ。皆さんが無事帰還することを祈っている。

では、開門！」

かけ声と共にハンター二十三人は勢いよくディルギスへと入っていく。

しかし開始早々、彼らはこの森の洗礼を受けることとなった。

どこからともなく、杭のようなものが飛んできて、

ハンター達にその切っ先を突き立ててゆく。

「な、何これ!？」

空識によって軌道は分かっているので、難なく避けるマルクとモリト。

「これ、〈スパイクツリー〉の棘だね。こんなに太いんだ」

「ああ、これが・・・僕も初めて見た。

・・・おっとモリト、弾丸受けられる?・・・もういなかったか」

バーニングガンや強化銃の弾丸が、嵐のように打ち付ける。

「うわー・・・大丈夫だと分かっているけども生きた心地がしないな」

乱射して撃たれた弾丸が直撃し、スパイクツリーは呆気なく崩れ落ちた。

「凄えーな、マルク兄さん。どんだけ弾を受けてんだよ」

「モリトこそ凄いな、撃つ前に軌道から脱出してなかった?」

「まーね。空識を強化した〈細識〉を使って、ハンターの動きを見てたんだ。

スパイクツリーの攻撃が一時的に止んだことで、彼らに攻撃のチャンスが生まれたわけ」

「なるほど、そういう使い方もできるんだ」

「やっぱり怖いのは人間の方だからね・・・」

「?」

モリトは謎の言葉を残し、走るスピードを上げた。
マルクもモリトを追いかけながら速度を増してゆく。

一方、残されたハンター達は、凄惨をきわめていた。
スパイクツリーの攻撃で即死したハンターが7人。
けがを負いながらも生き残ったハンターが12人。

そして・・・後方からスリヴとガルデアが、騒ぎに乗じて強化銃やバーニングガンを撃ちまくり、
生き残ったハンターの内、10人が死亡、または死傷した。

「バルドルグ、無事かい」
全身黒ずくめで、頭にはフルフェイスのヘルメットをかぶっている男が聞く。

「ジッシッシ、あんなもんで俺の作ったアーマーが貫けるわけなからう？
そういうお前は無事なのか、ビリードル？」
「僕にはスパイクも弾丸も当たらなかったよ」
「ジッシッシ！ 相変わらずラッキーボーイだな。
まー、そうじゃなきゃ、チームなんて組んでねーけどよ」

不気味な全身鎧を身にまとった大男は大笑いしたが、まるで笑い声には聞こえない。

謎の二人組

「バルドルグ、君はハンターポリスに連絡を取れ。その間に僕が仕留める」
「一人で楽しむってか！」
「あんたに動かれたら、命まで取りそうだからな。身動きできなくなる程度でいい。
罪は監獄で償ってもらおう」

一方、スリヴとガルデアは、殺傷したハンターの装備を物色していた。
「見ろ、スリヴ。こいつ、バーニングガン用の追跡弾を持ってるぜ！
もらいもらいー」

「ちっ、奴らの死体は無しか・・・まあいい、じわじわと追い詰めてやる。」

「んっ、何だこの小さい銃みたいな武器は」

「撃ってみりゃ分かるだろ」

「どーしたスリヴ、素っ気ないなー」

ガルデアは躊躇せずに引き金を引く。

すると、巨大な炎が現れ、辺りの木々を焼き尽くした。

「いい！ いいぞこれ！ これは俺がもらいー！

スリヴ、誘導弾はくれてやるよ」

「誘導弾か、奴等を倒すのに役立つな」

「またそれかよ。どーしちゃったんだ、お前、あんな奴等、簡単に殺せるって」

「まだ殺し足りないみたいね。何なら僕が相手をしようか？」

そこには、いつの間にか黒ずくめの男が立っていた。

「んだテメエ、死に損ないが。燃え死ね！」

手に持っていた武器の引き金を引く。

黒ずくめの男は、一瞬にして炎に包まれる。

「それはハンタープラスのスティグマだ。鉄をも溶かす高熱弾だが、僕には効かないよ
うだ」

唾然としているガルデアから、スティグマをむしり取ると、両手でバラバラにしてし
まった。

「てめえ、俺の新しいオモチャを！」

さながら西部劇のように、ぶら下げていた強化銃を左右の手でつかみ、男に向ける。

気づいたときには木に体をたたきつけられ、悶絶しているガルデアの姿があった。

「ふん・・・突き出した手の威力を、そのまま投げに転じたか。体術かなんかか？」

「まあ、そんなところだ。次は君の番だよ」

「俺に近づけるとするなよ？」

バーニングガンから発射された弾丸は、羽を広げ、黒ずくめの男に向かって軌道を変
える。

追尾弾か！！

スリヴは目を疑った。

なぜなら、黒ずくめの男は、自ら弾丸に向かっていったからだ。

自業自得

「追尾弾に弱点があるとすれば、急には曲がれないってことさ」

男は、弾丸に当たる直前、体を高速で動かし、右に逸れた。

追尾弾はそのまま真っ直ぐに飛び、標的を探すようにウロウロと周回し敵を補足した。

「まさか、んなアホなあ！」

スリヴは黒ずくめの男に顔を踏みつけられ、仰向けに転がった。

そしてすぐさまアーマーを捕まれ、無理矢理立たされる。

「君には僕の盾になってもらおう。自業自得だしな」

「じ、冗談はよせ！ 死んじまう！」

「何人も殺したやつの言っているいい台詞か」

「悪かった！ 謝るから・・・追尾弾が・・・」

「はあ？ 謝って死人が生き返るとでも？」

「追尾弾が・・・」

「一度死んだらいい」

黒ずくめの男は、スリヴの背中をドンと押す。

「ギャーッ！！」

弾丸が当たる直前、男は弾丸に向かって手のひらを突き出した。

すると、追尾弾は、後方に吹っ飛ばされながら爆発し、

2人は少しの被害も受けなかった。

スリヴは腰から崩れ落ち、そのまま気を失った。

やっとの事で痛みから回復したガルデアは、
隠し持っていた強化銃を取り出し、黒ずくめな男に狙いをつける。

次の瞬間、大男が現れ、頭すれすれに斧を叩きつける。
髪の毛がハラハラと舞い、寄りかかっていた木は滑り落ちていった。

「ちっ、気を失いやがった。お楽しみはこれからって時によ。」

「バルドルグ、やめときなよ？」

「・・・わかってるさ。〈イーグルウイング〉に入隊するんだだからな。

今のところ、一人も殺してないしよ」

「・・・何人か、意識不明の重体を出したけどね」

「死ななきゃいいんだ。目があるところで殺すようなへまはしないさ」

表沙汰になってないだけで、何人か殺してそうだな。

「ところで、このA級ライセンスの試験、ちゃんと続行するんだろうな？」

「心配ないよ。他に2人、生き残ってるしね。

・・・今、マザーツリーに到着したところさ」

「〈サテライト・アイ〉で見てるのか？ 便利だな」

「その時の天候によるけどね」

彼ら2人は、おそらく進化人だろうな。ここからマザーツリーまでは50キロ程度。
スタートから15分で到着とはね、なんてスピードだ。

マザーツリー

「意外と近くにあったな、マザーツリー」

「・・・そりゃそうに決まってるじゃん。今の俺のトップスピードだぜ？」

「そうか？ 余力がありそうだったけどな」

凶星。易々と実力は出さないっつーの。

「しかしなあ、マルク兄さんもピッタリ付いてくるとは思わなかった」
「んー、そうだな。以前の僕じゃあ付いていけなかつたろうね」
「何かあったってことだね？ 何があったの」
「・・・秘密」

こんにやろう。

「なら、最初にカードを見つけたら、聞かせてもらうからね？」
「はっはっは。譲るつもりはないよ」
「どうかなー、俺にはもう、場所がはっきり見えてるんだぜ？」
「僕にも見えてる。後はどう登るか、だね」

モリトは、ほとんど凸凹のない幹に飛びつき、いとも簡単に登ってゆく。
「不動を使えば簡単さ。感心しないで登ってきなよ」

空を飛んでもいいけど、あれはスピードでないからな・・・
そうだ、あれを使ってみるか。

エネルギーマクロ、No. 2、〈光の手〉！

「！？ 何だありゃ！」

マルクの手が輝いたかと思うと、その光がマザーツリーの上に向かって伸び始めた。

「マルク兄さんの、まさしく奥の手って感じだな！ 俺も本気出さないと負けちゃうぜ！」
モリトは手を離し、足だけで垂直に登り始める。
それはまるで地面を走っているかのように自然に。

「モリトも本気を出したな？ では参りましょうか」
マルクはまるでエレベーターに乗ったかのようにグングンと昇ってゆく。

「もっとスピードあげないと、先にカードを取れないぞー」
「げっ、速い！ あんなのありなよ！？」

さらに加速しながら上昇を続けるマルク

「見えてきた。マザーツリーの頂上だ」
頂上にはカードの束が入った袋がぶら下げてある。

「これで、僕の勝ちだな」

袋から1枚カード取り出し、にこりと微笑む。

「ちっくしょー！ やられたぜ・・・」

袋からカードを抜き取りならら、モリトは悔しがる。

「今度はゲートに帰るまで勝負！」

「懲りないねえ・・・」

それぞれの目的地へ

「あなた方は・・・＜ライダー＞さんと＜バイキング＞さんでしたかね。

ご協力、感謝しますぞ」

「ああ、それは通り名ですよ。本名はビリードルです」

「いいじゃねーか。通り名の方がしっくりくるしよ。

俺はバルドルグだ、よろしく」

「私はハンターポリスマスター、＜ハルドック＞だ」

「驚いた、マスター直々にお出ましとはね」

「いや、近場で＜ジーフ＞の目撃情報があつてな。

私が直々に出張ってきたが、結局見つけることはできなかった」

「ほほう、三大犯罪者の一人、キラー・ジーフか。

是非とも戦ってみたい相手だぜ・・・」

「A級ライセンスを持つハンターが返り討ちに遭ってるんですよ？」

「そもそもA級ライセンス試験が難しくもなさそうだしよ、

A級をA級、AA級、AAA級に分けてだな・・・」

「・・・やれやれ、あなたがそんなことを言ってる間に、

2人はゴールしましたよ」

「そういえば、あなた方以外に生き残りがいたんですね」

「ええ、彼らは殺戮が行われている際に、すでに距離をとっていましたからね」

「おい、俺等も早く行こうぜ」

「そうですね。ハルドックさん、後は任せました」

「ああ。直に医療班も到着するだろう」

「それでは」

「あんたとも一度手合わせをしたいところだがな。じゃあな」

2人は駆けてゆく、森の奥にあるマザーツリーへと。

「できれば、ハンターポリスに引き入れたかったんだがな。

イーグルウイングに入隊すると言われては仕方ないか・・・」

ハルドックは懐から葉巻を取り出し、おもむろに火をつける。

その頃、マルクとモリトはデソーと会話していた。

「お二人とも、素晴らしいタイムでしたよ。今までで最短です。

もっとも、私が管理者になってから、まだ3回しか試験は行われてないんですがね」

「そんな事より、マルク兄さんに負けたことが悔しいよ」

「順位なんてどうでもいいだろうに」

初めて会ったときは、僕の方が上だったのに・・・

何があったのか気になるー！

「ところで、マルクさんはダイマール氏の弟子ですが、モリトさんは？」

「モリトはシンドさんのご子息です」

「なるほど、あのシンドさんの・・・お父さんは元気でいらっしゃいますか？」

「元気も何も、今はシールドワールに行ってるよ。俺も連れて行って言ったら、

自分を守るのに手一杯だから今回は無理だ、だってよ」

「そりゃそうだよ、三大秘境の中で最も危険度が高いからね。

地上を切り開いた、あの3人を以ってして制覇は不可能と言わしめた程だし」

「中には、あそこに行く奴は自殺願望があるやつさ、という人までいますからね。

いかにシンドさんと言えども、かなり大変なことでしょう」

「あーあ、ライセンスを受け取ったら、こっそり後を追いかけるつもりでいたんだけどなー・・・

俺にはまだ無理か。ねえデリーさん、お勧めの所ない？」

「そうですね・・・私が行った中では、＜フリーディア＞でしょうか。

起伏が激しく大変ですが、その絶景は一見の価値ありですよ。

さらに食材も豊富です。別名、食彩の楽園とも言われていますからね」

「よし決めた、フリーディアに向かおうと」

「その前にキリスタに寄るんだろ？」

「おっと、楽しみすぎてライセンスを忘れるところだった」

「ではこれを」

デリーは2人にライセンス発行カードを手渡した。

「キリスタに行ったら、おいしい店を紹介するぜ。

もちろん、マルク兄さんのおごりでね」

その後、キリスタでライセンスを受け取り、モリトのお勧めである〈ベジタ〉で食事をとった後、

2人は別々の目的地へと向かっていった。

第9章 シェルドワール

秘境の管理者

猛烈な風が吹きすさぶ中、崖すれすれに男が立っている。

「やっと・・・たどり着いたぜ。長かったような、短かったような・・・」

そこは崖に囲まれていた。見渡す限り奈落の底が続き、その向こうには、漆黒の森が広がっている。

「不気味さしか感じられねえ所だぜ」

厚い雲から一条の光が差し込み、奈落の底を照らす。見ると崖の下にも森が広がっているようだ。

今まで見えなかったが、光のおかげで向こう側へと延びる吊り橋がなんとか確認できた。

「あそこがゲートか、しかしよお、なんて所に吊り橋を架けたんだか」

しばらく崖沿いを歩き、ゲートに到着する。

「ほほ、珍しい。客人じゃぞ、ばーさん」

「おやまあ、二ヶ月以来だねえ」

「・・・あんたら、ここの地区管理者か？」

「そうじゃよ？」「そうじゃが、どうしたかね」

「し、信じられん・・・普通、地区管理者は、その地区のライセンスを持ってなきゃならんハズだろうが。それに、こんな所でよく生き抜けてるな」

二人は満面の笑みでカードを見せた。

「ライセンスなら持っとるんじゃよ」

「そうそう、いつ取ったかかしらねえ？」

「んなっ！？ ますます信じられねー・・・そのカード、

ハンター協会ができて間もない頃のじゃねーか」
「そうじゃのう。ライセンスナンバーを見てみい、10番台じゃろ？」
「あの頃の協会は、おんぼろビルの一角だったねえ・・・」
「おや、”客獣”じゃ、jeeさん」
「あ？ きゃくじゅー？」
「そうかい、ばーさん。では、昼食にしようじゃないか」

そう言うと、スタスタと外に出て行くjeeさん。

「何だよ、きゃくじゅーって」
「獣のお客さんだよ。ウチらはそう読んでるのさ」
「なっ！ jeeさん一人じゃ危ねえ！」
「心配するでねえ」
「だがよ、あんたら、どんな武器で迎え撃つ気だ？」
「それに体力だって落ちてるだろうが」
「体力ねえ？ そんな事、考えたことも無いねえ」

エンドウは面食らった。
こいつら、なんで余裕ぶってやがるんだ？

「とにかく、俺も加勢するぜ！」
「それには及ばんよ。ホレ、もう帰ってきた」

扉が開け放たれると、猛獣を抱えたjeeさんが、
にこやかに微笑んだ。
「ばーさん、こいつはレアじゃぞう！」

グランウルフとコダト草

エンドウは目を疑った。

あの猛獣は<グランウルフ>！
しかし、毛の色が金色？

「驚いたねえ、まさか希少種の＜ゴールドグランウルフ＞かね

さすがに色までは見分けられないねえ」

「さすがは、ばーさん。グランウルフだと分かっておったか」

「そんな事より、じーさん、見事な息の根の止め方じゃ」

「この毛皮は百万ラース以上になるじゃろう。そんなものに

傷つけるわけにはいかんかったからのう」

「ちょっと待て、一体どうやって殺した!？」

「簡単じゃよ、手で心臓の動きを止めるだけじゃ」

「無傷でか? そんなことが出来るのは、俺等くらいだぜ・・・

ま、まさか!!」

「何じゃ、今頃気づいたのか」

「そうじゃよ。私らは”進化人”さね」

「ちっ、そういう事かよ・・・」

「さあさあ、ばーさん。飯にしようじゃないか」

三十分程して、巨大な鍋が運ばれてくる。

「肉をぶつ切りにして鍋に放り込んだだけのような料理だな」

「素材が美味しければ、料理はシンプルになるんじゃよ。

それに、これからが仕上げじゃ」

そう言い終わらないうちに、ばあさんが籠一杯の野菜を担いで現れた。

「おいおい! どんだけ入れる気だ?」

「これはね、＜コダト草＞さね。まあ見ててごらんささい」

籠からバサバサと鍋にコダト草が放り込まれる。

すると・・・

「溶けて・・・やがるのか?」

透明なスープが緑色へと変わり、肉をつまんでみると

スープまるごとくっついてきそうな程どろっとしていた。

「ささ、めしあがれ」

エンドウは大きめにカットされた肉をそのまま口に入れる。

おおっ!? 何だこの濃厚な旨みは!

今まで味わったこと、一度も無いぜ・・・

それにこの弾力、これスープか?

しかも！ ゴールドグランウルフもうまい！
この香りとベースの味は間違いなくこの肉から出たもんだろう。

・・・ピッタリだ。グランウルフとコダト草・・・
おそらく肉の臭みは、この草が消してるんだろ。

「jeeさん、このコダト草はどこに生えてるんだ？」
「うん？ この下じゃよ」
「・・・下？ おいおい、まさか崖の下なんて言うんじゃないだろうな？」
「その通りじゃよ？ こっちとあっちを隔てている、
　　<デス・キャニオン>に生えておるんじゃ」

5人の弟子

「あー・・・やれやれ、難しくも無いが面倒だな・・・
　　グツクルの親父に送ってやりたかったが」
「それじゃがのう、コダト草は採取後一時間も経たないうちに
　　食えなくなってしまうぞ？」
「んなっ！？ 早すぎるだろ・・・さてよ、食材保管庫ならどうだ？」
「残念ながら無理じゃのう。あまり研究も進んでないからのう
　　データが無ければ、タダの箱じゃ」
「ん、待てよ、今食ってるこれはどうしたんだ？
　　まさか崖の下まで採りに行ったわけじゃねーよな」
「ああ、これかね。エネルギー生命体を使って延命させとるんだよ。
　　これは、ばーさんの得意技でのう」

エンドウは頭をかいた。
このjeeさんばーさん、一体何者だよ・・・

「そういえばまだ聞いてなかったねえ、あんたの師匠は誰なのかね」
「ダイじいだが」

「あらまあ、ダイマールのお弟子さんかい」
「ダイじいを知ってるのか？」
「あいつとは一緒に修行した身じゃよ。
あの<三勇士>の一人、<レイジ>師匠の元でな」
「な、何！？ レイジって”地図のレイジ”か！？ 参ったな・・・」
「レイジさんは、今ダイマールがやってるような、進化人の
育成に積極的でねえ」
「そうそう・・・はて、弟子は何人じゃったかの、ばーさんや」
「たしか・・・<スルド>、<ネイミア>、ダイマール、
<マンディル>、<ディガス>、だったかねえ」
「知らん名前ばっかだな」
「スルドは、わしの名じゃ。ネイミアは、ばーさん」
「マンディルからは<バクダロア>の実が送られてきたわよねえ」
「そうじゃな。そういえば、ディガスはシェルドワールに入ったきり、
音信不通じゃった」
「・・・ダイじいみたいなのが五人もいるとは。しかしよお、
ハンターランキングに、聞いた名前は載ってなかったような」
「わしらは隠居みたいなもんじゃしろう。
表だって活動してるのはダイマールくらいじゃ」
「そうねえ、ダイマールはレイジさんの力と意志を継いでるから」

・・・色々知りたい所だが、あんまり深く聞くわけにもいかねーしな。

その後、エンドゥは食事をし終え、別れの挨拶を述べた。

「気をつけるんじゃよ。慣れない内は”表層”までしておくんじゃ」
「そうそう、”中間層”まで行くとカイダルマンバスに出会う
危険が多くなるからねえ」
「”深層”はカイダルマンバスの寝床だと思えよ。お主の目的地も
そこにあるんじゃがのう」
「十年くらいいる気持ちで挑みなさいよ。焦りは即、死に繋がるからね」
「あー、分かった分かった。全くよお、気が滅入るじゃねーか。
俺はあんたらの子供じゃねーんだからよお」

そう言うのと、エンドゥは吊り橋をズンズンと渡っていった。

「あんたらの子供、か・・・息子が生きてれば今頃は
あのくらいの年齢になっておるかのう」
「そうですねえ。孫はもう大人になっているでしょうね・・・」

荒っぽい歓迎

「あ、そいうや名前を名乗ってなかったような・・・
まあいいか」

唯一の出入り口である、この吊り橋・・・
やたらと揺れるし、中央部分は今にも反り返りそうだ。
どうやら、崖の中心は突風が吹き荒れてるよーだな。

進むにつれ、風が激しくなっていく。
「どうやら、溪谷に沿って風が流れてるな。
まるで巨大な竜巻に突っ込んで行ってるみてーだ・・・」

もちろんエンドゥは何事もないように吊り橋を歩いて行く。
手も使わずに。
普通の人なら手を使ってでも振り落とされる中央部分を過ぎ、
しばらくすると風が止んだ。
「なるほど、面白いねえ。
シェルドワールは竜巻の目の中にあるって事か」

エンドゥは視線を感じ、目を向ける。
そこには、全身真っ赤な鳥が数羽止まっている。

「出やがったな。シェルドワールの門番、＜ブラッドレッド＞！」

ブラッドレッドは飛び立つと、エンドゥに狙いを定めた。

「歓迎しようじゃねーか。十本指”レイン”！」
手を交差させ、爪を伸ばすようにイメージする。
エンドゥの手の中では、最も弱い攻撃力だが、
その分、広範囲に尖鋭を広げることが出来る。

まずはこいつで小手調べと行くか。

生み出された薄く鋭い刃が、ブラッドレッドを襲う！
が、迫ってきた勢いで後方に飛び退き、荒くなった
刃と刃の隙間をすり抜けた。

「んなっ！ 何の動作も無しで後方に飛び退いただと？
本当に鳥か、こいつら・・・」

しかし・・・奴ら、俺の刃が見えるってのか？
あんな的確に避けるとは。
あるいは、微弱な空気の振動や圧力を感じているのか。

「オラ、どーした！ 俺を食いたいんだろ？
襲ってこないと獲物は手に入らねーぞ」

ブラッドレッドはお互い目配せをし、その中から三羽が飛び出した。

何を企んでる？
ま、近づいてくれればこっちのもんだがな。

三羽のブラッドレッドが、お互い顔を近づけたかと思った次の瞬間、くちばしを擦り合
わせ・・・強烈な炎の玉が生まれた！

「んなっ！？」
吊り橋は炎に包まれた。

ガンガルヴァン

「危ねーな！ 火の玉のスピードが速ければヤバかったぜ。
さっきの素早い後退は、口からガスを噴射してやがったんだ」

エンドゥは、急加速して橋を渡りきっていた。

「炎は、どう避ければよかったんだったか・・・
最強の生命体を壁か膜のようにすれば防げたか」

ブラッドレッドは目配せすると、ギァギァと
けたたましく鳴き始める。
すると、あちこちから集まってきて、
数十羽もの大群となった。

「おいおい、俺一人狩るのに、どんだけ頭数を揃えやがった？」

その数十羽ものブラッドレッドは、一斉に口を開け、
何かを吐き出している。

「・・・濃度が高いお陰で、可燃性ガスと空気の境目が見えていやがる。
だが、その攻撃はもう無意味なんだがなー。
・・・一手、”抑圧の壁”」

手のひらを前に向け、そのまま押し出す仕草をすると、
発火したばかりのガスが、鳥に向かって押し返された。

ギァアアア！！

火だるまになったブラッドレッドは、断末魔をあげながら崖へと落ちてゆく。
何とか炎を免れた数羽も、戦意を喪失し、どこかへ飛び去っていった。

「成る程な、大量のガスを吹き出したせいで、
回避する分が残されてなかったと・・・門番も形無しだな。
カイダルマンバス以外、強そうな奴はいないのか？」

エンドゥは視線を感じ、森の奥を見る。
暗闇に二つの目・・・

その目を見た瞬間、無意識に剣を引き抜いていた。

ま、まずい・・・体の自由がきかねえ。
剣は引き抜けたものの、意味をなさないぜ・・・

まるでエンドゥを品定めするようにつめていたが、

奇妙な鳴き声が聞こえたかと思うと、次の瞬間には姿を消していた。

「アイツが＜ガンガルヴァン＞・・・目を見ちゃいけないのは
分かってたがなあ、思わず見ちゃった。手強いぜ・・・」

今度出会ったら、四の五の言わずに切り刻む。
そう思いながら歩いていると、突然足下をすくわれた。

ちっ、心速が追いつかねえ！

倒れ込む先には大きな穴があり、エンドゥを待ち構えている。

「思い通りに行くと思ったか？」

剣を近場の木に突き刺し、体勢を立て直す。

「ん？ 何だこの感覚・・・」

刺した剣を引き抜くと、木から血が噴き出した。

「・・・木じゃねーや。木に擬態してた猛獣を
偶然刺しちゃった」

擬態していた猛獣は、擬態したまま倒れ、穴の中へと落ちていった。

「一瞬も気が抜けない、恐るべき地区だぜ・・・」

ジャイアントジョイント

全くもって、いい修行になるぜ、ここは。

エンドゥが一步踏み出すごとに、多彩な攻撃が
怒濤のごとく降りかかってくる。

「確かに、じーさんばーさんの言うとおりで。
とりあえず表層で体を鍛えねーとな」

そう言ってるそばから、藪から蛇が出てきた。

「おっ、〈ジャイアントジョイント〉かよ。にしては小さいが」

ジャイアントジョイントが体をくねらせ、飛び上がって襲いかかる！

剣を引き抜き、一刀のもとにたたっ切る寸前、
大量のジャイアントジョイントが茂みから飛び出してくる。

「最初の奴らはおとりか！ 地面にくっついて動かない奴は
認識しづらいぜ」

エンドウを覆って隠すほどの量で襲いかかったが、
硬化しているため毒牙にかかることは無い。

・・・五本指、クロウ！
体を回転させながら腕を縦横無尽に振り回す。
すると、集っていたジャイアントジョイントは一匹残らず振り払われた。

「なんてこった、クロウならまるごと切り裂けると思ったんだが・・・
たいした被害は出てねーようだな」

振り払われたジャイアントジョイントは、体から粘液を出し、
お互いに絡まり始める。

「・・・はじめっから奥の手を出しやがれ。
なるほど、確かにジャイアントだよ、お前等は」

見る見るうちに巨大な蛇に姿を変え、素早い動きで襲ってきた。

「お見事だよ、その連係プレーは」

ジャイアントジョイントが尻尾を一振りすると、
近場の木々が根こそぎ吹き飛ばされる。

「ほほー、連結は相当頑丈だな。まるで接着剤でくっつけたみてーだな」

次の瞬間には、かみ砕かんばかりに大口を開け、再びエンドゥを襲う。

「動きも相当速い。が、俺の敵じゃねー」

ジャイアントジョイントは勝ちを確信した。
獲物は諦めたのか、身動き一つしない。

頂いた！

口を勢いよく閉じる。
が、閉じる瞬間、エンドゥは姿を消した。

振り返ると、自らの体が輪切りにされてバラバラになっている。
ジャイアントジョイントは慌てて連結を解き、
散り散りに茂みに逃げ込んでいった。

懐かしい声

「一時的に強化のリミッターを外してみたが・・・
この地区では外しっぱなしの方がいいかもな」

強化ばかりに頼りすぎるのでリミッターをつけてみたが、
そのお陰で硬化の力が順調に伸びたしな。
そろそろ併用してもいいだろう。

剣を鞘に収めた、その時、空から何かが降ってきた。

「うわっ、急に土砂降りの雨かよ・・・ん？ 何だ、
雨にしては粘っこい・・・これはヤバい！」
エンドゥは動こうとしたが、時すでに遅く、
体は身動きできないほどに固まってしまっている。

リミッター解除！

辺りにミシミシと音が響く。
体を覆っていた謎の液体はヒビだらけになるが、
次から次へと降ってくる液体が、それをカバーしていた。

「ちっ！ 冗談だろー！？ 手も足も出ねーなんて！」

このままじゃヤバイ・・・そして、よりによってこんな時に会うとは。

刺すような視線。
奴だ、間違いねえ。

気配を感じた瞬間から目を閉じていたエンドウ。
ガンガルヴァンの束縛視は、なんとか逃れることができている。

身動きが取れないのは変わらないがな。
さて、どうする？ 俺の硬化でガンガルヴァンの爪や牙に勝てるかどうか・・・

ガンガルヴァンは音も無く近づいてくるが、
戦闘領域内なので、その姿をありありと感じ取ることができた。

しばしの沈黙の後、恐るべきスピードで
首へと噛みついてくる。
だが、寸前で首に硬化を集中できたお陰で
何とか噛みつぶされずに済んでいる。

ちいっ、速い！ 読みが外れたらヤバかった。
攻撃なんてする間もねーぞ。

再び狙いを定めるガンガルヴァン。
その時、聞き覚えのある鳴き声が聞こえた。
すると、エンドウを諦め、闇へと姿をくらます。

何だ・・・？ 奴はどうして消えたんだか・・・む！

戦闘領域に、二足歩行する動物が入ってくる。
「やあエンドウ、久しぶりですね」

こ、この声は！

シンド

エンドゥは目を開けた。

「懐かしい顔があるな。ポヤッとしてると、てめーも固まっちゃうぜ？」

「心配ない、これはただの雨だ。そろそろ君も動けるようになる」

「何だって？」

体を試しに動かしてみる。

今までがっちり固まっていたのに、今はなんとか動かすことができる。

「＜タマルカ＞の樹液だ。見てみなさい、枝の一部が膨らんで穴がたくさん

開いているだろう。ここからシャワーのように樹液を出すことで、

獲物の身動きを封じ、溶かして養分にするんだ」

「ふん、駄作だな。雨で柔らかくなるんだからな」

「硬化のお陰ですよ。生身の体なら一時間ほどで全て溶解する・・・」

二人の間に、しばしの沈黙が訪れた。

「久しぶりだな、シンド。ガンガルヴァンが身を引いたのはお前のお陰だろ」

「君が吊り橋を渡ってるときから奴は君に興味があったからね。

一度鳴き真似で追い払っても、執拗に君をつけていた。他人の戦闘スタイルに

ケチをつける気は無いが、空識を柔軟にした方がいい」

「ちっ、あの時も助けられていたのかよ・・・空識に関しては

お前の言う通りかもな。で、鳴き真似って何の真似だよ」

「＜サンダースピア＞と喚ばれる鳥の鳴き真似だ。彼らの天敵だよ。

上空から音も無く、恐るべき速さで襲われるから、鳴き声一つで表層の猛獣は

慌てふためく。君も気をつけた方がいい」

「なるほどな。所で、お前も最後の試練を？」

「いや、そういうものには興味が無い。今は＜アモンティキラ＞について

研究している。通称、＜歩行植物＞と喚ばれる、根を足のようを使い至る所に歩き回ること知られている」

「・・・あ、そう」

「もうサンプルは手に入れた。ここでは研究に没頭できないからな、お別れだよ。最後に忠告しておくが、ガンガルヴァンを簡単に倒せるまで、中間層には行くな」

「んな事は分かるっつーの。・・・お前は行ったのか？」

「深層まで散歩をした。帰りにカイダルマンバスに襲われて、腕を一本持っていかれるところだったよ。彼らに狙われたら最後だね、比類無きスピード、パワーだ・・・」

シンドは袖をめくりあげ、無残な傷をさらけ出した。

「うおお！？ ほとんど皮一枚で繋がってるだけじゃねーか！

よく逃げられたな・・・」

「私が長年掛けて作り上げた＜以心伝心＞を使ったんだ。彼には強烈な痛みを与えてやった。お陰で一命は取り留めたが、治療に一週間も要してしまった」

「・・・そもそも、こんな所に普通の服着てよく来たもんだぜ」

「どのみち、私に触る事なんて不可能だと思っていたからね。

それにカイダルマンバスに防具は無意味だ」

「ま、それはそうだが・・・」

「では、さよならだ。健闘を祈るよ」

そう言うと、シンドはエンドウに背を向け、あっという間に目の前から消えた。

「おいおい、俺でも目で追うのがやっただぜ・・・

あれでも奴に勝てないってのか。会うのが楽しみだぜ、全く・・・」

グループブラス

著 薪坂 史柳

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
